

(題字松陰先生筆蹟擴大攝影)

昭和二年十二月發行

校友會雜誌

第貳拾六號

山口縣立萩中學校校友會

奉 悼 歌

一地にひれ伏して天地に

いのりし誠いれられず

日出づる國の國民は

あやめもわかぬ闇路ゆく

二大葬の今日の日

流るゝ涙はてもなし

さらさらの空春淺み

寒風いと身には泌む

文學博士 芳賀先一 謹作

山 縣 立 校 友 會 雜 誌

第 貳 拾 六 號 目 次

奉 悼 歌

大 正 天 皇 本 校

田 中 閣 下 御 寄 贈 の 明 治 大 帝 御 尊 像 に 就 て

奉 悼 記 事

特 別 記 事

告 別 の 辭

岩 田 前 校 長 を 送 る

岩 田 校 長 先 生 を 憶 ふ

岩 田 校 長 先 生 を 送 る

岩 田 校 長 先 生 を 慕 ふ

岩 田 校 長 先 生

就 任 の 辭

河 内 新 學 校 長 を 迎 ふ

本 欄

英 文 欄

Our school works Exhibition

Great Susu

The newspaper

"Japanese-Europeans" and "Modern girls"

S. Yamamoto

T. Shimizu

T. Matsura

S. Miyazaki

香 川 一 三

河 内 野 才 三

井 野 希 一

赤 野 秀 二

岩 田 武 彦

辻 永 明

岩 田 博 三

田 博 三

岩 田 博 三

岩 田 博 三

岩 田 博 三

岩 田 博 三

岩 田 博 三

岩 田 博 三

岩 田 博 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

三 内 才 三

秋 芳 洞 探 勝 記

朝 風 景

山 朝 立

夕 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

山 朝 立

岡 田 謙 太 郎

八 木 哲 夫

南 正 之

岡 田 正 之

永 正 之

豐 田 正 之

田 中 正 之

金 田 正 之

大 藤 正 之

波 野 正 之

高 松 正 之

五 松 正 之

岩 武 正 之

渡 邊 正 之

原 直 正 之

松 浦 正 之

三 浦 正 之

田 中 正 之

赤 木 正 之

山 根 正 之

伊 藤 正 之

岩 本 正 之

池 上 正 之

鈴 木 正 之

森 本 正 之

山 本 正 之

山 本 正 之

山 本 正 之

山 本 正 之

山 本 正 之

山 本 正 之

山 本 正 之

山 本 正 之

山 本 正 之

山 本 正 之

山 本 正 之

山 本 正 之

山 本 正 之



昭和二年七月七日東京に於ける大儀喪に参列する岩田前校長

大正天皇ト本校

- 一 明治四十一年四月十日午後四時山口町ニ行啓中ノ 東宮殿下ノ御使本城侍從武官御來校五年級英語科四年級動物科ノ授業參觀後校舎ノ内外及圖書館ヲ視察セララル
- 一 同年同月十一日職員生徒一同山口町ニ旅行シ翌十二日午前七時 殿下ノ御還啓ヲ奉送ス
- 一 大正四年十月二十七日 御聖影奉戴式ヲ講堂ニ舉行ス
- 一 同年十一月十日午後一時三十分ヨリ御大典奉祝式ヲ舉行シ午後七時半ヨリ奉祝提灯行列ヲ催ス因ニ御大典記念トシテハ車廻ニ士規七則ヲ刻メル石碑ヲ建テタリ
- 一 同年十四年五月十日御大婚滿二十五年祝賀遙拜式ヲ舉行ス
- 一 同年十五年十二月二日御懷御平癒祈願ノタメ縣社春日神社ニ參拜ス
- 一 同年同月二十五日崩御ニシキ午後三時ヨリ講堂ニ於テ奉悼遙拜式ヲ舉行ス
- 一 昭和二年二月四日御大喪儀參列ノタメ縣下ノ中學校ヲ代表シテ學校長岩田博藏上京ス
- 一 同年同月六日午前十一時ヨリ生徒一同ニ對シ學校長代理山本光二教諭ヨリ 光帝陛下ノ御治世ニ於ケル御事蹟ノ謹話アリ 聖徳ヲ偲ビ奉ル
- 一 同年同月七日學校長ハ東京ニ於ケル御大喪儀ニ參列ス
- 本校ニ於テハ午後六時運動場ニテ御大喪儀遙拜式ヲ舉行ス

田中閣下御寄贈の明治大帝御尊像に就て

會長 河内才三 謹記

余十一月十日帝都を辭するに際し、告別の爲め田中閣下の青山私邸に伺候す。閣下親しく余を引見せられ、余の任地に赴くを幸に 明治大帝の御尊像を本校に寄贈すべければ、宜しく本校教育の資料となすべしと。感激措く能はず、鞠躬如々として、これを拜し、捧戴し來る。これ本校の榮譽たるのみならず、不肖一個の光榮とする所なり。

明治大帝の御盛徳御鴻業に到りては、宏大無疆日夕景仰尊崇措く能はざる所なり。吾等常に其御尊像の御英姿を拜することを得、須らく克く閣下の御趣旨を體し、義勇奉公の誠を竭し、閣下の御高恩に酬ゆる所なかるべからず。

一明治天皇御尊像 壹基

右萩中學校へ寄贈ス

昭和二年十一月十日

男爵 田中義一

萩中學校長河内才三殿

右は昭和二年十一月十日田中義一閣下より 明治大帝御尊像を本校に御寄贈の際の御書面を轉載せるものなり。



奉悼記事

大正天皇の御聖徳を偲び奉る

明後七日長くも 先帝陛下の御大喪儀を行はせらるゝに際し、聊か 御聖徳の一端を述べて御追慕の意を表したいと考へます。先づ内治のことから申しませう。

(1) 内 治
陛下御在位十五年の間天資御聰明にして誠に治を勵み給ひ万民太平の恩澤に浴したるは申す迄も無い事ではありますが、其間に於て往々宸襟を惱まし奉つた事もあります。先づ御在位中は内閣の交迭甚頻繁で大正元年西園寺内閣先づ瓦解して桂内閣となりしに、それも翌年には瓦解して山本伯内閣を組織したるに其翌年には又瓦解すると云ふ有様にて、御登極後間もなきに斯く政變層ならざる事につきては如何程にか御心を痛めさせ給ひし事と思ひます。今の内閣は實に 陛下御登極後第十一次内閣であります。

次には經濟問題の切迫であります。是は單に我國のみの問題でもありませんが、物價大に騰貴して大正七年八月には各地米騒動の不祥事あり、其際陛下には痛く御身を責め給ひて賢所に伏禱し給ひしと漏れ承るだにも畏し、其後政府の施設により米價は次第に調節されしも物價は依然高直を持續し、加ふるに年々貿易は輸入超過にして之を補ふの資源なく寂慮安からざりし事も一通りで無かつたと思ひます。

次には天災屢々起りし事であります。大正三年一月の櫻島大噴火を始めとして火山洪水往々人畜を害し、折々惡疫の流行あり、特に大正十二年九月一日關東大震災は我が國史にも曾て見ざるの大慘事で、帝都を中心に多くの人命を失ひ道路村落の破壊は今日之を追想するさへ物すこき極みでありました。

是等の多難現象と相須ちて尤も識者をして憂慮に堪へざらしめたるものは、國內民心の惡化と急變とであります。是亦我國のみの問題ではありませんが、我國は萬世一系の皇室を戴き古來上下能く和衷協同し來つた國で、決して外國の如くに階級の隔り甚しく富者が貧者を虐げるといふ程の事ありませんに、露獨革命の氣分に影響されて共產過激の思想我國に入り來り、放縱輕佻の風と相混じて動もすれば國礎を危くせんとするの恐もないではありません。加ふるに勞働爭議など頻發して陛下の軫念を煩はすこと多く、遂に國民精神作興の詔書を下し思想善導の基準を

與へ給ふに至つたのであります。

(2) 外交

以上は内治の梗概であります。次に外交上の事は如何と申しますと是亦頗多事でありました。歐洲大戰の起りをなしたる埃匈國皇太子フアージナンド大公のサラエホに於て暗殺され給ひしは、我國の大正三年六月二十八日でありました。間もなく歐洲列強は同盟聯合の二軍に分れて干戈相見ゆるに至り、我國も八月二十三日には遂に獨逸に宣戰して日英同盟のために兵を青島に出し十一月七日之を畧取して引續き歐洲に海軍の一部を出動せしめたのであります。斯くて大正九年三月十二日には尼港に於けるバルチザン暴行事件の起るあり、我が同胞多く慘殺されたるを以て我が陸海軍は急に動員して、北サガレンを占領、次で赤化防止の必要上英米と共に兵を西比利亞に出したのであります。

されど我が聖皇の聖旨は全く世界の和平を希ひ給ひて、ヴェルサイユ會議華府會議國際聯盟會等に於て凡て公明の議を執り、常に平和の保持を目的とし給ひしことは世界の認むる所にして、今回の崩御の報傳はるや、歐米諸國の新聞紙は切に哀悼の記事を載せて居ります。

陛下、清明の徳と國光の輝く所御在位中にポリビヤ、バラグワイ等の南米諸國及スロバキヤ、波蘭の新興諸國とも歡善の條約を結び給ひ、對露外交も亦英米に先ちて復舊親和するに至りたる

は皆帝徳の高きによる事と思ひます。

(3) 御高徳

以上述べたる歐洲大戰に國威の發揚したる如きは、これ大に陛下の御武徳を語つて居るものであります。

明治四十年 陛下には皇太子として韓國に行啓し給ひ、御即位後は特に新附の民を愛撫して閣臣に大に新領土の治蹟を擧げさせ給ひたること及び國內災害の至るや常に内帑を頒ち與へ給ひ、御成婚記念には青年處女の上に軫念して其の團體に御下賜金ありたる如き何れも大なる御仁徳を語るものであります。

陛下の御在位中世界の學術は驚くべき進歩をなし、文化の向上は又非常なことであります。布哇からの無線電信が初めて我國に到達したのは大正四年二月二日の事で我國の學界に大なる衝動を與へましたが、爾後十年ならざるに世はラジヲの世の中となり、空には航空船、飛行機、海には潜航自在の世となり萬事皆この有様を以て進歩したのであります。先帝陛下は深く大勢に鑒み給ひ學術を奨励して恩賜賞の制を設けしめ、大學以下高等の學府増設、社會教育、成人教育等の事にも大に計畫を進めしむる等の御治蹟があります。昨秋十月三十日より世界の學者を東京に集めて第三回の汎太平洋學術會議を開かれ、一には我國の學術を世界に紹介し、一には太平洋

の中心國として學界及世界の平和に貢献するの著大なる成果を擧ぐるを得られたる等誠に御治世中の盛事であると考へます。

陛下は皇太子時代より屢各地に行啓して風土民情を察し給ひしが、還啓遊ばすや如何程に御疲れの際にも御就寢前には必ず其日御見學の次第を細かく御日記に認め給ひ、政務にも非常に御勵遊ばし、苟くも疑義あれば充分に御納得遊ばすまで種々の人を召して御下問あり、一旦御諒解遊ばすや御裁決流るゝが如くであつたと申します。御祖先に對して御追孝の御心特に深く 先々帝の御ためには特に明治神宮を設けて之を奉祀し給ひ、近くは 長慶天皇を皇統に列したまふの御事なごあり、地方行幸啓に當りて或は警戒のために電車の往來を停むる如きことなからしめ、或は地方民を煩はさぬやう簡單質素を以て事を行はしめ給ひ、或は少女の負傷せるを見舞せられ病苦の車夫に御杖を賜ふ等御仁心の溢れは一々記さんも畏き極みであります。

(4) 國運發展

先々帝以來隆々たりし國運は 先帝陛下の御治世中に益々發展して、歐洲大戰後は南洋諸島我が統治内に入り、帝國の地位は一躍して三大強國の一に加はり、内國産業の發展は頗る著しく大正元年に十七億五千六百餘萬圓なりし諸會社の拂込資本は大正十四年末に百十億圓以上の巨額に達しました。準備正貨は三億五千百萬圓より十二億四千二百萬圓に増加して能く國力の發展と共に

に經濟の安定を得、鐵道は十五年間に六千十四哩より一萬二千哩に延長したる等何れも國力發展の一例であります。

(5) 我縣との御縁故

先帝陛下は御年三十四歳にて 明治大帝の後を承け給ひ舊臘寶算四十八歳にて御登遐遊ばしましたが、防長出身の元勳遺老中猶親しく左右に侍するものあり、我縣に對しては特に御感想の深かつたこと、拜察されます。二十三歳にして下關に行啓し給ひ、二十九歳にして山口に行啓し給ひ親しく元老出身の地を御視察になりましたのが、明治四十年の四月で縣立教育博物館は其の記念に出來たものであります。

大正五年九州大演習の行幸に當り、十一月十六日防府町に御駐輦遊ばした事もあります。今や九重の大宮は愁雲深く鎖し、八千餘萬の國民は憂愁の色深く多摩陵に靈輦の向はせ給ふを奉送するの日となりました。國民の誰もが聖恩の疆りなきに永く奉答の至情を披陳すること申す迄ありませんが、勤王の史實に富む我縣の青年子弟としては一般忠誠の微衷を捧げねばならぬ事と思ふのであります。

昭和二年二月六日、岩田學校長は縣下中學校長を代表して御大喪儀に參列の爲上京中に就き、學校長代理として山本教諭の謹語されたるものを録す

御大喪儀に參列して

前會長 岩田博藏謹話

今度私が縣下の中等學校を代表して御大喪儀に参加が出來ました事は、私一個人の光榮と存するばかりでなく、これは教職員生徒諸君一同が參列の基礎を作つて下さつた事でありまして、洵に感謝の至に堪へぬ次第であります。

偕、これから私が參列致しまして、親しく拜觀しました御大喪儀の模様及びそれに就きましての感想を大体お話ししようと思ひます。

私に縣下の中學校を代表して、御大喪儀に參列せよとの命令が縣廳から下りましたのは一月廿六日でありました。そこで大禮服の準備など致しまして、二月一日には早くも停車場に交渉して東京行の切符を買ひました。御大喪儀には、各地方から參列する代表者或は鹵簿拜觀に出かける團休等で汽車は混雜するだらうから、どうしても早く汽車に乗り込む手續を執つておく必要がある。萬が一豫定の列車に乗り込み得ず、參列の重任を果すことが出來ないやうな事になるといけないと思つたからであります。もうその時でさへ、二月四日東京行特急の切符はたった一席しか

残つて居ませんでした、特急の切符は、普通は大抵乗車當日の四日前から賣出すのが例でありますのに、今月は實に九日前より賣りましたさうで、この一枚の切符のために私の日程は洵に萬事都合よく行つたわけでありませぬ、準備と云ふ事は、徹底的に手落ちなく敏捷にやる事が、とりわけ大切だと思ひます。

準備滞りなく整ひましたので、愈々私は二月四日の夕方自働車で小郡に向ひ、午後十時三十分の特急で上京の途に就きました。車中では本縣の大森知事、庄元縣會議長と一緒に居まして共に窓外に積る皚々たる雪を見ては、東京の天候を案じ御大喪の行列はどうであらうと氣遣ふ次第でありました。

汽車は無事に五日午後八時二十分東京驛に着きましたが、其日は東京は大雪で夜も霏々として降つて居ました。明くれば六日、此の日は打つて變つた好天氣でありましたが、昨日來の大雪で道路はひどく泥濘つて居ました。その日は午前文部省に出頭して種々の手續を承りまして、愈々御大喪儀の行はるゝ二月七日を迎へたのであります。

七日も前日と同じく空は晴れ洵に好天氣でありましたが、寒さは相當厳しくありました。私は午前中の閑暇に學校關係者を歴訪しました。それが案外手間取つて、歸宿したのは午後三時頃でありました。その往來の途上で目撃した事ですが、朝の内から御通路に當る道路は整然と掃淨め

られ未だ九時頃であるのに、鹵簿拜觀の群集が既に座席を占めて待受けてゐる者が非常に多かつたのです。それから午後五時迄に、私は大禮服を首尾良く着け了つて宮城正門外北側に設けられた參列の場所に赴きました。其時はもう御濠端附近は、鹵簿拜觀の大群集で御道筋は何處も一杯でありました。

百一發の弔砲が鳴り初めました。愈々午後六時宮城を靈輜御發引の時刻であります。弔砲約二分置き位に、般々と鳴り響いて居りました。丁度私が參列して居りました位置は、私の列の前に八人の人が居ましたので、靈輜進御の際は、聞ゆるものは、音樂と軍隊の喇叭と靈輜の軋る七色の哀音とのみ、見ゆるものは衣冠束帶の冠と大禮服の帽子と僅かに靈輜の御屋根のみでありました。斯うして六時に御發引になりました、私が鹵簿内に參列のため第一歩を踏み初めたのは正に六時十四分でありまして、一分間八十三歩五十米突の割合で進行したのであります。鹵簿は蛇々一里半の長きに連り、所定の御道筋を通過して二時間と三十分かゝつて、新宿御苑の葬場殿に到着しました。九時頃であつたと思ひます。

葬場殿内で私の著床した位置は、丁度左幄舎の中央でありました。

そして九時十分、いとも嚴肅裡に、葬場殿の御儀は始まつたのであります。私共は左右幄舎内に設けられた信號燈に依つて行動致したのですが、その順序はこの表の通りでありました。

皇族王族公族及各國特派大使特派使節幄舎に著床 天皇皇后皇太后三陛下幄舎内に出御 御饗幣物を奠す 祭官長祭詞を奏す 天皇陛下の諱詞 天皇皇后皇太后三陛下御拜禮 皇族王族公族及各國特派大使特派使節拜禮 内閣總理大臣宮内大臣各諱を奏す 諸員一齊拜禮 幣物御饗を撤す 天皇皇后皇太后三陛下入御 皇族王族公族及各國特派大使特派使節退下 幔門を閉つ	青 赤 青 赤	起立 著床 外套を脱し起立 外套を著し著床	信號燈 諸員の行動
--	------------------	--------------------------------	--------------

て、此の御發車を驛にても御見送り致し、零時四十分には其驛を發した省線電車に乗り東京驛に着き降車しまして、歸宿したのは午前一時三十分でありました。翌日も亦非常に快晴でありまして

この表の内、外套を脱し起立して居た間は約一時間、諸員一齊拜禮は正十一時の豫定の處、これは十三分早く十時四十七分に行はれました。さうして一切の御儀が済んだのは、十時五十分でありました。それから私共は、幄舎前に臚列して靈輦を御奉送申上げたのですが、靈輦奉戴の御汽車は、翌日午前零時二十分千駄ヶ谷驛から東淺川の多摩御陵地に向つて御發車になりました。斯うして私は參列の大任を無事に終る事が出来まし

早朝より出懸けまして山縣公爵、田中男爵其他の方々を訪問して其日を送り、翌九日朝退京した次第であります。

今度の御大喪に就きまして感じた事は澤山ありますが、その二三を申し上げますと、あのスポーツの宮様として一般國民が御慕ひ申上げてゐる秩父宮殿下の御事であります。殿下は今上陛下の御名代として、宮城より新宿御苑の葬場殿迄靈輦に御付き遊ばされたのでありますが、夜間は實に零度以下十餘度との事で、足の先などはジツと立つて居れば痺れるのです。私共は大抵マントか外套を着けて御供しましたが、殿下は其夜の御儀の濟むまで終始御外套を御召しになりませんでした。洵に畏多いとも何とも申上げられない程尊嚴の感に打たれた次第であります。

又鹵簿御通過の御道筋には、陸海軍兵士が堵列し、その後には團體の拜觀者、その後には一般國民の拜觀者が坐つて居りましたが、見渡す限り人の頭ばかりで、おびたしい人出に驚きましたが流石は日本臣民であります。再び歸りませぬ大行幸を御送り申すに、あたかも水を打った如き静肅さであつたのにはいたく感激致しました。その靜謐壯嚴な御道筋は清潔は勿論の事、眞砂が敷き詰められ、白と黄の布を下げた神々しい大眞榊が立ち菊の御紋章入りの大小提灯がごもり、篝火焔々と燃わ、大小の電燈其間に立ち柱は皆黑白の布で巻いてあり、眞に俗世界を超越した神秘的光景を現出してゐたのであります。私は總て此光景を以て國民一同の忠誠、孝愛尊敬の象徴

と見ましたのです。

又堵列兵の中には、晝間から極度の緊張裡に御警衛申上げた爲と、厳しい寒氣の爲とでもありませうが、續々倒れる者を見受けました時には洵に何とも云へない神々しい氣分になりました。この軍人と云ひ、一般國民の態度と云ひ、何と云ふ頼母しい情景でありませうか。私はこれを見て、國家の將來又眞に安全なりと深く、感得した次第であります。

偕又一切の參列人員を聞くと、鹵簿内奉送者並に參列員、儀仗兵、堵列隊、宮内大臣以下の大喪使、諸役員等を合すると實に其數二萬九千七十三名に上り、警視廳は一般拜觀者を百五十万人と發表しました。

私共が赤阪表町の邊を通過の際に、左側の方から活動寫眞を頻りに撮影してゐましたが、私は最左側に居つて進行してゐましたので、或は寫されてゐるフィルムがあるかも知れませんが申して置きます。

最後に今度の御大喪に參列致しまして、一首和歌を詠みましたから、讀みまして此の謹話を終ります。

萬民一つ心のまごゝろにやがて昭和の御代を見わけける。



特別記事

告別の辭

前會長 岩田博藏

親愛なる諸君、いつかは御別れの御挨拶をしなければならぬ事とは思つてゐましたが、かくも意外の時に加之甚以て相濟まぬ事件の爲に其時期を早めました事は遺憾恐縮の感に堪へませぬ。其事が學校長として其本務を怠つた事より、他人にまで莫大なる迷惑を及ぼすといふに至つては、想ひ出すさへ竦然たる次第です。寛容なる諸君は御赦し下さる事としても、小生の心の面に刻み込まれたる深き傷痕は生あらん限り消滅しませぬ。何といふ情ない曠怠に溺れてゐた事でせう。凡て小生如き者は、兎角現在に捉はれ、安んずべからざるに平氣であるからこそ、かゝる大蹉跌に苦しむのみならず、他人に迄大損害を齎す事になるのであります。

松陰先生神去りまして約七十年の今日、天下國家に星の如く夥多の偉傑を送り出したる名聲高き萩の天地の尊ぶべき教育界に、小生如き平凡者が中學校長などいふ重職に苟も收まつてゐて努力もせず横着

を決めてゐたので、天道も遂に見かねて此一大鐵槌、甘んじて其痛棒を戴くの外はありませぬ。諸君よ、然しながら悦び給へ。萩の教育が未だ天道に見離されず、其惠澤の裡に育成されつゝある事の是が立派な證據であります。

爰に昭和の改元と共に、萩中學校も亦大に天道に則する更新を見たる上は、小生も萩の一民として衷心より慶賀し其將來を一層祝福せざるを得ませぬ。過去は過去に捨て去り、現在及將來の爲倍々天惠の彌大なる様諸君の自奮自勵の切實を誠意祈ります。

長く臆面もなく重要な位置を潰し辭通り始終御迷惑を懸けし事を深く慚愧し、切に御容赦を希ひます。

岩田前學校長を送る

一、岩田前學校長辭職の顛末

我が萩中學校は昭和四年を以て創立三十週年を迎ふるにつき、學校の實質内容の充實を計る一端として昭和二年の夏期休暇に岩田前學校長の命に依り職員總掛りで各分擔を定め一齊に圖書、數學、地理、歴史、物理、化學、博物各科の標本現品調査及び校友會の資産調査を行つた事がある。其際圖らずも原田前會計主任が縣歳入生徒授業料、校友會基金及び經常費、生徒修學旅行積立金、御成婚記念の職員貯金等凡そ二萬圓の公金を費消した事實の暴露した事は、既に長州、萩、萩日々、日本太郎、防長、馬日、大毎、大朝の各新聞に委しく報道された通りである。而して此の不祥事件に對し、岩田前學校長は日夜熟

慮の上、極めて沈着に又極めて果斷的に何人にも相談する事なく、殊に社會風教に及ばず影響に對し深甚なる考慮を費して、全責任を一手に引受け事の真相を本縣知事に具申し、職員生徒一同に報告の上各新聞記者を招致して之を發表し、萩町山田區在の養家祖先傳來の宅地、蜜柑畑、山林、建物等の私有財産を賣却し、費消公金の全部を補ふことは困難であるがせめて本年度に急を要する部分の辨償に當てた上、自らは責任辭職の悲痛な覺悟を示されるに至つた。

周知の如く岩田前學校長は萩の青年子弟の教育に携らるゝ事茲に二十年の久しきに亘り、岩田學校長あつての名聲赫々たる萩中學校であつた。岩田前學校長の御薰陶を仰いで成業し、今や實社會に活躍するの人士は幾百の多きを數へて居る。岩田前學校長引責辭職の報一度傳はるや同情の聲翕然として集り、天下の有志生徒父兄、同窓會員間に、或は留任運動を起す者あり、或は先生の意を諒として先生の末路を潔くしその辭職をして益々意義あらしめんとして運動を起す者もあつたのは洵に無理からぬ事で、二者の向ふ所相反する如く見るけれどもそれは岩田前學校長に對する敬慕同情の至りである事は同一である。即ち九月十四日萩町山本勉彌氏は本縣廳に出頭し、大森知事及び田中學務部長に面會を求めて岩田前學校長辭職に就ての旋斡方を依頼する所があつた。又岩田前學校長と親交深き瀧口明城翁、小林作平氏、卒業生菊屋孫輔氏、未岡周介氏等は屢々會合して其の善後策に就て協議する所があつた。その他萩町有志、卒業生先輩等は又各所に鳩合して善後策を講ずる所があつた。然るに各位の眞劍にして熱烈なる厚意に感泣しながらも、豫め用意周到に而も沈着果斷の態度で一度決めた此の意志を翻す意志なき岩田前學校長であつた。又岩田前學校長が辨償のために養家祖先傳來の私有財産提供にの事は洵氣の毒

であるとして其の一部を買受げんと自發的に申出でた知人の好意も、或は二萬圓を岩田前學校長に代つて辨償せんと申出でた人々の特志も、所信貫徹のためには斷然潔しとせられなかつた。

岩田前學校長の決心盤石より堅きを知つては如何ともし難く九月十五日瀧口氏邸に於ける瀧口、小林菊屋三氏會合協議の結果は「今回岩田校長の態度に對しては其の意志通りに委せよう。之が萩中學校の岩田氏を自殺せしめて、教育家としての岩田氏を永遠に生命あらしめるものである。」との行きつく可き所に達して了つた。岩田前學校長の決心を尊重し、岩田前學校長の生命をして生命あらしめんには結局此より他に路は無かつたのである。そこで翌十六日同窓會の代表者菊屋、末岡、和田涉三氏に瀧口、小林二氏が介添役となつて、縣廳に大森知事を訪問して事情を陳べ、岩田前學校長の所信を貫徹せしめられる様配慮せられんことを依頼した。斯くて岩田前學校長は初志通り動かれる事になつた。之に對して一方には、父兄有志の多數が公會堂に參集して留任を希望する旨を決議し、別に町會議員有志の協議會を開いて留任運動を希望する者と相提携して大森知事に留任を懇願したが、知事も岩田前學校長の牢乎たる決心の動かす可からざるを知つて之に賛意を表する事を躊躇した。

岩田前學校長は部下の長所を充分認めて之に信賴する事が洵に厚い人である。此の岩田前學校長の美點が禍を醸して、我が萩中學校の未曾有の不祥事件が勃發しようとは神ならぬ身の誰が知らう。崇高な人格者として又教育家の典型としての我が岩田前學校長の引責辭職は、國家のため又我が萩のため、萩中學校のため洵に惜んでも餘りあるもの、我々は如何にして前學校長に其の衷情を披瀝せんか、嗚呼言はんと欲して言ふに言葉がないのである。

けれども翻つて考へるに、岩田前學校長の引責辭職は、これ高潔な武士的自殺である。郷土の高士吉田松陰先生の教をモットーとする我が萩中學校にして始めて有得る學校長の悲痛高潔な辭職であつて、岩田前學校長の人格と生命とは此の事件のためにかへつて赫々たる光彩を放つに至つた。

一、岩田前學校長と本校

我が萩中學校の前身山口縣尋常中學校萩分校は明治三十二年九月一日支めて縣立萩中學校と稱せられるに至つたものであるが、岩田前學校長は已に明治二十九年九月即ち萩分校の時代から奉職され、明治三十三年一旦職を辭し笈を負うて帝國大學に入られ、明治三十六年業成るに及んで再び萩中學校に來任されたのである。而して其後明治四十二年三月愛媛縣立西條中學校長に榮轉され、續いて大正三年一月特に拔擢を受けて愛媛縣立松山中學校長に榮轉され働き盛りの少壯時代を大いに縣外に活躍されたが、大正五年八月萩中學校長村上俊江先生退職さるるや我が萩の有志切に岩田前學校長を我が校長に迎へん事を希ふに當り、岩田前學校長は其の當時將に榮達の幸運に恵まれながら有志の懇望黙し難く遂に榮達を捨て意を決して郷國のために盡さうとて、同年九月萩中學校長の任を受諾され、三度萩の青年子弟教育に従事される事になつた。斯くして今茲昭和二年十月三十一日に至るまで前後本校に在職せらるゝ事實に二十年に及び、其の内本學校長として十一年三ヶ月之を廣くして日本の教育界に盡力された事三十年の久しきに亘つた。

岩田前學校長本校に在職の間、學校の内容外形充實の徹底に意を注がれた功績は枚擧に遑無いが、其

の主なる物を擧げてみるに、大正七年二月に生徒寄宿舎の新築成り、同年十月には理化學實驗室及び附屬室の新築成り、大正八年に至つては我が校の收容生徒定員を六百五十人に改めて各學年三學級編制の組織が完成し、大正九年三月には教室及び附屬建物の増築、大正十二年一月には特に斡旋して講堂の新築に盡力され其の落成を見、大正十四年九月更に合併教室の設備が整うて、我が校の校舎は畧完備の域に達するを得た。これ一重に岩田前學校長御盡力の賜である。

我が校の校訓は村上校長以來吉田松陰先生の士規七則に基づき之を石に勒して前庭に建てたが、岩田前學校長に至り七則中の質實義勇の精神を以て校訓實現の要領となし、大正七年二月には其の校訓によつて校歌の誕生となつた。

岩田前學校長は又教育の社會化と教授の郷土化に重きを置くの一端として、大正六年四月には郷土史研究會を設けられた。又十五年二月より生徒の衛生を慮つて教室に塵芥防止用の塗油作業を始められ、大正七年四月よりは生徒奨學金の制を創始せられた。之に依つて學資補給の恩惠を受けた生徒は相當多數に達してゐる。之を思へば岩田前學校長が如何に生徒愛護の念の深かつたかを察し得るのである。

岩田前學校長は又全生徒に普遍的に體育を奨励して其の向上を計られたが、我が校の競技部が大正十一年、十三年、十四年、十五年、昭和二年と連年山口の縣下競技大會に優勝し、縣下に傳統的強味を誇るのほこれ前學校長の指導宜しきを得た當然の結果である。

大正十五年五月攝政宮殿下山口縣に行啓あり、三十日我が校の校庭に阿武、大津、美禰三郡の中等學校學生、在郷軍人團及び青年團、處女會を御親閲あらせられた際には、岩田前學校長は準備委員長を命

せられて御親閲の際には御先導を申し上げられ、滞りなく其の任務を終へられ、依つて行啓記念事業として全校の課外運動、自學指導及び特長發揮、行啓記念碑の三事業を企圖せられ、昭和二年五月三十日には建碑除幕式を行はれた。

岩田前學校長外にあつては、阿武郡教育會評議員として大正十一年九月の頃基金募集等の事には特に盡力せられ、又萩中學校長任命と共に阿武郡立圖書館長を拜命せられ、郡立より縣立に移管する際にも敷地の件、基金の件等で大いに骨を折られた。大正十三年四月より山口縣會の決議により縣下中等學校が一齊に教員の定員一名を減する事となつた際には、縣教育の爲めに大問題なりとして當局に斡旋するところありて遂に定員數も復活するに至つた。當時我校のみは卒業生同窓會の運動により有志及同窓生の寄附金によりて定員を減少することなくすんだ。

岩田前學校長は其他に又防長教育會及び防長學事研究會の役員として活躍せられ、多くの場合に縣下中等學校の代表となり、大正十五年春攝政宮殿下本縣行啓の際には教育功勞者として五月二十九日特に謁を山口に賜ひ、大正天皇の御大喪に際しては縣下中學校の代表として御大喪儀に參列された。

斯くの如く名實並び揃つた良學校長を永遠に失ふことが我が萩中學校にとつて洵に遺憾の次第であるが「岩田先生をして先生の御意志のまゝに赴かしめよ。」之が恩愛厚かりし前學校長に對する我々の執るべき最善の道であらう。

どうか岩田前學校長の前途にいや深き御清福のあるやうに祈る次第である。

岩田先生を憶ふ

第五學年 辻 永 勝 明

前學校長岩田博藏先生退職せられてより、最早二十日餘の月日が流れ去つた。吾等の腦裡には悲哀の多かつた告別式の際の印象が、（？） 歴然として深く刻まれて居る。此の日先生の吾等に與へられた最後の訓誨「物事に就いての考方」は、永久に忘れることの出来ないものである。想ふに吾等の入學以來、雨の日も風の日も、一日として學校に於て先生の温容に接しない日はなかつた。鞏固な意志と健全な體軀とを有せられ、常に父の如き嚴格と母の如き慈愛とを以て、懇切に誠實に吾等の薰陶に従事して居られた。此の鞏固な意志と健全な體軀とは相依りて元氣あり熱ある所の授業となつて現れた。先生より教を受け業を授けられた吾等は、師弟の親みといふことをしみじみと味つて居た。従つて先生を思慕する情の殊に甚しきものがあるのである。又先生は校風の發揚に努力せられ、質實義勇の精神を養成することに心血を注がれた。夫の體育の事に至つては、最も深き趣味を有せられ大に武道競技を奨励せられた。今日我が校が學業に運動に縣下に覇を唱へて居るのは實に先生の力である。其の他學校設備の事など細い點まで注意せられて年を追うて改善せられたのである。しかのみならず先生が縣下中等教育界の爲に貢獻せられた其の功勞は亦誠に多大なものがあるのである。然るに第二學期に當つて、突然暴露した會計書記の公金横領、思ふさへも胸の迫る心地がする。此の時先生の胸中は如何ばかりであつたであらう思ひやるだに涙の種である。豫て責任感の強い先生は、それが爲に斷乎として遂に引責辭職をなされた

のである。而も其の間幾多有志の留任勸告があつたにも拘らず、自己の所信に向つて處決せられたのである。以て先生の人格の如何に偉大なるかを想ふべきである。嗚呼吾等は先生より受けた海岳も管のみならぬ鴻恩を如何にして報ゆべきであらうか。唯一圖に身を修め學を勵んで先生平素の教訓に負かないやうにすべきであると思ふ。吾等は茲に滿腔の誠意を捧げて先生の前途に幸多かれと祈るのである。

岩田校長先生を送る

第四學年 岩 武 照 彦

輓近國外の新思想、滔々として社會を風靡し、奇を好み、華に走り、輕佻風をなす時に當りて、突如山陽の一角、巴城の天地より警鐘は響きぬ。この警鐘を鳴らすを誰とかなす。曰く、我等の日夜崇拜措かざる岩田校長先生是なり。先生や、本校に職を奉せらるゝこと前後二十年、或は運動競技を奨励せられて覇を天下に唱へしめ、或は生徒の訓練に盡瘁せられて校風漸く舉りぬ。宜なり、本校の盛名全國中等教育界に喧傳せらるゝや。我等入學以來、斯の如き名校長の下に研學することを無上の光榮と欣び、孜孜一日も早く鴻恩の萬分の一を報いん事を期しぬ。

あ、然れども好事魔多し。一刀筆の吏、阿堵物を弄して事司直の手に移るに到る。先生の胸中果して如何。決然我等に告げらるゝに挂冠の意を以てせらる。我等驚駭悲歎、何等施すべき策を知らず。昭和二年十一月十二日、遂に悲しき日は來りぬ。先生は全校の惜別悲歎裡に我が校を去られんとす。仰いで天神に請ひ、俯して地祇に祈るとも、此の事遂に止むべからず。我等涕泣先生を送るのみ。

夫れ一部下瀆職の責を負ひて榮譽ある職を辭せらる。その責任觀念の強き、その心の高潔なる、誠に一世の龜鑑なり、腐敗せる社會への一大警鐘たり。先生の如き、又眞の國士と稱すべきか。我等靜かに冥想する時、追懷思慕の情禁する能はず。即ち、先生の教訓を奉體し、黽勉奮勵、以て質實義勇の美果を收め、國家有爲の士たるの日を期せざるべからず。而して先生の益々健全にして、此の後も我等を教導せられん事を切望して止まざるなり。

岩田校長先生を慕ふ

第三學年 赤木正二

永らく御世話になつた、私の大好きな校長先生は此の度責務上辭職せらるゝことゝなりました。先生は永らく此の職に就かれて一意専心我が校の充實をはかられたことは世間の人のよく知るところであります。

又何の娛樂もなく、生徒の教育を只一つの樂みとして居られて、先生の時間中も大變面白くて皆先生の時間を待つて居たといふことです。

此の度の事件を認めらるゝや、泰然として其れを顔にも出されず、猶依然として授業を續けられ家族にすらも知らされなかつたさうである。此の間の先生の心中を推察すれば推察し得ざる程の煩悶であつたらうと思ひます。いよゝゝ此れを確かめらるゝや、先づ諸先生に發表せられ、次ぎには、世間の色々の間違つた噂を防ぐ爲めに、地方の新聞記者達へ又我々生徒に公表せられて、自分の不行届きをわびら

れて大悪人と罵られ、又一段涙をふるつて、將來の手段方法等を公表された時には、我々一同顔を見合はして、知らずゝ涙が目ににじんだのであつた。

又此の時壇上に立たれた心はごうであつたらうか。

思ふに、先生はかゝる災ひに遭遇せられてもあわてられず、落着いた處置を取られて瞬時の間に將來の手段を斷定せられた事は、我々將來の模範とすべきことではありませんか。

其の後先生の方法手段を耳にしたる地方の有志達はどんなにか仰天した事であらうか。

それから先生の辭職について留任歎願は實に目覺しいものであつた。此れを以つても如何に先生の徳の深大なる又重要な人物であつたかが推量せられるではないか。

又思ふ。先生の全財産を投げ出される事についても人々の心配を聞き入れられず、斷然自分の意志を變せられなかつた心の清白さ。

あゝ私はもうこれより筆を續けることは出来ません。

岩田校長先生

第二學年 井町秀介

入學した時から二ヶ年の間、常に溢るゝ如き慈愛をもつて、導いて下さつた岩田校長先生が、此の學校を去られて、私は今更のやうに、先生の御教訓が身にしみて感せられます。機ある毎に、我々を講堂に集めて我等の爲に有益な講話を、熱心にお話し下さつた事が、次々と思ひ出されて、先生が如何に、

吾々の教養に努力せられたか、今になつてはつきりと判りました。

先生は常に、我等の智能は勿論、體力の増進にも、なか／＼苦心せられ、それと共に、我々が將來、一人前の立派な日本國民として、社會に立つて行かれるやうにと、禮義等にも、随分、御配慮して居られたやうであります。まことに、慈母の如く、眞心から我々を立派な人に仕上げやうと、努力せられました。

先生は、常に我校の校訓である、質實義勇をささされ、御服裝の如きも、いつも質素で我々にその範を示して居られました。我等は此の事を考へても、先生が、口癖のやうに云つてをられた、質實義勇を守らねばなりません。

責任感の強い先生は、此度の事は、何事も皆自分が悪かつたからだ、と云つて、自分の名譽や財産までなげうつてしまはれました。私は此の事を思ふたびに、胸がつまるやうな感じがします。

我々としては我萩中學校をこれまでにして下さつた、岩田校長先生と、お別れることは、實に残念であります。併し今としては、我々は、これを機會に一層緊張して、先生の御教訓を守り、我校の校風をいやが上にも上げませう。これが先生の御心にそふ、第一の事でありませう。

十一月十二日

第一學年 河野 希一

此の日は我我中學に取つて非常に悲しみの深い日である。其れは岩田前中學校長のおやめになつた日

である。

招魂祭へ行く爲に前庭に集合して、何の氣なしに揭示場を見ると其處には岩田校長の辭職を許すといふ意味の掲示が出てゐた。其れを見た時私は「何時かやめられる」とは知りながらもいひしれぬ悲しい心持がおそつて來た。

參拜が終つて歸校して今度は講堂に集つた。岩田校長先生の告別式は悲しみの中に始つた。

山本先生の簡単な挨拶が終ると岩田先生は暫く腕ぐみして考へて居られたが思ひきつて壇上の人となられた。

簡単な會釋が終つて優しい祖父のやうな慈愛に満ちた眼を私等に向けて最後の話をなされた。

天と共に働をしてくれ、天を崇つて呉れ、天を相手にせよ、而して立派な人間になつて萩中の名譽を上げてくれ、要領は大體其のやうなものであつた。僕は其れを聞きもらすまいとして一生懸命に聞いてゐた。だから僕は不思議に頭の中に入つてゐる。

十一年間も校長として勤めて事件の責任を一身に負ふてやめられるやうになつた岩田先生の事を思ふ時は同情の念の湧くのを禁ずる事が出来ない。然し悲しんではかりゐるのは男子の本分ではない、天を相手にして修養し校長先生の教を本として名を擧げ身を立てそして學校の名を擧げるのは岩田先生へ對する最善の「慰め」と思ふ。

岩田先生の健康を蔭ながら祈つてゐる。

就任の辭

會長 河内才三

語に曰く「士は己を知る者の爲めに死す」と。余揣らずも本校長たるの重任を拜す。其任を受くるに當り先輩及知友の勸誘切なるものあり、誰か感激せざらんや。親ら駑馬に鞭打ち一死報效の誠を謁さんのみ。

今茲に諸子と相見みね師弟の誼を結ぶ。朝に指月山の蒼翠、森嚴なる神靈を拜し、夕に松下村塾の教化を偲ぶ、感亦極りなし。

由來我が防長二州は、藩主輝元公以來、藩祖の勸訓に據り、歴世皇室を尊び、士民を撫し、武を練り文を尙ぶ。幕末維新に際會するや、その鬱結せる生氣は發して、討幕論となり、勤王論となり、敬親公忠愛公の兩主に伴ひ、志士俊傑雲の如く輩出し、終にその宏謨を翼賛す。爾來廟堂棟梁の材亦多く我が防長二州に出づ。就中その首班に列せる伊藤、山縣、桂の諸公及現首相田中閣下は我が郷土の出身にあらずや。一郷より四總理を輩出す、日本廣しと雖もその比を見ず。又盛なりと云ふべし。

抑もこれ何に基因するか。元より歴代の藩主至誠純忠英明達識克く人材の養成と登用に努められしに據ると雖も亦藩費明倫館及松下村塾の教化薰陶に歸せずんばあるべからず。

本校その傳統を兩校に承け歴代の校長又その精神を緯となし、時代の進運を經となし、本校教育の根

柢を樹立す。從て現に本校の校風は質實にして義勇を重んじ、學業に於て又武道教練競技に於て縣下に異彩を放つ。

此光輝ある防長二州に生を稟け、名譽ある本校の學窓にある諸子よ。常に質實剛健義勇奉公上は聖代の國運を翼賛し下は先輩偉人の遺訓を遵奉し、我が防長二州の歴史的感情と傳統的精神を尊重し、苟くもこれを汚辱するが如きこと斷じてあるべからず。余亦蹇々匪躬の誠を致し、先輩偉人の遺訓に據り、益々我が校風の發達を圖り、有爲の人材を養成し、二州の精華を輝すあらんことを期す。

余曩きに大任を受くるに當り、田中總理官邸に伺候す。田中閣下余に告げられて曰く「今回は誠に御苦勞じや。どうか輕薄な人物を作らないやうに、しつかり頼む」と。閣下の一語余の心膽に徹す。

今や舉世滔々として徒らに浮華輕佻、勤勞を賤しむ、堅實の氣象に乏しく、儉安逸樂をこれ事とせん。加ふるに内憂外患交々臻る。防長二州の青年たるもの、須らく宇内の大勢に鑑み、輕佻浮薄の風潮を戒め、堅實なる思想を養成し、以て國威の發揚に努め、先達の士の榮譽を穢さざらんことを期せずして可ならんや。

河内新學校長を迎ふ

我が學校は今回岩田前學校長の後任として河内新學校長を迎へる事となつた。

河内新學校長の嚴父は山口高等學校長、山口師範學校長、東京高等師範學校長として日本の教育界に貢

献された御方で本縣出身の教育者としては頗る名望家であつた。

かゝる名教育家を嚴父に有たれる河内新學校長は温厚篤實、今迄京都府立福知山中學校長、埼玉縣立熊谷中學校長を経て永い間千葉縣立佐倉中學校に名校長として學校は勿論、地方父兄にも甚大な尊敬と信任を得て居られた。然るに突然先輩の切なる勸誘に依り郷黨後進の爲に特に我が學校に轉任せられる事となつたのである。

此の良學校長を我が學校に迎へる事になつたのは學校として洵に欣喜の情に堪へぬ次第である。

加ふるに河内新學校長は萩出身の方であるために、我々は又郷黨の父老を仰ぐが如く心から敬愛の念を禁じ得ない。想ふに新學校長を迎へて、我が萩中學校の前途には光明の耀々たるものがある。

我々は益々黽勉努力し、校風の發揚に竭さんとする熱情の胸裡に横溢するを覺ゆる。
茲に衷心より歓迎の意を表する次第である。



本 欄

萩 史 蹟 雜 話

特別會員 香 川 政 一

從來我校には毎年五月に、第一學年生を引率して、萩町附近の史蹟歴訪、即ち萩町の史蹟廻りをするといふことになつて居りました、是は大正七年から行はれ來つて、至極結構なことでありましたが、如何せん爲に一日を費すので、段々行事が殖わて、授業時間を缺ぐことの惜しくなる今日に於ては、誠に止むを得ないこととして、今年から之を廢し、代ふるに、春秋二季、指月山神社と、松陰神社とに參拜するの序に、各學年輪番に居殘らせて、其處らあたりの史蹟を説明するといふことになりました。

それはそれとして、狭いながらも史蹟に富める萩町のことですから、何れにしても、以上の方法位では、とても之を知り盡すことは出来ませんので、私としては折々日曜日などを利用して、諸子自ら各所の史蹟を探られんことを望みます。隨て爰に聊この雜話を録して豫め御參考に供します。

先づ大照院と東光寺とには、行つて見て貰ひたいと考へます。私が各地を旅行して比較した上の所感であります、毛利氏が中國八州の大きな領地を奪はれ、僅に三十六万石の大名となつて、萩に引越さ

れてからといふものは、とても以前のやうな大規模のことは出来ませんから、萩の城も廣島の舊居城に比較すると誠に小さく、臣下の數や祿高なども、悉く減少になりましたが、流石に中國八州時代の面影を残して居るものが三つあると考へます。それは第一に藩公の廟所の規模大なること、第二に家老の住宅の廣いこと、第三に士族が内職を爲なかつたことであります。

藩祖毛利元就公(法諡洞春公)の御墓は藝州高田郡吉田城下にあつて、洞春寺といふ寺がありました。廣島城の出来た際に、寺だけを廣島へ移されましたので、其處を今でも廣島では洞春寺河原と申します。萩に御入城の後、洞春寺を指月山の西南麓に移されましたが、今は又それが山口に移つて居つて、公の御忌日に千部の御經を讀み來つた建物だけが、民家となつて山麓に残つて居ります。二代隆元公(常榮公)の菩提所である常榮寺も山麓にありましたが、それも今は山口に移つて居ります。

三代輝元公(天樹公)は事實上萩に於ける初代の藩公とも見るべきもので、御菩提所の天樹院が今も堀内に残つて、其處に公の御墓があります。公の官は中納言でありましたから、私共の幼少な頃までは、公の御墓の上に、銅製の瑤珞の垂れた屋根がありました。今はそれも無く、見事であつた練壁も、鐵筋コンクリートの新壁に代つて、結構なやうで又残念な氣も致します。

四代秀就公(大照公)を葬つたのが椿村の大照院でありまして、萬治制法を定め藩治の基礎を固められた名君の稱ある五代綱廣公(泰巖公)の御墓も其處にあります。五代吉就公(壽徳公)が堀内出身で宇治萬福寺主にまでなつた名僧の慧極に歸依し、之を招きて東光寺を松本に建てられた關係から、公の御墓は東光寺にあります。是より後は交互に兩寺に藩公を葬ることになり、大照院には七公、東光寺には五

公の廟があるわけでありませぬ。

東光寺は黄檗宗の禪寺で、宇治の萬福寺に克似して居ります。一朝事ありて萩城の守り難き際には、藩公は城を棄て、東光寺に立て籠るといふやうな積りで、非常に大規模の寺を御建てになる御積であつたが名儒山田原欽先生が諫死したので、御見合せになり、小規模の寺となつたといふ言ひ傳へてあります。其れでも中々見事な寺でありますから、大照院同様に、是非參詣あらんことを望みます。

東光寺に詣られたらば、臺灣教育開創の殉難者楫取道明先生の墓と、吉田松陰先生の墓とに必ず參拜ありたいことでもあります。松陰先生の墓は、東光寺と先生の誕生地團子巖との間の、小松の並み立てる間にあります。小徑が山麓から通じて居つて、徑の左手に先生の墓、先生の養父吉田大助先生の墓及び門人高杉晋作の墓などが有ります。徑の右手に松陰先生の實父母、實兄民治翁、叔父玉木文之進先生、門人久坂玄瑞等の墓が相並んで居り、玉木先生の墓前には、乃木將軍の献られた燈籠があります。この燈籠が實に乃木式燈籠の起りだといふことでもあります。

中津江の龍藏寺にも一遊を御勧めします。寺前阿武川の碧流に臨み、左手には烟霧漠々たる川上の奥を扣へて、萩八景の一たる上津江の晴嵐に觸れ、右手には太鼓灣の響き渡る流れを聞きつゝ、志都岐の古城山を望み、周圍の風光得も言はれぬものがあります。

傳へ聞く聖武天皇の奈良に大佛殿を御建立遊ばすや、長門より白牛を貢して工事を助く、大佛殿の母柱を曳くに當り、衆牛皆倒る、白牛獨倒れずして遂に之を曳くを得たり、殿成るに及び、天皇白牛を國に歸らしめて、勞役を免じ、併せて長門の牛には専ら曳引の役を爲さしむ。是より後今日に至るまで、

長門には牛に物を負はすことをせぬと言はれて居ります。國守長者の祖勅を奉じて、白牛を連れ歸り飼養する所あり、勅して飼料の地を賜はりました。白牛死するに及びて龍藏寺を建て、飼料の地を牛敷庄と申したのが、今日の萩の起りであると言はれて居ります。

我校の安藤紀一先生の説に、當時寺の附近は流水入り込みて津をなし、間近い所に牛の牧場が有つたので、津牧(ツマキ)と言つたのが椿(ツバキ)に變じ、聽て首音が省かれて萩(ハギ)となつたのであるといふことがあります。當時の萩附近の實況が、さうもあつたらうと思はれて、面白い御説であります。猶申添へますが、爾來長門には必ず一頭の白牛を産し、一頭死すれば又何處かに一頭生れて絶ゆることなく、之に飼料を添へて龍藏寺に寄附したので、龍藏寺には常に白牛が居つたといふことで私共の幼時には矢張それが居るのを見に行つたこともありますが、今ではそんなことをするものも無いと見えて、牛舎だけが残つて居ります。

龍藏寺に詣られたら、門前の火薬庫爆發の際に死んだ人々の墓碑があるのを見て貰ひたいと考へます。幕末國家多難の際、第十六代敬親公(忠正公)銳意文武を興隆し、沖原に鑄砲場を設け、中津江に火薬製練場を設けて居られました。慶應二年六月二十七日火薬庫爆發して、慘死者十三人、負傷者若干人、火薬二千貫目、硝石八千貫目を焼失しました。

中津江橋を渡りて川島に歸り、善福寺に立ち寄りたかと思ひます。慶長十一年輝元公萩に築城の際指月山麓に善福寺がありました。之を川島庄に移轉せしめて城を築かれたのでありまして、善福寺は今でも山号を指月山と申します。川島庄は又萩の古名であります。川上川の川尻に漸次三角洲を生じて、

遂に萩町を成形するに至るの變遷がよく知れます。即ち川島に次いで土原であります。三角洲が段々廣くなつて、芝草の原やら、砂土の廣原やらを生じて所々には猶、水の淀みも残つて居りました。それでも沼田とか、扇の芝とかいふ地名が残つて居ります。さうして土原に連接して古萩があります。その邊は海に近くして漸次漁民やら、船宿やら、小店やらが出来始めて、先づ市街の形を爲すに至りました。それで古萩といふので、今日漁夫町といふのが残つて居るのは、矢張昔の面影を傳へて居ると思ひます。

中津江は三浦觀樹將軍を出し、川島は桂大將、山縣元帥を出し、土原は廣澤參議、前原參議、野村子爵を出し、或は白根專一、曾根荒助、入江九一、奥平謙輔の如き、名士の輩出此の區域には頗多いのであります。多くは舊宅も残つて居り、近頃刊行の萩名士出身地圖には詳しく載せてもありますから、相照して遺蹟を普く探らるゝがよいと考へます。

明倫史蹟は是非これを探つて貰ひたいのであります。明倫小學校が即明倫館の故地であり、該校には又史蹟に詳しい人もあり、段々史蹟及遺物も保存されて居りますから、往きて説明を求めらるゝ方が便利と思ひますので今は之を畧します。

古萩に野山獄、岩倉獄がありますが、今は遺蹟保存の法も立ち、安藤先生撰文の碑なども立つて居りますから、行きて見らるればよく知れます。

其處の常念寺に渡邊通(法諡淨忠)の墓があります。天文十二年大内義隆雲州に兵を出し、尼子勢と戦ひ大敗す、元就公義隆に従軍し、殿戦して退き、降露坂に至る。追騎來り迫り、從者僅に數人、公殆危

し、通公に代りて死し、公單騎逃れて備後に入る、實に五月七日である。此時若通なくんば後の洞春公の發展なく、恐くは又今日の毛利氏及防長の回天史なからん。然らば則この通の墓には何とか香煙の絶わぬやうにしたいと考へます。

北古萩は萩町の寺町でありまして、多くの名士が其處の青苔の蒸せる古い墓石の下に眠つて居ります。先づ亨德寺墓地に於ける瀧鶴台及夫人蝶子、嗣子瀧高渠は世に名高いことであります。名醫小倉濟陽の墓も其處にあります。海潮寺の本堂は明倫館聖廟を購ひ用ひたるにて名高く、寺に附屬せる保福寺址の墓地には、名儒山縣周南、山縣太華の墓があり、吉田松陰先生と踏海の企を共にしたる贈正五位金子重輔の墓もあります。墓前の花立てに吉田氏と記せるは、松陰先生が獄中より檀増の料を節して手向けられたもので、見るさへ弟子相愛の厚い情が思ひ忍ばれて涙の種であります。亨德寺莊の林百非の墓、光源寺莊の坂時存の墓は人多く之を知らぬやうでありますが百非は軍學に於て松陰先生の師、書に於て伊藤匪石、佐伯瓊洲等の師であり、坂翁は防長の民政上忘るべからざる恩人であります。

妙蓮寺の中村雪樹先生の墓は我校に直接の關係があります。我校の生徒にして狂犬を防いで吉屋家の女を救ひ、身は毒に斃れたる義少年矢田部君は俊光寺の墓下に眠つて居ります。此の外に南八郎の名を以て生野の義舉に名高い河上彌市郎の墓は長壽寺にあり、時事を慷慨して東都の有備館に割腹した來原良藏の墓は本行寺内にあり、名士長井雅樂の墓、杉山寒翠の墓等も多くは、北古萩又はその附近の寺にありますがこの外に澤山ありますので一々枚舉しません。

越濱に一日の遊行は至極面白いと思ひます。發するに當りて浮島町を通りますれば、右手に弘法寺が

あつて弘法大師唐より歸朝の際に船を寄せ、初めて我國に眞言密教を説かれたる靈場といはれ、山號を寄船山と呼ぶの靈域であり、文人墨客の集る所でありましたが、今は附近の俗化せるを遺憾とします。

此處の老松寒風に咆哮せる下には、前原一誠と佐世一世との兄弟の墓があります。浮島通の左方に大きな古びた倉庫があります。第八代吉元公(泰桓公)は明倫館を創建せられたる明君であります。更に民政に注意して、寶永六年十二月救米藏を吉田町の北詰に創設せられました。其後第十代重就公(英雲公)撫育局を設けて各所に撫育庫を設けらるゝや、之を擴大して大に米穀を蓄へられましたので、世呼んで新倉と申したのがこの倉であります。何か適當の方法を以て何等かの保存方法を講じてもらひたいものと考へます。浮島といひ雁島といふもの、皆阿武川尻の小三角洲であり、就中雁島は沖つ雁島と古歌に歌はれ、萩八景の一なる下津江の落雁が其處であり、本邦書界の泰斗森寛齋先生の生れたのも其處らあたりと言ひ傳へられて居るが、今や島は地續きとなり、鴻雁は來り訪ふことを忘れて、群雀汽笛に驚くの時代となりました。姥倉の新河は忠正公が國家多事の際に係らず、萩町民の水難を救はんとして土工を興され嘉永六年正月十四日を以て成り、防長民政上の偉觀であり、主として工事を督したるは、布施御膳翁であります。香川津孝子は實は小畑孝子で宅址は今も長添山の山麓の路傍にあります。小畑は舊名埴田で足利時代の萩焼の竈元は其處にあつたに相違ありません。狐島の戎が鼻は、木造ながらも毛利氏海軍の創建に大關係ある、軍艦丙辰丸と、庚申丸との建造せられたる所で、海岸の反射爐は其時の鐵具を鑄造した所であります。其後この反射爐では諸隊士の佩刀を鑄造したることあり、其後岩根某は此處で硝子を造つたことなどがあつて、今では史蹟天然記念物の法により保存さるることゝなつて居

ります。

小畑から越濱までは長汀曲浦の風景面白く、浪怒るを以て聞かたる北海も、天朗かに風風ぎたる日には、穏かなる漣波を岸邊に送りて趣を添へます。昔は越ゆるに一汗をしばらせた馬鞍越も今は坦道砥の如くに切り下げられて、何の骨折もなく越濱に着くことが出来ます。

越濱は萩城の寅の方位に當り、鬼門に相當するを以て、之を護るに反對の申(猿)を以てせんとて、笠山に猿を放ち、樹木の伐採を禁じ來られたのが偶然の保護となり、笠山には天然の橋を始め、附近に珍しい幾多の植物のあるのは嬉しいことであり、以て昨年は攝政宮の台臨を仰ぎ得たことと思ひます。明神祠、明神池、休勞泉、偕は嫁泣濱の哀話、山縣伊三郎公爵の遺愛の松洞など、之を聞き之を探れば段々面白い處もあると思ひます。

市中史蹟にして言ひ漏したる所が猶澤山あります。堀内史蹟と松本史蹟とは、前に申したる神社參拜の折に、御話することもありません。之を要するに越濱へ一日、松本方面へ一日、龍藏寺方面へ一日、大照院方面へ一日、川内の史蹟廻りが一日、合せて五日間位を以てすれば略萩地方史蹟の梗概を探り得ると思ふのであります。諸子繼續的にこれが遊覽を試みらるれば趣味深く裨益亦少くないことであらうと考へて要點を記したのであります。

戦争の始めより終りまで

特別會員 前 原 四 郎

本記事は雑誌「青年講座」に掲載せられる陸軍省永田中佐稿を轉載せるものなり

孫子の言を俟つ迄もなく兵は兇器である。固より輕々に動かしてはならぬ、避け得る丈戦争は避くべきである。併しながら、國家と國家との間に起る紛争を正しく、裁斷する超國家的の權威なるものがない限り戦争の絶滅は得て期せられない。霸道的の侵略主義や我利的の征伐慾から他國に戦を挑むなどは不埒至極の行爲であるが、苟くも國家が獨立自主を棄てない限りは、其正當なる主張を斥けられ國の生存を脅威され體面を蹂躙されて黙する譯には行かぬ。その究まる所遂に干戈を執つて立たねばならぬ事となる。我邦が過去に於て外戦の爲起つたのはかかる場合に限られて居る。世界の或る方面では我國を好戰國などと云つて居るが、それは爲にせんとする宣傳でなければ迂愚の妄斷であつて一顧にも値せない。將來我國民が劍を握る秋があるならば、それは矢張り正義公道上已むに已まれぬ場合であつて、その劍は破邪顯正の利刃であるべきは勿論である。今將來の戦争を假想して其經過の梗概を叙するに方り改めて一言したのである。

× × ×

不幸にして或國との間に葛藤が起つたと假定する。交渉に次ぐに交渉を以てし、我邦はその正義公道に則つた主張の貫徹を期する爲に忍び得べきを忍び譲り得る限度迄は譲つたが、對手は之に應じない。ご

ごのつまり列國の調停も仲裁裁判も將た國際聯盟も如何ともすべからざるに至つた。今は力を以て飽く迄我が正しい主張を貫くか、然らずんば膝を屈して屈服するか二者その一つを選ばなくてはならぬ。そして此の膝一度屈せんか國權は阻まれ國利は喪はれ獨立國としての存在を脅かされ國の體面は泥土に委せらるゝとしたならば如何であらう、心ならずも敢然として起つより他に途はないのである。もつとも國に握るべき利刀の備なく、國民に刀を揮ふの氣魄が缺けて居つたならば、即ち國防の用意が缺けて居り國民精神が頽敗して、も居つたすれば、此の危急の瀬戸際に於て主張を一擲し對手の言分に屈服し應て亡國の途への一步を踏まねばならぬのであるが、治に居て萬一の備を怠らない我國民はかゝる時機に勇み公に奉じて蹶然として起つのである。かくして飽く迄名分の正しい戦争は眞に舉國一致の下に聖斷に依て開かるゝに至るのである。事の茲に至る迄には先づ國民上下の結束が固められ、政府と統帥部との間に水も漏らさぬ意見の交換が行はれ、廟議をも經べきは固よりであつて、諸事萬端慎重に適法に而も愈々云ふ場合は極めて神速に諸般の手續が運ばれるのである。

宣戰の大詔一下するや國を擧げて大活動の場面が走馬燈の如く展開されるであらう。海軍の艦艇は國民全幅の期待を擔ひ、煙を故國海灣に残して何れともなく錨を抜いて去る。陸軍には動員令が下る、在郷軍人は鍬を棄て算盤を投げて麾下に馳せ參する、そこには親もなければ妻子もなく唯一死報國の丹心あるのみである。完全に整備された戦用倉庫は開かれ、手入の行届いた完全な武器が支給され、必要に應じて防暑、防寒の被服も分配されやう、軍馬、自動車其他必要な戦用品は、平時から立てられた計畫

通りにすらくと徴用され、短時日の間に戦時部隊の編成武装は完結される。この動員が終れば補充隊は直に補充兵員の教育に着手し、野戦部隊は天地を揺がす萬歳の聲に送られて涼々しく衛戍地を出發して征途に就き、海を越えて進む軍隊は何れかの港——そこには既に幾多の運送船や護送艦隊が煙を吐いて待つて居るであらう——から故山に訣を告げることとなる。別に國內要地を護り万一を警戒すべき部隊は要所要所を固め、爾他の國民は老若男女を問はず其の分に應じて戦争を有利に導くべく夫々國家總動員の部署に就くであらう。

宣戰に方り臨時議會が召集されるならば、そこには豫め準備された戦時法律や戦費の豫算が提出され政黨派の別なく極度の緊張裡に眞乎滿場一致で即決可決せられ、國民決意の存する所が中外に明にされるのであらう。もつとも我國の憲法に於ては縦し議會は開かれずとも、機宜に應じて戦争時の要務を進めて行く爲には些の支障もないやう必要の規定を置かれて居る。

將來戦に於ては開戦に伴ふ動員は單に軍にのみ行はれるのではなく、全國民も産業も交通も財政も將た又學藝、技術、社會施設等も齊しく動員され國家全般が平時状態から戦時状態に移り變らねばならぬ。かくして始めて國の利用し得る一切の人的物的諸資源は戦争を最も有利に遂行すべく組織立てられ運用されるのである。若し此國家總動員が圓滑に迅速に行はれないとしたならば、出征軍の後方に軍需品が續かず、國民の生活も直に脅威を受け、戦局の前途に光明は認め難いこととなる。殊に海外交通の或部分が杜塞され、部分的にも經濟封鎖の状態に置かるゝとしたならば愈々以て然りである。此國家總動員

に關しては次回に稍々詳しく述べて見たいと思ふ。

海上武力の活躍に就ては別の説明に譲つて、茲には出征陸軍行動の一斑を駈歩で概説する。出征軍は原則として敵の堅伏撃滅に全力を傾注する。蓋し國家防衛の目的を達する最良否唯一の手段は、積極的に相手の戦争繼續を不能ならしむるに在り、受身一方の戦争は相手に企圖動作の自由を與へ、我は奔命に疲れて何れかの方面で敗北をさるの恐が大である、のみならず退て守るのみでは何時迄経つても戦に梟をつける事が出来ないからである。

出征軍は大切な第一の會戦で敵に後れをとらぬ爲、通常先づ必要の兵力を一地方に集め、軍需品輸送の設備をも整へなくてはならぬ。之が集中であつて、衛戍地から集中地迄は或は鐵道に依り或は海軍の掩護下に海路に依り又は徒歩に依つて進むのである。集中が終れば軍隊は一齊に前進し敵の撃滅に全力を傾ける、歩、騎、砲、工、航空、輜重等の各兵種は分業に従つて夫々最大の活動をする。行軍、輸送、宿營、搜索、警戒、攻撃、防禦、追撃などが繰り返し繰り返し行はれる、一地に永く固着せず即ち野戦に依つて轉々勝利に次ぐに勝利を以てし、速かに對局を結ぶ所謂速戰速決が行はれるならば、それは最も望ましい事である、が時の狀況に依ては歐洲大戰に於けるやうな陣地戦に陥ることがある。かうなる戦争は持久性を帯びて來て、武力、精神力、資力の執拗な競争となるのである。此種の戦争が種々の事情から特に我が國にとつて苦手である事は少し考へたなら何人にも判る事と思ふ。倅て然らば此の國防上の鬼門たる持久的陣地戦を力めて避ける爲には如何なる用意が必要であらうか。此の點に就て國民が

冷靜に思を練り深く自問自答する事は極めて大切な事である。併しながら一方持久的長期戦に應ずるの準備と覺悟をも亦固より缺いてはならない。

海陸共に戰場には科學の粹を悉したあらゆる新兵器が現出するであらう——恰も世界大戰に於て三十里の射程を有する大砲が現はれたり怪物「タンク」が不意に飛び出し、毒瓦斯、火焰放射器などが用ひられたりしたやうに——所謂新兵器の急襲がそれである。國內の發明家科學者はそれに腦力のあらん限りを傾ける事となる。

航空機の如きは開戦劈頭から大活動をするであらう。亞細亞大陸の一角なり又は我近海の嶋嶼なりに根據地を占め又は航空母艦に依て我近海に運ばれる相手の空軍は、空を蔽うて飛來し或は動員集中を妨げ或は軍需品の貯藏工所、鑛業地に空中攻撃を加へ、進んでは國民生活に脅威を與ふべく種々の手段をも講ずる事を覺悟せねばならぬ。就中空中からする毒瓦斯の攻撃などは戦慄に値するものがあらう。空よりの攻撃に對しては我も亦航空機を以て之に應じ、都市要地に於ける其他の對空防禦設備も最大の活動を爲さねばならぬ。燃々易い木造家屋が大部分を占めて居る我都邑が對空防禦上困難なる事は何人にも想像されるであらう。一昔前の世界大戰に於てすら「ロンドン」「バー」が獨國航空機により爆彈の見舞を受けた狀況は附圖(畧す)の通りである。將來は推して知るべきである。

陸海軍活動の背後には之を後援し之に軍需品を送り傷病者を愛護し且つは自らの生活を支ふる爲、老幼なく幼なく、男も女も力に應じて不休の大努力を繼續するのである。斯く武力と民力のあらん限りを悉して戦争に従事すると同時に、彼我の間には宣傳戦も盛に行はれるであらう。何と云つても戦争原

動力の第一要素は物でもなければ金でもなく國民の精神意思そのものである。國民精神の緊張が弛み繼續意思が坐折し忌はしい思想などが侵潤して來れば戦争の遂行は直に困難となり途中で恐るべき結果を持ち來すこととなる。此の急所を衝くべく對手はあらゆる宣傳其の他の手段に依り我が民心に悪影響を與へ意思を鈍らせる事に大努力を費すであらう。又世界の同情を自國に向はしめんが爲將又自國の信用を高めんが爲種々の宣傳をも試みずには措かぬ。空中海底陸上各種の通信網を制扼して居る國は此宣傳戰に於て極めて優越の地位に立ち、虚權の事柄を眞實の如く信せしむる事さへ容易に出来るのである。戦局が進んで戦争に依る人民の苦痛が愈々深刻を加ふるに及び、それにつけてこんで此宣傳戰は益々激しくなる。其極國民精神の健全鞏固を缺き思想的洗練の不充分な國民は遂に敗者とならねばならぬ。世界戦に於て辛竦を極めた宣傳戰思想戰の事實はまさしく「尙吾人の耳目に新である。尙彼我の間に情況の探り合ひも當然盛に行はれる。陰謀奸計も縦横にめぐらされるであらう。之等に乘せられない爲には政府や統帥部の處置にのみ委せて置く譯にはゆかぬ。國民全部が細心慎重に之が防止に當らねばならぬ。

X X X

天は正しきものに與し、正義の爲に死力を竭す國民の努力は正當に酬られねばならぬ。苦闘幾月か幾年かの後、勝利の榮光は各正しく熱誠努力した國民の頭上に輝くであらう。斯くて講和の日は來るのである。講和の爲適當なる時期の捕捉は古來極めて困難な事柄とされて居る。早きに失するも遅きに過ぐるも共に宜しくない。要は正しい主張を貫徹し而も將來に禍を殘さない事が肝要である。戰の幕は斯くして閉ぢられ講和の大詔一下世は再び楽しいそして眞正なる平和の生活に入るのである。

体育のこころ

特別會員 三浦梅次

冬の日……と云つても、惠まれた様な冬にはめづらしい暖い日曜日だった。Sはいつもの通り朝早く起きて懸命に勉強してゐる。時々磯浪の砂を洗ふ音を微かに聞いては、疲れた彼の心を慰め、又その柔い明るい空氣の中で描いた繪を眺めては、一人ではゝゝゝである。もう春だ、春だ、万物皆新しい世界に蘇へらんとしてゐる。あの苦しい冬に、耐へ來た草の……はちきれんとする若芽、それはよく若人の純真な心と似通つてゐる。Sはもう大分疲れたと見れば、体を全部机にもたれて何事か考へ込んでゐることだ。

「ゴメン。」

見ればKである。

S「ようこそ上り給へ。」

K「ヤア御勉強だね。」

S「イヤ勉強と云ふ程のこともないが、まんざら日曜を棒に振つても惜しいからな……。」

Sはかう云つて無邪氣に笑つた。KとSは同じ學校出でKは今小學校にSは中學校に奉職してゐる。然し趣味も同じ關係でよく野外寫生に、グラウンドに日曜をたのしく過すのだつた。二人の間には面白い話が、あれから此れと、數十分交されて行つた。Kは思ひ出した様に、

「此の内本を讀んでゐたら体育運動の意義が一寸書いてあつたが、サツバリ意味が取れなかつたが、君は知つてはゐないか。」

それは易い事だとSはKに次の様な事を話した。
 「体力を練磨して全身的の血液循環を旺盛にし諸機能を敏活に發育を促しその上此れを強壯にするに共
 に意氣を旺盛にし快活なる精神を養ひ品性を陶冶するのである。そして体育運動を行はせるものは此
 の所に書いてある様な心、身、性、三方面の効果を収める様に氣をつけなくてはならぬ。」
 と一冊の研究ノートをKの前に差し出した。そのノートには美しい文字で次の様な事が記されてあつた。

▲体育運動の効果

(イ) 精神的方面

A、自發活動が根本義であるがその半面には責任と云ふ事があるから愉快と責任は合致する。故に
 よく物事に注意するのである。目はハヤブサの如く、脚は駝鳥の如く、手はピストンの如く、
 さうして精神を統一す、簡約するなら精神の剛毅沈勇を養ふのである。

B、機智頓才を練習する機会が多い。臨機應變畫策自由、彼の英將ウエリントンがウォータロー
 にナポレオン將軍を見事破つた。そのウォータローの勝利は英國イートンの運動で得られた
 のである。

C、一見脚と脚——手と手の競争の如きもそれは只の外形のみで其の實彼等相互の心靈なる意力を
 開はしてゐる(道徳上勇氣と云はれてゐるもの)此の人體は意力によつて始めて動く、そして極

度の意力を要するとき忍耐持久の力が養成せられるのである。

(ロ) 身體的方面

A、運動により血行が旺盛となれば心臟より來る老廢的を多く持つて來る血液を早く清い血液にし
 なければならぬ。此の作用は血の環りがよくなるにつれて盛んになる、その結果肺を強くし
 甚だしい呼吸に堪へ得る事が出来る。

B、脈搏數を増し血壓を高めることによつて適當に行へば心臟を強くすることが出来る。

C、總ての体育運動は身體の筋肉を使用するから筋肉肥大し精練されて強くなり、動作が敏活にな
 る。

D、運動によりて屢々同一の命令を傳達するとき神經は其の傳達の速度を増し刺戟力も亦強くなる
 のである。又筋肉の訓練の結果其の感應力を増し神經を勞せしむることが少くなる。

(ハ) 品性上方面

A、日本人は早く大人振ると云はれてゐるが、体育運動を行ふものは活動性を利用し自由活動を助
 成するから天真な無邪氣な、そして清いしかも自由な氣に導いて呉れる。

B、人は知るからと云つて決して實行に表れない、自らの確信により力強く實行するのである。一
 度ランニングで負け二回負け、三、四回とする内に段々と奮發心か勇氣が起る、そして始めて
 自信力がつく。社會の競争場裡に立ちて体力のあらん限り戦ふのも此の力より外に無い。

C、反則して勝を制してもそれはカンニングであるから萬人が認めない。盲従でなく真正への従順

で秩序命令を尊び善良なる社會精神に歡喜して服従する。故に眞正なる服従の下に自由なり活氣がある。

D、公明正大に堂々と行ひ極力戦つて自分より強いものに勝てないのは當然である。とにかく社會人は勝ちたい心があれば少し規則を破つても自分が勝ちたい心が起るが、その規則を犯すのみでなく規則の意を汲んで行動する Do Your Best 負けても恨まず勝つても誇らず美しく勝敗を決するのである。純正の勝利は名譽、カンニング的の勝利は恥である。以上は正々堂々と場に臨んで美しく決戦するのが此の精神の發露である。

E、又多くの伴侶者と一定の規則の下に共同して運動をなすは社會人が幾多の協同心を以つて社會のために盡すと同じである。

K「よく分つた。詳しく書いてあるね。必要なときには借して呉れ給へ。」

S「よろしいとも……。」

しばらくして又Kは、「君あの萬國オリンピック大會と云ふのがあればどんな目的で又この國で創設されたのか。」

S「その萬國オリンピック大會については多くの体育書にも書いてあり僕のノートにも書いてあるが簡單に言へば……。」

一杯コーヒーをKに進めて又話しをつづけた。

S「現在萬國を通じて最も規模の大きく組織的に出來てゐる競技會は萬國オリンピック大會である。その生ひ立ちには色々の理があるだらうが一貫する目的は文明病の豫防及矯正にあると思ふ。文明の進歩に對して人體の退歩、此の有様は何を意味するだらうか。キット望ましい世界の文化に良結果を與へないと思ふ。そこで第一に國民の健康と云ふことが必要になつて各國が加入して四年に一回づつ大會が行はれ、それに各國が代表者を送つて互に覇を競ひ、科學的練習、合理的必勝法を研究し以つて國民体位の向上を計らんとしてゐる。その大會に参加してゐる國は三十ヶ國餘りも有つて世界全部と云つてよい。一九二四年パリには獨逸は参加してはゐないが次のアムステルダムの大會にはなるべく入れてやりたいと云つてゐる。」

K「オリンピックと云ふのはどんなわけだらうか。」

S「それを忘れてゐた。實はバルカン半島の先端にあるギリシャがBC四九〇年九月にペルシャと戦つたときギリシャが大勝利をしたあの富力、あの兵力の充實した、領土の廣大なるダリオス王を打破したのはギリシャの國の内でもアゼンスのみであつた。此のアゼンスから二十六哩四分一の地點からマラソンの野に大戰が開かれてどう／＼アゼンスが勝つた。此の捷報を早くアゼンス市民に傳へんと一使者はマラソンからアゼンスへ走つて歸つて報ずるとその使者はバタリと倒れて死んだ。この使者を記念するために今日のマラソン競走なるものが生れた。實は二十四哩四分一が正式のマラソンだが短縮して五哩十哩でも今ではマラソンと云つてゐる。此の様な勇悍無比のギリシャは國を擧げての尙武的精神を如何なる方法で養成したかと云へばBC七〇〇年頃からギリシャのエリス海岸にアルフオイズの流れに添ふてオリンピック村にゼウスの神を祭る社があつて四年毎に行はれ、大祭には全國か

ら集つた精銳の大競技會がある。此の覇者は詩化され彫刻化され、王侯の待遇をさへ與へられてあつた。故に一方には此の競技會が体育武術を奨励して國民の意義を鼓舞すると同時に文學美術の進歩を計つた。第一回は一八九六年アゼンスにて行はれ、第二回は一九〇〇年パリにて、第三回は一九〇四年米のセントルイス、第四回は一九〇八年ロンドン、第五回は一九一二年瑞のストックホルム、第六回は一九一六年に獨のベルリンで開く筈だつたが歐洲大戰で無期延期となり、一九二〇年に白のアントワープで行はれ第七回は一九二四年パリにてあり、次は一九二八年にアムステルダムに於て行ふことになつてゐる。日本が參加したのはストックホルム、アントワープ、パリの三回である。今日本選手を世界競争場裡に立たしめるには餘りにブアーであつた。敗因は國民の体位よりも一歩深く考へて歴史的立場、科學的研究、練習の不備と思ふ。然し先年のパリに日本が可程の傷手を受けながら（震災により）十数名の選手を送つて豫期以上の成績を成し得たについては内外人の驚異の瞳を以つて見るも尤と思ふ。」

K「よく分つた。それから、極東オリンピック大會と云ふものがあるが何かの御祭から始つたのか。」

S「あれはマニラのカーニバル祭を好機にフィリッピン在住、支那在住の米國人が起したのだ。」

K「いつ頃から。」

S「第一回は萬國オリンピック大會が、ストックホルムであつた翌年一九一三年、マニラで開かれた。加入したものは、日本、フィリッピン、支那の三ヶ國であつた。第二回は上海、第三回は芝浦、此のときから日本は正式に加入した様な事だ。第四回はマニラ、第五回は上海、第六回は大正十二年大阪

で行はれた事は耳新しい、國を擧げて熱狂した日本選手をして勝たしめよ、青年よ、壯年よ、老年よ日本は大日本帝國を此の度こそはほんとうに日本の國內は勿論外國在住の帝國臣民は上下を通じて應援した。青年は壯年は老年は勝利と云ふものについて、どんなにあこがれてゐただらう。長い／＼辛苦堪へられない程の國を擧げて作つた實質的チームは豫期の通りの行動で勝つた。又一四年に第七回がフィリッピンに於て行はれたが、審判問題につき日本選手の退場となつてフィリッピンが優勝する所となり、第八回は本年七月下旬上海佛租界バイオニアに於て行はれ我國からも百十数名を以つて組織したチームを送つた。結果は、野球は日本、水泳はフィリッピン、陸上競技は日本、排球は支那、籃球はフィリッピン、庭球は支那、蹴球は支那、混成競技は日本で三種の選手権を得て前回の大會に恨みを吞んでマニラに残した、天皇賜盃を獲得し二ヶ年の臥薪嘗膽の宿願を果してめでたく凱旋したのは君も知つてゐるだらう。

K「そして次はどこであるのか。」

S「一九三〇年五月十日より二十日まで東京にて開催されることになつてゐる。」

K「あゝ今日はほんとうに面白い話を聞いた。色々御世話様になりました。」

S「イヤ又暇のときには……………」

K「有難う。さようなら。」

S「さようなら。」

六疊の間に取り残されたSはこんなことを思つた。

英文欄

OUR SCHOOL WORKS EXHIBITION

By Soichi Yamamoto, 4:1.

The annual exhibition of our school was held on 11th of September, the second Sunday of the second term. It was a great success owing to the favourable weather. Part of the school building was divided into the sections for geography and history, physics and chemistry, drawing, penmanship, and natural history. Making advance yearly, it has shown much greater progress this year than ever.

Many geographical models, historical tables and books, etc. were displayed in the first two rooms. They were all worked out with great endeavours, most of which were fitted up by some of our boys. There was a panorama of waterfall in the adjoining dark rooms. It was so vivid and splendid that it seemed as if it were an actual sight. There were many physical works devised in different ways in the laboratory. Some of the pictures put up on the walls of the drawing room were drawn by our fellow-pupils, and other by children of the elementary schools in Hagi. Indeed, some of them claimed high admiration among the visitors. The penmanship rooms also attracted much attention. The last was the natural history room. Many kinds of specimens of grasses, sea-weeds, and insects collected by boys were novel. These exhibits were fruit got by the industry on the part of the boys during the last summer vacation.

It is not quite difficult to make these works. If we always keep it in mind only to do so, and to utilize our spare time we are apt to idle away, we can get such fruit.

Working thus is the best way not only of making the most of the vacation but of improving mental faculties of us young men.

我國の体育運動も段々と普及して来た。こんなことも利害得失は有るものだ。利害が目だつて来れば害
失を指摘して来るものだ。我々は利得を愈々大ならしめて害失をより少なからしめ体育運動の効果を充
分に收めなくてはならぬ、我々指導者は、正しく、普ねく、絶えず、これをモットーとして進んで行か
う。

おゝスポーツは至純なり!!!。

いざや行け

特別會員 金子乙助

體育大會に出場する選手に
いざや行け、行きて朝夕、鍛へたる、
力つくして、わざくらべせよ。
その足の、そのただむきの、逞しき、
力ためさん、時は來にけり。
我が選手の活躍するを觀て
技きそふ、我が選手らの、勇しき、
ふるまひ見れば、心ごどめく。
學びやの、名のみ思ひて、いさましく、
身をわすれても、わざ競ふかな。

我が選手の優勝を祝ぎて

朝夕に、鍛へし力、あらはれて、
今や手にする、かち旗あはれ。
選手らの、力あはせて、かち得たる、
旗に小春の、風ぞそよ吹く。
陸上競技にて、三年うち續き勝ちた
るにより、優勝旗永久に我が校のも
のとなりしを祝ぎて、
うち續き、三とせ立てにし、いさほしの、
光かがやく、これのかち旗、
來ん年もまた優勝せんことを祈りて
挽みなく、技しみがかば、かち旗の、
求めずとも、手にぞ入るべき。

expansion of the town must certainly look to its citizens for co-operative spirit and constant activity. The responsibility for building up great Susa entirely rests upon our shoulders. Then let us sons of Susa make great efforts to be crowned with most success.

THE NEWSPAPER

By Tozaburo Matsuura, 4:3.

The newspaper is one of the most necessary and indispensable organs in society at present, and the more the world becomes civilized, the more important position it occupies.

In ancient times there were some things analogous to this in our country, but they were much inferior even to handbills of the present day. According to the recent progress of civilization, especially of the typography, the newspaper has been improved gradually by the unremitting pains and efforts of our progenitors, and at length such well-equipped newspapers as seen now have come into existence.

The newspaper apprises minutely in all lines of life, and comfortably sitting at home we can be acquainted by it not only with internal affairs but with conditions of foreign countries and main currents of the world. But for it, we should remain ignorant of the facts of the world and ever be wanting common sense.

Seeing that it has great powers and a gigantic influence in society it is needless to say that it ought to bear weighty responsibility, for its primary object is to develop public opinion on great public interests and guide it.

As it is so important that the world cannot dispense with it even for a day, its writers must be equipped with extensive learning and sound moral sense. In fact, most leading spirits in the journalistic world are worthy and notable persons of their respective countries. It is truly said that the real worth of a newspaper may represent that of a state.

GREAT SUSA

By Toshio Shimizu, 4:2.

Susa, which is my dear home, is a pretty little town on the north coast of Nagato province, with a population of 5,000. In population, it may rank next to Hagi in Abu-gun. Needless to say, it faces the Japan Sea. Before the Meiji Restoration, it belonged to the territory of the Masuda family.

Hagi has been regarded as a good place in which to educate young people, as it is rich in places of historical interest, but Susa is not so. The present school buildings of the Susa primary school, however, have been built on the old site where the famous Ikuei-kan stood in the feudal age.

By the time the next spring vacation begins, the railway works between Susa and Inoura will have been completed and then we shall be able to hear whistles of the locomotive. In the near future trains will run from here to Hagi station. On the completion of the railway, the products of the town, such as fish, charcoal, and wood, will soon extend their market.

From nautical point of view, a certain expert recently inspected Susa bay and was struck with the beauty of its scenery. And this masterpiece of nature is going to be introduced to the whole country by Mr. Takashima Hokkai, a well-known artist. It is called "Little Matsushima". When the San-in main line is opened thoroughly for traffic, many visitors are expected to come to Susa to enjoy the beautiful scenery. In winter high waves in the Japan Sea often make it difficult for ships to enter the harbour, but once they have got in, they are quite safe. Indeed, the harbour of Susa is better than that of Hagi.

Such being the case, it is not too much to say that bright prospects are in store for Susa. Then what ought we to do in future? The

away." But the intervals between lightning and roll grew shorter. At last, a lightning flashed right before my eyes, and a severe thunder cracked almost at the same moment. I began to fear lest a thunderbolt should strike my house, and rend it asunder, hurling me into eternity.

Suddenly the electric light went out, and it was pitch-dark. Very much frightened, I sat still for some time, then the electric lamp was lighted, the thunder ceased to roll, the rain was over, and a beautiful full moon was seen in the clear sky.

ALARM - BELL FOR THE YOUTH

By Genta Kodama, 5 : C

"Japan has a large area", says Marcopolo in the diary of his travel," and its people are not only of white complexion but also very courteous. They build their palaces of gold. The rivulets there are paved with gold-dust. It abounds also in pearls."

How small an island, however, the map of the world shows to be our mother country! Since the close of the world war, our country has fallen in financial difficulties, and is now really in distress. If these conditions continue for a long time, we shall be beaten, in my opinion, in the peaceful war of commerce and industry among the powers.

Our rising generation! Cultivate a habit of industry while in youth. We must train our mind and body to be an excellent people in future. Now our country is suffering from running short of provisions, as the population has been gradually increasing, while our land remains small. When you are old enough, go abroad, and exploit the natural resources buried in foreign countries, thus solving the food problem. "No poverty can overtake those who are industrious," says an old proverb.

"JAPANESE - EUROPEANS" AND "MODERN GIRLS"

By Sukenari Miyazaki, 5 : A

The other day I was reading a certain book, when I found an interesting thing in it. I will tell you about it.

Now-a-days there are many who have returned home from the western countries. These people form a kind of class in Tokyo, called "Japanese-Europeans", I am not treating of the learned and virtuous who have been abroad. These Japanese-Europeans are those who only have been in Europe. They are only wealthy. Only their way of speaking and dressing is different from ours. They are all effeminate. They are by no means superior to us in point of mental culture.

As for "Modern Girls", they are none but imitators of the manners and customs of the American girls. They are all masculine. They have their hair cut as short as possible, and wander along the street in high spirits. How funny their bobbed hair is! They do not know that their long, tufty hair is admired even among the foreigners.

Both feminine men and masculine women must be kept away from us. Fortunately, in Hagi, such a man or a woman does not exist at present. I hope we, people in Hagi will not be affected by such a bad custom for ever.

THUNDER

By Hiroshi Nagatome. 5 : B

It was raining in torrents outdoors, when I was preparing myself for the next day's lessons in my study. The rain did not seem to stop, but fell heavier and heavier, accompanied with distant rolls of thunder. Lightning flashed, but, at first, they were not immediately followed by rolls, so I set my mind at ease, thinking, "Thunder must be far

The year's at the Spring,
 And day's at the morn;
 Morning's at seven;
 The hillside's dew-pearled;
 The lark's on the wing;
 The snail's on the thorn;
 God's in His heaven—
 All's right with the world.

—Robert Browning.

此の英詩の譯は77頁の所にあり。

上田敏氏の譯は名譯なれば對照し

て熟讀玩味すべし。



生徒作品

生徒作品は不相變休暇中の宿題を載せることにしました。

早起

第一學年 久保田 茂

時計はまだ五時前だ。明星が薄くぼつねんどして、瞬いて居る。近く鶏の鳴聲が耳に響く。家の前を空車が、二三臺通つた。土を掘取りに行くのだらう。もう五時半だ。平生僕の起きる時だ。

製絲會社の笛が鳴り渡る。次いで機關車の汽笛もやかましく聞える。松陰神社のお神樂があがる。店の戸を開ける音が、此處彼處に聞える。今一番列車が白煙を吐いて進んで行く。往來はやゝ、ざわめきだした。

我家の夏

第一學年 岡藤徳太郎

我が家は、後に川もあり、立木も多くて、夏を過すには、よほど、良い所であるが、赤子が居るので、大變やかましい、其の上、外では、雑多の蟬が、終日やかましく鳴く。晝の間は、一時も聲の絶わぬ時がない。やがて蟬の聲も絶え、赤子も寢静まる頃になれば、蚊がブン／＼とやつて来る。あゝ、我が家の夏は、實にやかましいものであるが、又そこに安らかさがある。

夏の雨後

第一學年 吉田 榮一

夕立がやんだ後、ふと簾を上げて見ると、前の庭先は、しつとり濡れて、緑色の葉末からは水晶の様な雫が、地面にいくつも／＼と落ちて来る。又向ひの山々を見ると、雨後であるだけに、一層緑したゝるが如く、道路の方に視線を投げると、白衣の人が、袂軽く往來してゐる。後の

山では、蟬がぢい／＼とやかましく鳴き立てゝゐる。蝸の聲も、今日初めて其の中に交つて聞けた。銀の鈴でも振つた様に、涼しく冴わて聞けた。外に出て見ると川で、魚を釣る人、水浴びる子等がある。夜に入れば、花火を弄ぶ子供や、橋のたもとで、水の流れを見て涼む人がある。草むらの中では、名も知らぬ虫があらでもこちらでも、美しい聲で鳴いてゐる。あゝ涼しい。と思つた時、その風趣はびしやりと心のカメラに焼著いてしまつた。あゝ、實に涼しい半日であつた。

我が郷里

第一學年 波佐間信行

チリン／＼と警告の鈴、ドン／＼／＼と響き渡る石灰岩を砕く爆薬の音、ガラ／＼／＼と石灰岩を粉にする機械の響、けた／＼ましい採岩機の音、これ等の入り交つた不自然な音楽が耳をつく、これが我が郷里の聲である。

勾配の緩やかな青々とした山、切立つた幾百丈の石灰岩、是れは、我が故里の姿である。

月は夏の月。而して、秋の月の感がある。

「獅子岩」に上る

第一學年 水野三郎

夕方散歩がてらに、獅子岩に上る。岩の頂上から見ると、四方を取巻いた巍々たる山に、夕靄がかゝり、空は、遠く、夕日に、紅にそめられてゐる光景は、なんとも言へない。眞下に見ゆる演習場も、今は兵隊もゐなく、大砲のみが、廣い原に、しょんぼりと列をなしてゐる。家や兵舎を見ると、夕餉の煙も、もはや消えてゐる。獅子岩に兵隊が、多く涼みに上る。兵隊は岩の上に上つて、喇叭を吹く。其の喇叭の音が、夕靄を破つて人家によく聞ける。實に勇しい。もう、夕日は西の山に落ちて、紅の空は何處へか去つて、青白い空に變つた。岩を下つて、我家に歸る。

初秋の月

第一學年 岩田松夫

私は、秋の月を好むのである。あの冴わた月と

お寺の鐘や、金光教の旗、小學校や郵便局汽車の出入、人々の労働、これは我が故郷の智能とも言ふべきである。

青い壘を敷いた様な稻、山の様に積まれた石灰俵、山を蔽ふ木木、これは我が里の富である。我がなつかしき郷里は、我等の偉大なる力と、此の智能と、この富とを以て、永久に若やいで行く里である。

夏の夜

第一學年 岡藤宗次

橋畔の子供の聲もやみ、四邊は急に、ひっそりとして來た。

木の間よりもるる月は、次第に雲間より離れて、障子を照す。晝の暑も忘れる様な、涼しい風が微かに吹く。御祖母さんの扇の音が、淋しく聞ゆる。木魚の音も、遠くきこゆる。盆だ。さう思ふと軽いおののきを感じる。

月はすつかり雲より離れた。五位鷺の啼く聲のみ時々きこえて恐ろしい様に静まりかへつてゐる。

冴わた空を見ると、心の底が清くさつぱりするのである。さうして、氣持よくなるのである。

私は、そんなに、秋の月を好むのに、今年の秋には未だ一度もその月を見たことがない。初秋の月が、見たいのである。毎日天を仰げども、何時も雨雲が空を蔽うて居つて、月影が見えない。早く氣持の悪い雨雲が退いて、冴わた月の照るのを見たいのである。

出郷

第一學年 瀬畑良作

トン／＼と發動機は動き出した。僕は帽子を手にして、うつむいて居た。しばらくすると、船頭さんが、「出るぞ」と一聲叫んだ。船はしづ／＼と走り出した。見送りの人々は、皆こちらに注目して居る。波止場では、父母や弟等が、しょんぼりと立って居る。對岸からは、弟と石田君が、しきりに手を振つて居る。船は左へ轉じて、「ヨボザキ」へ廻つた。嗚呼、昨日は此處で、弟と石田君と、三人で飛んで遊んだり、又、さゝるを探つた

りした處だと思ふと、出立するのが、悲しくなつてきた。また九十日ばかりせねば、此處が見られないと思ふと、思はずほろりとした。船は全速力で速る。弟と石田君は、まだ手を振つて居るらしい。

海水浴

第一學年 仁保文雄

朝起きて見ると、空はよく晴れてゐる。午後お父様と兄様と私と弟の光ちやんとで、海水浴に行つた。いつもついて来る弟の良ちやんは、今日は少し腹が悪いので、お父様が「今日は行かない方がよい」とおつしやつた。良ちやんは、わあ／＼泣いて、「腹なんか少しも悪いことはない」と附元氣です。良ちやんは少し發熱してゐるのです。それで、お父様は「此次行く時、連れて行つてやるから、今日は母様と二人で留守番をしておいでなさい」と、おつしやつた。それで僕等は海へ行ききました。兄様に、寫真もどつてもらいました。私は水の中へ這入つてゐるところを、光ちやんは浮

輪を持つて居るところを。それから着物を着て今日の樂しかつたことを思ひ浮かべながら家に歸りました。歸つて見たら、かわいさうに、良ちやんは頬に涙の痕をのこしたまゝ、ぐつすりと寝てゐました。

水泳

第一學年 黒磯映三

「兄さん行くよ」

白波をけちらしながら、海の中に走り込む。す／＼と碧の水をかきながらすすむ。

「おゝい」と兄が手を舉げるのが微かにわかる。

兄は半分の所まで迎ひに来てくれた。二人はすす／＼すすむ。後を見ると、人々が唯點々として見ゆる。

「おゝい」と云ふ聲が聞ゆる。兄は一町位先を泳いで居る。やつとおひつく。こんどはもう、松原が浮いて見ゆる。

「歸らう」と云うて、廻れ右をする。松原は、しだいにうかびあがる。もう満ちやん年ちやんの

の聲がする。又してもふくろうが鳴く。又涼しい風が吹く。

月夜

第一學年 田邊滿希

「ギイ」といふ音と「バチャツ」といふ音が、ばかに高くひびく。

僕等兄弟三人は、今ボートに乗つて今宵の月を眺めてゐるのだ。

ボートは晝のやうに明るく、銀の油を流したやうに、おだやかな川を「スイ／＼」と滑つて行く。

岸の家々は淋しく、月に照らし出されてゐる。岸に設けられた、櫓の上に、二三の人が、涼んでゐる。

漕ぐ度に、穏かな水面に波紋を畫く。何だか惜しいやうな氣持がする。

向う島の松の梢が、時々そよ／＼とゆれる。ふと、漕ぎやめて、前方を見渡した。

白い水路がくつきりと、書き出されてゐる。

萬歳するのがよくわかる。やつと歸つた。身を重さうに砂の上になげる。皆は面白さうに私の上に砂をかぶせる。笑ふ聲、叫ぶ聲、一日をすこす樂しさ。實にこれが私等の娛樂場だ。

夏の夕暮

第一學年 近藤信一

小蟬の鳴く聲もいつしか絶えて、あぶら蟬が々々鳴く。電信柱の電燈が薄い光を放つて居る。庭の草木は青々として心地よい。松の木は美しく、且鮮に見ゆる。椿の葉はつや／＼と光つて居る。時々涼しい風が、颯と吹いて来る、その度に風鈴が心地よい音を出して鳴る。西山に沈みかけた太陽は四方に赤い光を放つて居る。その光が雲にあたつて美しく、目立って見ゆる。二人の者が語り合ひながら自轉車で角をまげた。電信柱に小蟬が一匹とまつて居た。くもが、せつせと巢を張つて居た。「ホーホーホー」／＼かか／＼／＼が鳴く。太陽は西山に全く没し、あたりは前よりも一層ぐらくなつた。涼しい風が吹きすぎた。せごの方で妹

夏休の終

第一學年 小橋 一男

あゝ六週間の楽しかつた夏休も最早や残り数日になつた。實に光陰如矢である、一學期成績表の除りに悪かつた爲、大變叱られたのも、つい此の間の様だか、四十日の休暇は夢の如く、何時の間やら、二學期を迎へるばかりの今日となつた。考へて見るに、此の四十日間、私は、唯、一度も旅行登山はしなかつた。だが、家に居て、家事の手傳運動復習等は、出來得る限り、勉めた積である。

此の上十分なる努力と、周到なる用意とを以て二學期の難關にぶつつかり、一學期の失敗を回復せねばならぬと深く心に誓つた。

病床の朝

第一學年 服部 正吾

私はふと長い眠から覺めた。靜かな夏の夜が明け放れてゐた。赤々としたまぶしい太陽の光が戸の空は眞赤で、火の手の様である。いろ／＼の美しい模様は到底繪に書き著すことも出來ないであらう。夕日も沈みかけてゐる。しばらくして夕日も没し、丸い月が出る。もう月は家の松の木の小枝の間からよく見ゆる。

夏の朝

第一學年 那須 武雄

食事をすまして、外へ出て見ると、もね上るやうな青葉の山の彼方を、今朝も蔭があてもなく、悠々と輪を描いてゐる。「デ、デ、——」どこちらの方では蟬の聲が朝の空氣に震へてゐる。前の川面には空の美しい桃色の雲の影がうつゝて見ゆる。風はそよ／＼と如何にも極樂へ行つたやうな氣がする。

ふと、向うの川岸を見れば四五人の男が白シャツ白ズボンで綱をこしらへてゐる。「糸より」の音がブーン／＼とひびいてくる。私はしばらくこの光景にうつとりしてゐると、傍の木の茂つた中から露の雫が、ポツタリと光つて落ちた。私は、つい

の隙間から障子を通して病床の邊に明るく映つてゐる。私は頭に手をあて、見た。昨夜の高熱の名残がまだかすかに残つてゐる。其の儘、生温くなつた氷枕の上に頭をのせ、ぼんやりと天井をみつめてゐると、鳥か二三羽元氣よく「カア／＼」と鳴きながら、指月の方をさして飛んで行く。多分嚴島の森の巢を出たのだらう。あの鳥達でさへも森から森へと樂しげに飛び廻るのに、自分はいかに病てねてゐなければならぬと思へば、暑苦しい病床がいやになつて來る。こんな事を考へてゐると茶の間に掛けてある柱時計が五時を打つた。小さい弟の寢息がかすかに聞ゆる。何處かで戸をあける音がする。

夏の夕暮

第一學年 頓部 幸夫

夕食を、すまして、縁側に出る。もう蟬の鳴聲も聞えない。だん／＼と薄暗くなつてゆく。靜で音一つ聞えない。時々、竹本の松の上にとまつてゐる鳥の鳴聲か、かあ／＼と靜さを破る。西

と立つて、何氣なく家に入った。

或夜のこゝろ

第二學年 井町 秀介

其の夜は大層氣持のよい晩だつた。私は風呂から上つて、前の道を歩いた。湯上りのほてつた顔に、田の稻葉をさめかして來た涼しい風が、快く當る。夏とは云へ、田と山ばかりの此のあたりは、夜は非常に涼しく、路傍の叢には虫の音が、オーケストラのやうに、にぎやかに聞ゆる。

しばらくあちこちと歩き廻つて、暑さをすつかり抜きとつて家へ歸つた。

時計はまだ八時をさしてゐたので、私は代數の残り、しようと思つて、机についた。

私は窓を開いたまゝ、ノートに鉛筆を走らした。外では虫の音が、一層にぎやかになつてくる。

八代村への旅行記

第二學年 吉原 重恭

水清き阿武川の流線滴る指月の山影を窓外に眺め眞夏の萩、炎天下の萩にしばしの別れを惜しみつゝ、玉江驛より車中の人となつた。山又山を縫うて汽車は南へ／＼と進進をつまけた。厚狭驛より本線に乗換へ東に向つた。数々の驛を経て三田尻に着いた。右に廣々とした平和な鹽田を望み左に高く防府天満宮の神徳を偲びながら繪の様な瀬戸内海の風光が轉廻して來るのを賞し徳山煉炭所のどす黒い煙を仰ぎつゝ、下松驛に下車した。

自動車にゆられ激流の岩を噛み岸に碎くる音を聞きつゝ、北に／＼山道を登つて行つた。夕暗が下り激流の音のうすれ行く頃鶴の渡來地で名高い周防八代の仙境に着いて叔父の家に汗に被れた夏の旅路の夢を結んだ。

長門峽探勝記

第二學年 井上國雄

何といつても有難いのは夏休みだ。今夏は單身天下の奇勝長門峽探勝を試みた。見上げるばかり

の巨岩、肝もひねるばかりの淵、それからそれへ次から次へと展開されて行く。河鹿の聲はひびきわたりて、一段の趣をそへてゐる。目もさむるやうな緑をふくんだ樹々は、鬱々蒼々として天に參じ、山禽は叫んでその情趣は到底筆舌の盡す所ではない。眞に山水の絶勝である。下を見れば幾十丈ともわからない紅葉橋や、晝尚ほ暗き暗淵は、盛夏の暑さも一掃されて寒さをおぼるほどだ。そのうち日も漸く西に傾いたので、名残おしくも僕は夕陽に紅く照されつゝ、長門峽を後に歸途についた。

歸省

第二學年 石橋光介

私は自分の村の境を流れてゐる川迄歸つて來た時には、夏の陽は漸く傾いてゐた。學校から此處までかなり長かつたが左程苦痛ではなかつた。一學期の成績が思つたより良かつた事が、絶えず私の心を引き立て、早く此の成績を父母に見せたいなど、子供らしい心が自分にもをかしい程湧き立

つのであつた。もう一步で私の村だ。かう思ふと私の心にも體にも寛ぎがきて何の力もなく倒れるやうに、ごつかと積に腰を下した。今までの忙しい心も消れて、温かい平和な氣分が私をうつつりさせた。絶え間なく吹くなま温かい風は私を慰めてくれるやうだ。私は汗を拭ひながら、なつかしい村の壁瓦を眺めて、ひとり微笑んだ。

雨後

第二學年 柳井豊作

沛然として襲ふてゐた驟雨はけろりと霽れて邊の風物は拭つたやうに朗かになつた。向ふにもり上つてゐる指月山は樹々の一葉一葉も認める事が出来るやうである。

庭の草木は灼熱より甦りて生々とした青葉の葉末には玉露を宿らせてゐる。それは見る位置の僅の差にて或は赤に或は青に見ゆる。私は無心にそれを凝視してゐました。

微風が吹く毎に思ひだしたやうに宿つて居た玉露がばら／＼と落ちる。

精霊とんぼが五六匹スーシューと行つたり來たりしてゐる。

涼しき風がそよ／＼と頬を撫でる。

眞夏の喘は何處へ行つたやら。

試験

第二學年 堀野準一

時間は次第／＼に過ぎて行く。秒針の刻む音さへ氣がいら／＼する。も一度問題を見る。分りさうにもない。又時計を見る。後六分しかない。どうして試験はこんなに時間が早くたつのだらう。見渡すと誰も彼も皆むづかしさうな顔をして、鉛筆をなめて居る者もあれば、にくらしさうに問題を睨みつけて居る者もある。後の方でしきりにすら／＼と書く音がする。K君だらう。あゝちれつたい、前を見ると三三五五と出て行く。のこされた者は日頃あまり勉強しさうな連中とも思はれぬ。又問題に目を落す、うん何處かにあつた様な氣はする、が併しわからない。鉛筆を投げ出して時計を見る、あと二分、氣がくしや／＼する。胸はど

きくする、秒針は遠慮なく進む。

病間日記

第二學年 板垣邦雄

七月の日は已に高く昇つて、樹々の陰は美しい芝草の上に濃く投げられて居た。何の虫だか一つ二つ此處の百合から彼處の百合へとさまよつて居る。僕は今赤痢といふので五六日前から〇〇病院の第三號病室に横つてゐるのである。看護婦が廊下にかかるやかな草履の音を立て、室に入つて来て小脇に挿んであつた體溫計をとり上げた。「何度ありますか」とたづねると「六度七分あります」といふ。「それでは今日も平熱ですね」「だけごまだ四五日はかゝりますよ……さうですか」と思はず悲觀の聲を出した。平熱であるのになせ退院を許さないのであらうか。僕は始から患者と云ふ患者ではない。又熱も入院した二日目から平熱になつてゐる。もう退院してもよいだらうと思つた。ちつとベッドの上で寝てゐるのが何だか馬鹿／＼しい様な氣がする。

廊下では晝食の御膳を運ぶらしい。

あゝる夜

第二學年 藤本朝三

それは大變靜かな夜の事である。祖母は活動寫眞を見に行かれたので家は母と僕と二人である。鼠にでも引かれさうで寂しい事夥しい。後の窓はあけてある。夜の冷氣は物音一つしないあたりの静けさと融合つてひし／＼と身に迫るやうである。勉強で疲れた眼を後に向けると、朝顔の蕾んだ花の先の赤青紫茶色などが葉の緑と共に淡い電燈の光を受けて居る。突然靜けさを破つて自動車のエンヂンがけた／＼ましい音をたて始めた。がほんのしばらくでやんでしまつた。復もとの靜けさになる。かすかに車のさしる様な音が聞はれた。車には違ひない様だがそれなり聞へなくなつた。がちや／＼、滅法な音が台所でした。人一倍臆病な僕は思はずひやりとした。音はそれきりであつた。自分はそつと起つて窓際によりかかつた。空は曇つて居るらしく星影一つ見ぬ。

七月二十一日

第二學年 山本吉夫

故郷戀し。あゝ故郷が戀しい。此は他國に住む人のみの思ひではない。ただの十里しかはなれてゐない僕等ですら故郷が戀しいのだ。家や友達のことを思ふと何も手につかない。愉快に睦しく父母の膝下で暮して居る者は何と幸福者だらう。刻々この時の経過するのは嬉しい。待遠しく汽車を待つ時………汽車は來た。乗り込んだ時の思ひは………あゝ故郷に歸る日を指折數へてゐたのだ。わゝ遙かに見ゆる故郷の山、汽車は刻々と近附いて來る。此から僕は幸福者の一人となるのだ。

或る夜のこゝろ

第二學年 末武伍郎一

今度こそは息をこらして待構へてゐる。今度は大きなあぶが一匹來て、僕の足へちよんと止まつた。だんだんかゆくなくなつて來る、靜かに靜かに段々手を下へさげてゆく。まだ止まつてゐる。上に大きな魔手がきてゐるのに奴平氣だ。あぶの命は刻一刻に迫つてくる。ぼーんと一つ、今度は取つたと思つて手をあげるといつの間にか逃げたやらの影も形も見えない。みると高鳴で寝てゐる竹ちやんの足に今のあぶめ、平氣で止まつてゐる。「おのれ糞ッ」ぼーん、やつたやつた、今度は確に手筈がした、手をあげると、ベッチャンコになつたあぶのむくろが血に染つてゐる。僕も最初はひどく小氣味よく感じたがじつとその悲惨なむくろをみ凝めてゐると、何だか可愛さうになつてきた。あゝつまらぬいたづらはすまいもの。

寄宿舎生活

第二學年 鈴木義郎

將來成すあらんとする、學生の精神的修養、及び體育的の修養を成すには、第一に規律正しい生

活を成すが、最も大切である。此の大切な生活を成し得るには、寄宿舎生活を成すが最上の方法だらうと思ふ。即ち、朝は定まつた時刻に直に起き、室内を掃除して、清潔にし、朝の氣持よい空気を呼吸しなから、廣々とした運動場にて、一二の掛聲も元氣よく体操し、食事も、定まつた時刻に、百幾人の澤山な人々が、一緒に食堂に集つて楽しく食事をし、さて、勉強の時間は、黙習と言ふ事にし、それ／＼復習豫習をするに餘念がない。又、入浴時刻も定まり、就床前には、寒中でも汗の出る様な体操をし、楽しく夢路に入る。が、又此等の間には、舎監、上級生、下級生の秩序安寧をも保たれるのである。

或る夜

第二學年 高尾 豊彦

床に入つてから、ふと氣がついて見ればまだ朝顔に水をやるのを忘れてゐた。父からあれ程云ひつけられてゐたのに、若しやらなかつたら大變だと、僕は半分泣きながらそつと起きて眞暗な庭に

出た。僕は音のしないように水を汲んでやたらに打撒いた。暫くしてそつと寢間へ歸つて来たものの、花が枯れはしまいか、若し枯れたらと考へると心配で／＼とても眠れなかつた。翌朝、朝顔は美しい花を一ぱいつけてゐた。

秋芳洞探勝記

第二學年 岡田謙太郎

七月二十二日午前八時我々一家族は自動車にて秋芳洞に向つた。途中は流の緩かな清き阿武川の沿岸を走り、或は陰鬱な山林或は坂路を走りして終に川上に達した。阿武川の支流明木川の絶景はもいはれず。河中には奇岩怪石萬態を呈し、水は清く、流は駛く、河中にて鮎を釣る人のさまも、實に心ゆく眺である。その途中我々は参考になる色々の智識を得る事が出来た。例へば運轉手より炭焼竈の話を、又父から、繪堂の古戦場の話など備さに説明して貰つたなどである。その内に早くも自動車は大田町に着いた。これより一里半が我々一行に待ちどほしく、眼前に秋芳洞の有様が、

想像され、幻の如く現はれてくる。午前十時いよいよ秋芳村に達した。我々は車より下り、徒歩して洞口に向ひいよいよ穴に入つた。洞中の景色壯麗にして、奔湍は萬雷の吼ゆるが如く、實にもものすごい壯觀である。鐘乳石筍は我々をして、實に不思議な感を抱かせた。あちこちには、電燈がともされ、中は大變な見物人であつた。天然の技巧によつて、出来上つた、鐘乳石の不可思議なる細工物は眞に偽の如く思はれる。説明者の聲は洞の奥へしんとして響き渡つてゆく。その洞中のさまざまの景趣實に筆舌のよく盡すところではない。我々は八丁ほど中に入り約二時間にして出た。而して晝食をなし、色々の土産物を買ひ、再び自動車にて歸路についた。我々はかうして自然の風景を探勝し一日の清遊をやつたのである。

口笛

第三學年 八木 哲夫

人の歩み方には、或種類の歩み方がある。常に之を聞きつけてをれば、自然とその人の顔貌を見

ないで、しかも遠くに居てよくその人か否かを判断することが出来る。之と同じ様に口笛にも又特種な吹き方がある。又吹く歌の種類でその人か否かを判断することが出来る。かすかに口笛が聞えて来る。調子は餘り高くもなく又低くもないらしい。唯歌のみはよく耳にする歌らしい。だん／＼近づくにつれて、なれ／＼しい口笛の吹き方であることが分る。益々近づくにつれて誰々であるといふ事はつきりとして来る。「オーイ」と呼ぶ聲に「オーイ」と答へる。確かに僕の思ふ友人である。僕はよくこの人を、斯くして口笛で判断することが度々である。又僕の或友人は、或友を呼ぶに口笛でしてゐる。何故か云へば、彼の友の内には兄さんがゐて、姓を呼べば兄さんが出て来るか判らないからである。口笛はこの様に人を判断することが出来る。

朝

第三學年 南家 廣見

朝未明に起きて井戸側に行つて見ると、四邊は

うつすらと朝霧に包まれて居る。草木の葉には露が宿つて銀色に光つて居る。サーと冷やかな朝風が頬をかすつて通つたと思ふと、向の方の立木がバラ／＼と音がした。蟬がチーと鳴いた。山の頂上から朝日が顔を出しかけて居る。日の光が木の葉の隙から僕の顔を照して居る。

ある風景

第三學年 岡崎正夫

外へ飛び出た。あたりは朝霧がもう／＼と立ちこめて居る。鳳儀山はぼんやりとしてゐて、頂上にある五六本の松も薄墨で畫いたやうにかすかに見える。霧は東の方から西の方へ、だん／＼と流れて行き、あたりはしんとして、もの静かである。僕のすぐそばの松の木で、ぎやあ／＼と鶺鴒が鳴いた。はつと僕はそれに氣をとられて見てゐるとしばらくたつて、鶺鴒は松の露をばら／＼と落して飛び立ち、鳳儀山の霧の中へすひこまれた。あたりは又もとの如く静かになつた。

笛

第三學年 永田正二

或日僕は弟の玩具函を見て「まだこんな物があったか。」と驚いた。三年前N小學校六年の時、伊勢奈良への修學旅行があつた。朝から奈良の名所を廻り歩いて、やうやく午後三時三笠山の麓で休息した。各自の買物も許された。僕はY君と一緒に或雜貨店に入つた。Y君は綿製狸と煎餅を買つた。僕も大佛煎餅と墨を買つた。其時店主らしい人がに／＼して「お添へします。」と五寸位の小さな笛を我々に呉れた。僕は弟の善い土産であると思つて持ち歸つた。それから弟は毎日それを手放さなかつた。強く吹けば汽車の汽笛のやう、軽く吹けばふくろうの聲の様な音が出た。其後萩へ移つた僕は、笛の事等思ひも出さなかつた。今見れば、三年前のあの笛か、弟の玩具函の隅にころがつてゐるではないか。

我が郷里の傳説

第三學年 豊田正之

我家の西方七八町に一小山あり。我等は之を呼びて城山と爲す。西側は絶壁を以て海に臨み、東側には一小徑を見る。北は長き濱を以て又小丘に對す。その濱を西濱と云ふ。今其の傍に魚村あり。村民傳ふ。平家壇浦に敗れし時、その一部將小數の部下を率ひ逃れて我村を通りかゝる。時に源氏の部下北の小丘に陣す。平家の落武者等之を聞き西南の小山に陣し濱を挟みて合戦せり。不幸にして、平家の部將は此處に戦死して、その死體武器等は小山の頂上に葬られたり。以後この山を城山と呼ぶ。又城山の頂上に一松あり。その幹を傷づければ生血出で、その根本を掘れば刀槍鎧等出づと云ふ。山の麓に墓所あり。何か故ある如く思はる。今は山を穿ちて隧道となせり。静かに眠れる山や濱は、時々起る汽笛の音に目覺され、昔を顧み悲しむならん。

山の朝

第三學年 田中了範

今日も亦いゝ天氣らしい。日は未だ明け切らなないので周圍は薄暗い。爽な氣は静寂を破つてひた／＼と山から匍ひ下りて面を撫でる。刹那にポト／＼と露の落ちるのが聞える。霧は遠くの森や近くの木立を一面に蔽つて居る。總ての物は薄碧色に見ゆる。昨日の照りつけで灰の様にブカ／＼する氣味の悪い前の小道を七八間進んだ頃には、空はほの明るなつて浮世の物は皆夫々の色に歸つて來た。工場の汽笛が聞えた。村里の家々では最早朝餉の煙がゆら／＼と立ち上つて居る。町の方では自動車を通つて居るらしい警笛が聞える。蟬が一しきり鳴いた。田に出る人は希望に満ちて働かうとして居る。

夕立

第三學年 桂

入道雲が急に現はれた。もう白瀧山はぼうつと

明

して見えない。驟雨だ、驟雨だ。白い雨がやつて来た。子供は首をちぢめて走つて居る。向うの方には荷馬車に覆をかけて居る、大へん忙しそうだ。岩の間から蟹が這ひ出した。蛙がやかましく鳴き出した。しぶきがひどく雨戸をうつ。隣の婆さんは今やつと乾物を入れ終つた。今まで埃だらけの木や、草や、屋根が急に新しい色を見せ始めた。庭先の蓮の葉にあふれた水がこぼれて居る。太陽がかゝやき始めた。思はず空を見ればもうからりと晴れて居るが、所々に雲の切れ端が浮んで居る。裏山で蟬が鳴き始めた。

山の朝

第三學年 金田 範尾

嗚呼涼しい。僕は向ふの稲田から吹いて来る朝風に涼みながら、四方を取り巻く象の鼻の様な低い山々を眺めた。山、太陽人家と云ひ皆薄い朝霧のベールに包まれてはつきりせず、真向うの雑木林の方で我が物顔に聲高く鯛が鳴いてゐる。朝鳴く鯛の巧な音楽に一時耳を傾けて、鯛と云ふ名の満

足せぬを思ひ、益々其の音楽を興味を持つて迎へた。其のうち朝霧も次第に霽れて行く。太陽は次第に昇る。僕の影法師は次第に濃くなつて行く。空にたなびいた雲はする／＼と何處をさしてか滑り行き、いよ／＼あたりは金世界と化した。お、何と美しい日の出だ。僕はいきなり佇んで、海上の日の出に劣らない山の朝景色を眺めた。

我が郷里の傳説

第三學年 大藤 義人

我が郷里字田郷村地内に白砂青松の長濱がある。其の山手の方に、見るから由緒あるかと思はれる容姿秀でた高い山がある。神宮山といふ。其の山麓に古き祠がある。御山神社といふ。この祠には種々の傳説がある。當社の神靈は熊野權現の分身で、上古當山に飛靈し久しく宿り給ふたが、知る人がなかつた。或日九州の長者が、寶船を浮べ北海に赴く途中夜に入り、當山の沖に差しかゝるや順風忽ち止み方位を失つた。ふと東岸を見ると、一火を見て或る靈感に打たれた。やがてうとうと

お祭の日

第三學年 波多野 毅然

する内に、熊野神靈であることの神告があつた。長者は其の神告によつて、山麓に熊野の權現を建立したといふことである。

毎年舊十月の亥の日には盛大な祭があつて、近郷近在より、參詣者數千に及ぶ。亥子祭といふ。

おかつ川

第三學年 田原 正旗

我が家から西三町許りの所に雲龍庵と言ふ小さいお寺が有ります。其お寺の側におかつ川と言ふ池が有ります。今は昔、此處にわかつと言ふ親孝行娘が住んでゐました。家は貧乏で其上母親が病氣で「水をくれ、水をくれ。」と言つて苦しんでゐました。おかつは病人に飲ます様な良い水が無いので小さい女心をいためてゐました。所が或夜の事急に空から真黒な雲が下つて来て其雲の中から「此家の下を掘つたら良い水が出る。」と言ふ夢のお告げが有りました。それからと言ふものはそこに良い水が出初めて、今でも村の人々は其池をおかつ川と呼んで飲料水などに用ひてゐます。

「御母さん着物を出してよ。」との弟の聲に「お、今日は村のお祭だな。」と思ひ出した。小學校時代にはよく母に二十錢ぐらゐ貰うて喜んで行つたものだが、今になつては行く氣もしない。

何時も御菜の事で口言を言ふ弟も今日は晝飯もそこ／＼に食つた。「土産を頼むよ。」と云ふと、「うん、どつさり買つて来て上げる。」と云つて大きなハンカチを見せて出て行つた。

何だか浮かれた氣になつて門まで出て見ると、下の道を三四人六七人とかたまつて行く。

赤ヘシキ浴衣がたがひちがひに行く。

子供は前を早足で行く。歸る人もある。子供の持つて居る風船玉も、ひら／＼して嬉しさうだ。一人一人見るのに、しばらく時間の立つのをわすれた。

長門峽

第三學年 松岡 巖

温泉宿の裏二階には布圍や毛布等が取亂して干してある。昨夜の雨でしつとりとぬれた木の葉には鈍い朝日の光がキラキラと映じてゐる。清流の澄み切つた長門峽の下流の川邊に赤いたすきを懸けた宿屋の女中が良い聲で歌を唱ひながら米をこいでゐる。つぎはぎの縞と緋との短い着物を着、饅頭笠を被つて株を馬に背負はしてニコニコ顔で向うの林から出て来る。私の前を無難作に挨拶して通り過ぎた。私は茫然と川邊の石の上に立つて四方の晴れ行く空を眺めてゐた、街道を通る旅馬車の笛が此の静寂な朝を破つて幽かに聞える。あゝ———何といふ静けさだらう。山からは絶えず雷が立ち昇つてゐる。

山の朝

第三學年 高松 博

「ピー」と警笛に目を覺した僕は井戸側へ行つた。

赫灼たる八月の太陽は、銅色の面を照す。萬物を包擁する大地に立つて、互に犯すことなく、草を刈り、地を耕し、尊い勤勞の汗を流してゐる。彼等は農民だ。名も無い賤が男だ。大臣でもなければ大將でもない。然し彼等は貴い。一夫耕さずんば、一人の餓者を、一婦織らずんば一人の凍死者を天下に出さんとか。實際彼等の生活は、直接間接に食ふ爲の生活ではあるが、之が又社會を利し、國家に益してゐるのだから。然も多くの者が互に犯さずにやつてゐるのだから尙更貴い。如何なる職業でも、其によつて人に貴賤の別を立てるべきではない。否斷じてかゝる觀念は放棄すべきだ。之と反對に、自己の名譽心、野心の爲に、他人を犠牲にし、社會を汚す如き事あるものは、其者がどんな人でも、遠く此の農民に及ばないのである。私は總ての人を尊ぶ。只其人が他人を犯すことなく、勤勉でありさへすれば、さすれば少くとも幾分かは社會に貢獻する所があるから。實社會に於て最も憎むべきは怠惰である。又現世の成功は強ひて願ふべきものではない。強ひて成功せ

裏山から吹いて来る風が稻田の上を吹き渡る毎に「サー〜」と軽い音を耳に傳へる。仕事着の若い男が口笛を吹きながら向うの小路を上つて行く僕は顔を洗ふのを忘れて裏山へ登つた。雀の群が「バツ」と立つて向うの森へ入つて行つた。東の空からは丁度今出たばかりの太陽が「キラ〜」光つて隣の池に反射し目がくらむ様だ。田舎には偉人が多く出る。實際だ。これ渺茫とした天地で清浄な空氣を擅に吸ふからだ。……一學期振におなじみになつたこの山の頂上に立つて、こんな事を考へると、田舎に生れた自分は幸福者だと感慨特に深い。

「ミーン、ミーン」蟬の聲が何處からか聞え出した。太陽は段々高く登る。「ゴ〜、ゴ〜」段々と近寄る上り列車の響、「オーイ」早く来い、早く友を呼ぶ海行きの子供。「ヒョッ」と吾に歸つた僕は魚釣りの約束を思ひ出して、山を急いで下りた。

學窓より街頭を眺めて

第四學年 五島 直人

んどするから、無理が起り、矛盾が起るのだ。正當の手段で成功せんとするは善いけれども、強ひては願ふべきでない。他人を犯すことなく勤勉なれ。自己の所信に向つて忠實に進め。久遠の成功は之が秘訣だ。釋迦も孔子も此通りだつたらう。浮世の成功は運命に支配せらるゝ事もあるものだ。

農村の青年子女に寄す

—農本論—

第四學年 岩 武 照彦

古來生活の必需品を云ふ者、必ず衣食住の三者を擧ぐ。所謂「Food, clothing, and shelter」是なり。衣は纏ひて寒を凌ぐもの、食は執りて生活力を保持するもの、住は營みて風露の凌ぎとなすもの、何れ一つとして、缺くべからざるは論をまたす。然れども、審かに、沈思すれば、輕重自ら判然たるものあり。

抑も、我等生物が生活するには、第一義として生活力を有せざるべからざるは、論を待たざる所

假令アミーバ、バクテリアの微と雖、之を缺く事能はず。況や人間に於てたや。而してその生活力は何によりて得べきか、固より食物なり。然らば食物は何によりて作るべきか。工業か、然らず。商業か、然らず。唯農業のみ。即ち農業は、世界人類の生活力の原料を製造する業なり。工業商業は唯その枝葉に過ぎず。あゝ泰山よりも重き哉、農業の使命！

近來、文明開化となるに従ひ、大古ありし農業の外に、工業商業等の諸業簇出し、農民皆新なる職業に奔らんとす。殊に我が國に於ては、明治維新以來、世態一變、商工業隆盛に赴き、堅實なる農業漸く地を掃はんとす。古來、瑞穂國の美名もて自稱し來れる我が國の現状やかくの如し。あゝ歎かざるべけんや。

彼等の農村を去る理由に曰く、「農業は薄利なり」曰く、「農業は下品なり。」と。農業の薄利なるは、現在の農家は、科學的方位をその經營上に施さざるが爲なり。現今は科學の世界なり。科學の應用なくして、如何で好結果を得んや。

阿字雄の瀑

第四學年 渡邊良介

天保閱兵の地たる羽賀臺を下れば、我が村の本郷に著く。此處に阿字雄の瀑あり。亦一に弘誓寺の瀑と云ひ、阿字雄の瀑と相對す。此の瀧今は廢寺となれる弘誓寺の境内に在り。其の高さ凡そ三間餘、直下白練を懸くるが如く、奔流巖に激し、其の響萬雷の轟くが如く、大地も爲に震ふが如し。壯觀を極む。毛利氏此に觀瀑の催ありたる時、此寺に宿泊せられたる事ありといふ。瀑の下に大なる岩石あり。詩を題す。曰く、

日上林巒入畫圖

疊成素練掛崎嶇

請見石上題詩處

字々與流飛作球

これ東郊題詩の碑石なり。又此のあたり自然石に觀音を刻せるあり。弘法大師の作なりと。當時弘法大師松應山の岩窟に籠り、觀音を彫刻して瀑の麓に安置せられしなりと云ふ。後此の岩窟を奥の院と稱す。庭の池は雪舟の作りしものと傳へらる。世は刈菰と亂れ來て、文久三年七廷臣の一人とし

卿等よ、何すれぞ郷を出づる。卿等の胸中淳然たる風雲の志は、農業の大使命に比せば餘りに小なり。識者曰へらく「日本は工業國なり、商業にて立つべき國なり。」と。卿等迷ふ事忽れ、盲從する事なかれ。根幹全きを得て、如何で枝葉繁るを得んや。卿等が憧憬の都會、思慕の都會、あゝそは全く虚偽の都會、惰落の都會、奢侈の都會に過ぎず。卿等が青雲の志は、數年ならずして夢と消ね果て、惡風滔々、餘毒は神聖なる田園を汚濁せしむるに至るべし。清淨なる空氣と潤澤なる日光とに恵れたる田園は、我が大日本帝國の中堅なり。健康なる身体と銅色の皮膚とを有する農民は我が帝國のシンボルたり。

卿等よ、全國の耕地は今正に荒廢に歸せんとし惡風滔々、神聖なる田園を汚さんとす。農村の青年子女諸君、卿等幸に一片の國を思ふの赤誠あらば、乞ふ、農業の大使命を自覺し、田園に留つて其神聖を保たれん事を。

て長州に都落せし澤主人正宣嘉が、難を避けしも此の寺なり。當時澤卿よく馬にて八幡宮に遊ばれし事あり。八幡宮は其の昔十八郷の惣社たり。八幡宮と相對ひて今尙寺と覺しく三階家の著しく聳ね立てるを見る。これ弘誓寺の蹟にして、よく當時の寺風を存せりと。雨の朝、風の夕、響絶にせぬ瀑の音は、遠き三階家の其の昔を物語るが如く瀑と此の三階家とを併せ見る者、誰か俯仰回顧の情を禁せざらん。

耳無法一（下關の傳説）

第四學年 原田正人

處は平家の滅亡の地、赤間が關の東南部。昔其處に盲目法師の法一と言ふ琵琶の名人がゐました。或る夏の夜の事、法一の家の戸は開いた。「法一は居るか、殿には一曲召せとの事、早く參られよ。」と一人の武士が迎へに來た。法一は其の武士の後について行く事暫くにして「開門!!!開門!!!」と呼はる聲と共に、大きな戸は物凄く響をして開いた。やがて法一は奥に案内された。目には見ねど、

周囲の關係から推察して、分大きな廣間で、澤山の鎧武者が居る様な氣がした。やがて主人らしい人が多くの人に護られながら出た様子で、「法一大儀であつたぞ。」と聲がした。法一は、はつとしながら「一体何を致しましたか。」と問へば、「平家の未路を」と答へた。曲は時間の進むにつれて佳興に入り、いよ／＼最後の壇之浦の場面となる。今まで靜かに聞いてゐた人達は、すゝり泣きをし、終には聲を立て、泣き出した。彼は不思議でならなかつた。歸る時「お前がこの事を他言すると生命はないぞ。」と固く固く口止めた。その後も毎夜々々來ては連れて行き、いつもの「平家の未路」のみを奏せしめられた。そして法一はその頃からだん／＼体が瘦せて行く様な氣がした。そこでこの事を或る名僧に告げた。其の夜僧は法一を追けて行つて見た。その處は壇之浦の平家の墓地であつた。彼の周圍には鬼火が多きまようて、その中で一心に琵琶を弾じてゐた。法一は他言したので後の崇りを恐れて僧の所に行つた。僧は法一の體一ばいに「南無阿彌陀佛」と書いてやつた

然し僧は耳だけその大字を書く事を忘れてゐた。法一は今夜も使者を待つてゐると果して來た。そして「法一覺悟せよ。」と云ふかと思ふと、彼の兩耳を奪つて何處もなく立ち去つた。その後さういふものは誰が言ひ出したともなく、「耳無法一」と、云ひ出した。

學窓より街頭を眺めつゝ

第四學年 松浦藤三郎

實社會、それは前途洋々として、幾多の希望、抱負に満てる、吾等學徒にとりて、憧憬の的なり。誠に社會こそ、吾等が實力の表現、理想の完成、目的の到達を爲さしむる舞臺にして、畢竟、人類の活躍舞臺なれ。而してそこには、當然、生存競争なるものが、起らざるべからず。或は權勢の爲に、或は利害の爲に、或は榮達の爲に、或は名譽の爲に、あらゆる醜惡なる争闘が續けられ、亦、時として、突然の誘惑を受け、戰慄すべき強迫に脅され、狡猾なる詭謀に遭はんやも測り知られず。この險惡極りなき、社會の荒波へ、何等の障害も

なき、學生生活から投げ出さる。例へば春風徐に漣漪静けき内海より、朔風雄叫び、北海の怒濤逆まく外海に、小舟もて乗り切らんとするに似たり。然れども、この荒海も、只、努力忍耐を以て、乗り切るを得ん。

人生、尙、かくの如し。また努力忍耐を以てせば、人生の大海を渡るを得べし。努力忍耐は一つに各人の意志の力にあり。意志の鍛錬は學園に於て行ふべきなり。即ち、學園にありては、須らく智力体力の増進と相俟つて、意志の鍛錬に努むべし。智力体力意志の力に修養を積み、而して、學窓より、街頭を望まば、前途、始めて、燦然として輝くならん。

平和な生活

第四學年 三好謙介

我が家より數里離れた處に、一小部落がある。戸數は數十戸、四方には綠滴たる盛夏の山が、部落の平和を擁護してゐる。土着の人々は農業を本業とし、副業として養鶏、養蠶等を營んでゐる。

余は此に一夜を過したことがある。その一夜は常と違つてろく／＼にも眠むられなかつた。お負けに翌朝は馬鹿に早くから眼が覺めた。仕方がないから暑苦しい蚊帳から出て、何の氣もなしに縁にぼかんと坐つて、向ふを見てゐた。すると間もなく黎明の寂寞を破つて、一番鶏が鳴いた。それから鶏の聲が絶えなかつた。そして寂寥から喧噪へと移り行くのであつた。藁屋根の家の戸も段々開かれて行く。黒い頭がぼつ／＼畦道に見受けられて來る。東の空は大分白んで來た。折々涼しい風が肌に觸れる。田舎の夏の朝は、實にさつぱりしてゐる。こんな所に住めば、氷もいらぬだらう。こんな事を考へてゐる中に、田には澤山の人々が出て來た。彼等は營々と働いて、寸暇の休息を求めようともしない。田舎の人はあんなに忍耐力が強いのかしらん。太陽は何時の間にか山を離れて、彼等に慰藉の金線を放つてゐた。青天井の下、青疊の上で親子、夫婦打連れて、四圍に温かい雰圍氣を散らして、終日青い疊と睨み合ひをやつてゐる。余は田舎の新鮮な空氣が羨ましい。そ

れは都會で千金を以つて之を買はうとしても、求められるものでない。余は名残り惜しくも此の平和な生活に親んでゐる村を後にして、雑沓の巷へなよ／＼と歩いて行つた。

祖父の物語

第四學年 田 中 助 一

魂祭の時など、祖父の面白おかしく語り聞かされし話の多かる中に、常に憶ひ出さるゝ二小話あり。一は萩の亂、一は越ヶ濱大火の由來なり。曰く「俺は或る縁から前原一誠の先代様に御出入する様になり、度々話相手に、上野の屋敷へ魚を持つて行つたものだ。(祖父は記憶がよくて、話上手で、大變人々に好かれ、又此の地方の萬事にも精通してゐたさうである。)すると大層喜ばれて「さあ魚を料理してくれ、お前でなくちやお美味しくない。まあ上つて酒でも飲みながら話さうではないか。」といふ風に非常に可愛がられて、何かのよろこび事や、うれひ事等の時には、大抵招かれて、御馳走になつて歸つた。かういふ縁から、

其の子の一誠も魚釣り等に來られる時には折節立寄られた。

ところが明治九年の九月の或日の事であつた。突然一誠は須佐の方から兵隊を率ゐてやつて來られた。さうして士官達は、狭い家へ上られ、兵士は皆東の松原で休まれた。しばらくして將校達は軍服や、刀や、其他の物を遺して、萩へ行かれた。勿論俺もお供をしたが、中小畑まで行つて、歸つて來た。それは一誠様が天子様にむほんをせられたのぢや。其の間に萩の町には、あちこちに火の手が上り、大砲や鐵砲の音が聞え出し、町の騒ぎが手に取るやうに聞えたが、其の後亂が鎮まつて一誠以下の人々は皆捕へられ、主の人々は打首、其他の者は皆それぞれ罰せられたが、此の時俺もかゝり合にならねばよいがと、大變心配してゐたが、十日経つても、廿日経つても何の音沙汰もなく、たう／＼何事も無くて始めて安心した。又先代様も捕手が行つた時切腹せられたといふ事じやが、實に惜しい事をしたものぢや。其の後大分してから、或日お屋敷へ遺物の服や刀を持つて行つ

たら、其れを見て皆泣かれた。其の後は前原家へ行つた事はないが、一誠は實に惜しい人ぢやつたと言ひて嘆息せり。

今一つの話は「丁度明治九年の舊三月朔日の事であつた。あの日は大變強い東風で、空はどんより曇つて、なんとも言はれない陰氣な日であつた。大抵の家は節句餅を搗ぐのに忙しかつた。丁度晝前時分、松本の唐人山に火事が起り、ひどい風に吹きまくられて、益々大きくなり、火の粉が雨の様になり飛んで來て、乾き切つた藁屋根に注いだからたまらない。忽ち三四箇所に火事が起り、人々は皆搗掛の餅をほうたらかして、火を消しに行くやら、道具を運ぶやらで、右往左往してゐる。其中を子供等は泣く泣く馳つてゐた。我家でも搗ぐのを止めて、後の濱(嫁泣の海岸)に家財を運び出したが、火が益々強くなつて、たうたう出たあつた道具にまで移つた。焼けなかつたのは海に流れた箆笥だけであつたが、おまけに出してあつた搗きたての餅は、何時の間にか人が取つて了うたので食ふ物がなかつた。唯一つ何より残念に思ふ

のは系圖が焼けた事だ。其の間に火は遂に何もかも皆焼き盡して、夕方になつて、明神池の邊まで行つて消えて了うた。百數十軒といふ家が焼けて残つた家は數へる程しか無い。焼け出された何百といふ人々は、焼跡に行つた灰をかき混ぜて、目星しい物を捜してゐるが、皆焼けて一つも見當らない。着るには着物がなく、食ふには食物が無くさうして住む所の家を焼かれた人々の、悲しんでゐるのは非常に氣の毒であつた。又前の濱(夕和灣)から後の濱(嫁泣灣)が始めて見通される様になつた。人の話では沖の櫃島まで飛火したさうぢや。そこで人々は皆精出して働いたから、ちぎに前の家よりもすつとよい家を建てる事が出來、又焼け残つた人々よりも一層よい身代になつた。それだから人は、たごごんな、つらい事に出遭ても、一生懸命働いたら、皆偉い者になれるのぢや……わかつたか?……それぢやあ又面白い話でもしてやらう。」といふ事なり。之等の話の憶ひ出さる度に、あの短軀、童顔、慈愛に満てる細き眼の祖父の面影の、草場陰より我を注視するかの

如く、轉た追憶の念に堪へず。

戦争と國民

第四學年 三 島 將

識者は各々の見地に立ちて、既往の戦争の原因を研究、説明してゐるが、將來も亦之を避けることの出来ない云ふ點は、一致してゐる。

而して、現今の戦争とを、總合比較して見るに、其の形式は勿論、原因を異にしてゐる。昔は英雄豪傑が、覇を立てんごし、遠征を試み、又帝王が單なる野望に驅られ、侵略を企てたりするに過ぎなかつた。爲に、その初期に當つては、國內の老幼男女、悉く驅使せられたが、漸次組織的の武力、即、軍隊が出来上つた。故に結局、往昔の軍隊は覇者の戦具に過ぎなかつた。

然るに、現時の戦争は、全然性質を異にし、表面ながらも平和を望み、同権を抛たずんば平和を望むべからざる、眞に危急存亡の秋に見るのである。従つて、往昔の如く、軍隊のみが戦争に關係するとは全く趣を異にしてゐる。

故に、吾々日本人は、平時、戦時に最も必要な要素を、先天的に享有してゐると言ひ得る。舉國一致とは何か、自己の利益、生命を犠牲にして、君國の目的に、努力する事であつて、武士道、日本魂と稱するのが是である。

稍もすれば、國民性に龜裂を生せんとする今日敗戦の悲惨を、味つたことのない吾々は、戦争については將來、猶、一考を要する問題であると思ふ。

偶感

第五學年 板垣禮作

凡そ人類が團體生活をなしてゐる以上、自治的精神の必要なる事は今更言ふ迄もない事である。況んや、將來國家を擔ふて立つべき有爲の青年を教育する學校團體に於ては、猶更その必要を痛切に感するのである。恰も、煉瓦、鐵筋コンクリートの建物が強固なる基礎を要すると同様に、眞に學校團體も、依頼心を脱却した強い自治精神の上にて建てられてこそ確立するものである。若しも然

故に、將來、有事の曉に、我が國威を發揚せんと欲せば、先ず平素から豊富なる富力を蓄積して置かねばならぬ。従つて、殖産工業を發達せしめ食糧も、自給自足し、對外貿易は、自國の船舶を以てする様、造船、海運業を發達せしむること國家に一日も缺くべからざる問題である。

かゝる問題を、理想の如く、實現するのは人がするのである。故に、吾人目下の急務は、その人を作るにあると言へる。

然らば、如何なる人間を要求するか。他なし、愛國心に燃ゆ、向上心旺に、思想鞏固にして、秩序を好み、服従心に富める國民である。而して、是等の性格を完備せん爲には、身体の強健と精神の修養を要す。國民精神の陶冶、筋骨の鍛鍊、及武技の修習は、片時も缺くべきでない。惟ふに、我國體は、金匱無缺、忠孝一致、加ふるに民族が統一してゐるにより、平時、戦時、共に舉國一致して國事に盡瘁する事が出来る。この一致の力の必要な事は、近く、歐洲大戰によつても立證されてゐる。

らざる時は、所謂砂上の樓閣に等しい喩に漏れぬ事になる。斯く自治精神の存在する處には、亦必然の結果として協同的精神の存在を認めざるを得ぬのである。各自が己を正しくしきへすれば、學校は立派に行くものであると考へてゐる者も多々有るに違ひない。然し世の中には善人許り居るものとは限らない。却つて善人よりも悪人の方がその數に於て多數を占めてゐる。これが一方には現今の状態とも云ひ得られる。だから、今後の人間は己のみを正しくして優然、満足して居るべきでない。己を正しくすると同時に、進んで他人をも正しくしなければ到底團體の成績は擧げられぬ。世間には往々他人の非行を正す者有る時に、何等此の人に援助せぬ者が有る。昔から、「惡は榮ゆ」とて、一人や二人の力では仲々匡正し兼ねるものがある。之等はさうしても多數の力で正しくしなければその効果、到つて少い。否却つて悪き者跋扈して、その爲正しき者の苦められる例も少くない。協同の力の偉大さを表した面白い西洋の寓話がある。「或時盲人が誤つて深いぬかるみの中へ落

ちて、何れの方向に上つて善いか全く見當が附かず非常に當惑してゐた。その時丁度跛が通り掛つたが、勿論自分の身體さへ辛うじて引き歩く身の上、此の盲人を助け上ぐべき力の有らう筈がなかつた。所が彼等は相談の上、遂に跛が盲人の背に負はれ、背の上で方面を指圖し、盲人は其方向に歩いて遂に助け出す事が出来たと云ふ事である。斯様に各自の立場は異つてゐても、正しいことのために相互が協同一致して、其目的を達する事が出来る。況して其目的を一にした學生生徒に於ては、猶更容易な事である。

責任觀念の養成も亦校紀振興上大いに與つて力がある。各自が自己の職務に忠實にして始めて、其本分を全うする事が出来る。學生には學生としての職務がある。其定つた職務を等閑に附した者の集りに果して秩序有り、紀律有るか。彼等は全く烏合の衆に外ならない。所謂群衆心理を頼んで徒らに物事に熱し易く、動じ易く、且つ醒め易い徒に過ぎない。近頃學生の同盟休校が甚だ頻繁になる傾向がある。日日の新聞紙を見ても毎日の様

に記事が出てゐる。而して其多くは、云はゞ生徒の自制心の缺陷に因するものが其大部分を占めてゐる。一般に、同盟休校なるものは生徒側に於ける自尊心の缺乏に因つて起るものと見做す事が出来る。大體に於て現在の世の中といふものが、逃げられるだけ逃げようといふ有様になつてゐる。之れ等は皆義務觀念の没却に由つて起る弊風である。随つて又自己の權利をも敢て主張しない。自尊心の乏しき事、實に驚愕の至りである。要するに、各自一人一人が自己の力の偉大なる事を知らずしては、到底學校といふ一健康體を組織することは不可能なことである。

勉 強

第五學年 赤 木 弘

學生風紀の亂れた事は正し、正しき事は益向上させて行くのが、我々上級生の義務である。私は思ふ。然らば其の振興策如何と云ふに、私は第一に「勉強せよ」と云ふことを擧げる。そして第二にも第三にも同様である。

學生の本分は學ぶ事である。學んで智識を博めんとせば、則ち勉強する事は勿論である。故に學校に來りて勉強せざる者は、通學の根本精神を没却して居る者である。且つ勉強に心を專一にせぬ故に、他の様々なことを考へ出して爲すべからざることも遂に行ふ様になる。是が事件を惹起する根本原因であると思ふ。然して勉強せざる者は、他の良くない即ち學校の禁することを敢て爲し、之を以て自己の快樂と爲すが故に、勤勉に依つて得る眞の快樂愉快を悟り得ない哀れな者である。

以上の事を考へて私は學生たるものは、適度の運動も娛樂も必要ながら、それに没頭せず勉強に没頭せよと奨める。然る時は各人の心は眞面目となり、緊張して來る。各々が緊張すれば、學校全体が緊張するのは言を俟たない。然して自己の本分は完全に遂行され、眞の快樂も味ひ得る。之私が一にも二にも勉強を奨める所以である。

人或は私の言を以て陳腐とすかも知れない。然し如何に陳腐と云ふも、人間それ自身が已に陳腐である。人間は昨日や今日此の世に發生したる

新奇な動物ではない。されば人間の道、學生の道も自ら古くあるべき筈である。此を陳腐と云へばそれでも良いが、要は唯之を遂行するにあるのみである。勿論私は全力を盡してやる積りである。最後に特に最上級生たる我々は「我と同じ主義にて誰が行動するとも差支へ無しと確信し得る行為」を爲すべきである。それには學年の始めの自治會に於ける組長先生の訓話を思ひ起し、修身書第一課をも併せ見るべきである。

長門峽を觀て

第五學年 山 根 芳 朗

萩町を帶の如く巡りて、四季の装麗はしき面影山を浮べて、日本海に注ぐ清き阿武川の源こそあめつちのなしの儘に生れ出でたる天下の絶勝我が長門峽の神地なれ。

春は櫻の落英、秋は紅葉の錦繡を浮べて、右に曲り、左に折れ、淀みては淵となり、走りては瀧となる水の姿態の面白さ。仰ぎては、萬俣の青壁切籠切窓を觀、俯しては、千丈の碧潭、千瀑洞口

龍宮ヶ淵を臨む。雄大豪壯何者か之に比せん。若し人をして、この靈地に到らしめんか。心も身も生れ出でたる儘の赤裸々にかへり、我慾を捨て、鄙吝を洗ひて、崇高なる大自然に至るべく、鯢鯢たる塵世の穢を忘れ、自ら廣濶なる氣宇頑丈なる體軀を作り得べし。

殊に彼の水の奇岩と戦ひて、雪と散り、玉と碎けて、奔流する、男性的氣象を帯びたることは、吾人取つて以て、修養の資となすべからずや。吾々青年の高く、且つ、立派なる理想を追求せんと欲する者は、須らく屢此の靈地を踏破して、其の靈感に觸れ以て、心身の修養をなすべきなり。

夏休中日記の一節

第五學年 田北 亨

七月廿三日。麥稈帽子を戴き、制服を着、手拭と櫻のステッキとを持つて家を出た。時に午前五時二十分。

朝早く歩くのは大變氣持がよい。街を通る時は薄暗かつたが、越ヶ濱邊へ來ると笠山がはつきり

仙崎灣の海岸に打寄する日本海の怒濤を遮るが如くに踞れる島、之れ即ち天下の奇勝として其名も高き青海島なり。奇巖怪礁の力強き連鎖もて周圍七里を圍めり。

もし海一度荒れ始めんか、山の如き怒濤は湧きたざり吠々狂ひ島も最期かと疑はれ、恐ろしくも豪壯なる姿を見せん。之れ實に冬の青海島を飾る一大壯觀なり。此の奇觀を眺望せんと欲する者は、波強き此の際にて舟の便なければ陸路にて静ヶ浦に出づるを可とす。此處には六七十尺の絶壁直立し、或は大なる動物の正座せるが如き怪岩、蹲踞せるが如き奇石何十となく海中に頭を浮べ居るなり。荒れ狂ふ怒濤彼の巨頭目掛けては千々に碎け碎粉白玉と變じ、白玉更に白雲と化し、青天俄かに曇りて將に何物か降らんとせる空模様大雨なるか、はた大雪なるか。狂濤人居らば呑み込まんと、音轟々と凄しく打上ぐる様之れ將に何瀧ぞ白皚々美觀壯觀名狀すべからず。然れ共波靜なる夏の海は島の周圍を小波千鳥と戯るゝ事常なり。小舟にて島巡りの途に就かんか。油を流したるが

表れだした。これからは一本道だ。右は重疊とした山、左は渺茫たる大洋、其の中に挟れて、白い道がくの字なりに長く長く續いてゐる。波が岩石に當つて、飛沫が衣服にかゝり、雨かど空を仰がせる。時々、前方から、貨物自動車が疾走して來て、埃を浴びせかけて過ぎる。紫福村に入つた。最早四里位歩いたらう。ラムネを飲んで元氣をつけた。左は鬱蒼たる深山、右は千仞の絶壁、中央を潺々として細流が流れてゐる。氣味の悪い程青い深淵がある。道は段々險しくなる。汗が眼に入る。帽子を脱いで拭へば、涼風がサツと顔を撫でる。遙かに音がするので、近づいて見れば瀧だ。洋服を脱ぎ、水で身體を拭つた。又も風が通り過ぎる。

風一陣虹ゆるがせつ瀧飛沫
疲勞も忘れて、ストライドを廣め、ピッチを早めて、目的の山莊へと急いだ。

郷里の誇り

第五學年 伊藤 七郎

如き水面を遠くは黒煙濛々と吐き出す巨船或は眞白き眞帆片帆の迂り行くを望み、近くは一面に並びたる釣舟先づ遊覽客の視覺を刺戟すべし。何時しか舟は天下の奇勝地に入りつゝあるなり。此の時唯眼に入るは舟前に直立せる幾十丈の絶壁、龍岩虎石相闘ひ、戰雲愈急にして遊覽者をして手に冷汗を握らしむるあり。巨岩相對し互に語るが如きあり。烏帽子の壯岩、紫津ヶ浦の奇岩を稱へつゝ、更に舟を進むれば、遙向ふに見ゆる小半島、之を源平二氏の戦に脆くも破れし平家の殘黨此處に落ち行き、自刃の流血岩上に漂ひ、激浪屍を呑み光景轉た凄烈を極めたりと聞く所なり。此の如き史的逸話を物語る此の島を、吾人は平家島と號せり。時に頭上綠樹の間を山猿の嬉々として戯るゝを見るも一興ならん。炎熱焦す夏の太陽は早西海に没せんとす。乾坤悉く黄金色に輝ける日本海の日没を眺め、悠久なる大自然の魅力におのゝくも、亦忘れ難き旅の思ひ出ともならん。かくも男性的にして天然の美觀壯觀なる青海島こそ我が郷里の誇なれ。

郷里の偉人

第五學年 岩本孝雄

余は郷里須佐の偉人として躊躇なく逝きし仁保久昂翁を擧げん。

翁は幼にして父を失ひよく母の慈訓を守り、刻苦精勵し只管他日の大成を期せり。明治五年の秋某縣出仕を命ぜらる、翁の登龍門の起程此にあり。後五年にして判事補に任ぜらる、其の速かなる榮進に郷人は驚きたり。後十三年にして判事となりて熊本地方裁判所部長に轉じ、後那覇地方裁判所判事となり、尋いで大審院判事に補せられ、從四位に陞り勅任二等となる。其の榮や又大なり。年古稀になんなんとす、依つて職を退き郷に歸へり樂しく余生を送れり、然りと雖も徒に飽食暖衣を貪らず。歌會常盤會を設けて、國粹保存を企て、民風の作興を促し、後進の指導に務むるを無二の樂とし吟詠する所多し。又寶生流の謠曲を學びて、造詣淺からず。邸内に數畝の園圃を設け、自ら耕作して運動勤

儉の範を示せり。晴耕雨讀實に古賢者の遺風あり

大正六年兩陛下の聖影を下賜せらるゝや、感激して措かず、恭しく邸内に奉安し、朝夕禮拜懈らず。又翁は常に郷里の教育に意を注がれ、沖繩に在職の時、地方の貝類標本、風景畫數百種を郷里の小學校に寄附せられたり。

母の世に在す時は靜閑なる一室を設け、定省温涼至らざる所なし。談偶先考の事に及べば襟を正して先考の志を明にせんと務めらる。其の孝心の篤きには聞く者嘆賞せざるなし。大正十二年逝く年七十余才なりき。

夏休み中日記の一節

第五學年 池上武夫

机に凭れて餘念なく讀書して居ると、急に机上の紙がバツと飛んだ。ハツと氣が付いた。風が立つたのだ。何時の間にかやら室内はドス暗くなつてゐる。これはと驚いて空を仰げば、空は早隈なく無情な雨雲で蔽はれてゐる。あはて、北の窓へ走つて行つて首を出した。やつぱり青空は見えない

益々不安になつた。

それから二時間もぶつつかけて降りしきつた。

十一時頃少し小降りになつた。

今日も水泳の練習に行くのだ。萩中水泳選手に雨くらい何だ。軽い晝食をすまして元氣よく菊ヶ濱へ自轉車をこぼした。未だ選手は一人も來てゐない。

雨はようしやなく降る。しばらくの間に選手は皆集つた。風をも雨をもものは、我が校名譽のために何時もと變りなく猛烈な練習を始めた。

日一日とだん／＼縮まつて行く各々のタイムに選手の意氣はいやが上にもあがる。

二時間もたゝぬうちに、豫定の練習はしてしまつた。毎日毎日來て心配してくれぬF君。今日も來て一心に世話をしてくれぬ。

選手一同大いに力強く思つてゐたのに、別れなくてはならないことになつた。「僕は近日から東京へ勉強に行かなければならない。試合までには益々努力して自信をつけて勝つてくれ給へ。」とそれが練習後の彼の言葉だつた。

一同は「今年こそは」と誓つた。

友の非行を戒む

第五學年 鈴木玄二

前畧仄に承り候へば、貴兄近來の御行爲うたゝ痛心に堪へぬものこれ有り候由、始め此の事を聞きたる時は容易に信せられず候ひしが、屢耳にするにつれ次第に貴兄の行爲に疑念を抱くに至り候。

固より事實の無根ならんことを希ふもいかにせん火の無き所に煙の生せざる理を考ふれば心細き感致し候。

申す迄もなく青年は人生の春ともいふべき時期にて、此の期を逸して修養を怠る時は、一生成功の曙光を見ること能はざるべしと存じ候。

然るに現今の學生のある者は、未來の空想にのみ耽り大行は細瑾を顧みずとか、大器晩成とか或は古の英雄の例を取り、如何なる人も一旦風雲の變に乗すれば、何事をも成し得べしなど思ふ者も有之候へども、此等は皮相を見たるに止るものに

して、深く真相を考へざる言に候。

かつ世は文明に進むに従ひ、社會の秩序整然として、古の英雄其の他傳記的成功などは夢にも出來ざる時勢に御座候。

平素思慮深き貴兄の事に候へば此の事篤と御考への上速に過失を改めらるゝと同時に學問に勉勵されんことを切に御願ひ申し上げ候。

願みれば貴兄と小生とは同學年にして後數ヶ月にして目出度中學卒業の榮を戴かんとする身なるに、今更斯る事これ有り候ては、御兩親様の御心勞いかばかりならん。

倚閣の望空しくしておはせむ時は不孝の罪これより大なるはなかるべしと存じ候。

友情歎し難く失禮をも願みず申し上げ候次第、ただ小生の微意ある所を諒とせられ、一日も早く御改心ありて、日頃の君に立ちかへらるゝ様希望に堪へず候。多罪多罪。

我が希望

第五學年 森 福 悟 一

砂塵を卷きて疾走する車中の人たらん事を欲せず。又榮譽を負ひて衆人の羨望の的たらん事も欲せず。我は顔に名利を避けて塵世を餘所に風雅に遁るゝ生活をも欲せず。

精神的には人格を向上せしめて、社會の安寧を圖り、物質的には勤儉産を治めて國家の富強を計らんことを。是れ帝國現代の要求にして我の希望する所なり。見よ、揚々濶歩する紳士といふ者を、彼等は表面的の満足を得るに汲々として何等國家の要求に報ゆる所なく、勤儉デーの聲は津々浦々に到る迄響き渡るも、只名のみにして之が實行を爲す者果して幾人かある。

輸入超過、食料問題は依然として解決を見ず。此の時に面したる青年は、一刻も早く要求に報ゆる爲め、國家の一員としての義務を果すべく猛進せざるべからず。そは日頃修養鍛練したる身心を捧げ、質實義勇を旨として自己の体力のつゝかん限り、所謂斃而後己て最善を標語として、海外に雄飛するにあり。

海上遙か彼方に日の御旗が翻騰と光り輝く曉、

おゝ其の時吾等の血は高鳴るならん。

田園生活

第五學年 山 本 博

紅塵萬丈の都會より、一步外へ出て天地の開展する田園に來て見よ。都會の色彩と大に異なつた色彩の漂うて居るのを感じるであらう。

農夫達は宏大な田園の中に住居を構へ、何等心配することなく、氣樂に此の世を過して居るのである。春になれば冬籠より目覺め、十分精力を回復した後、胡蝶の戯れる蓮華草畑を耕したりしていよいよ種を蒔く、夏には彼の炎天の下で額に汗を流して田の草取をなし、晝間は木陰を選んで一時の眠を樂む。かくして終日鋤を手にして働く。夕は縁側にて蚊遣火を燻べ世談に耽つて居る。

さて心地よき秋に至れば、見渡す限り田の面は黄金の波と化し、收穫の時期となるのである。

其の間歌や詩或は繪畫の題材となつて、世の人々に深く深く印象付けるのである。單に此ればかりでなく、農村は言ふまでもなく食糧の生産地である。

あつて、之を消費するのは都會である。農村無くんば都會は先づ其の糧道を絶たれる譯である。

以上の如く都會と農村とは其の他色々、密接な關係を持つて居るに拘はらず、農村の骨子たる青年が、田園生活を嫌ふのは何故であらうか。

此の點に於て農村問題はまた十分研究の餘地があることと思ふ。

吾人は須らく大に田園生活の趣味を養生すべきである。



卒業生通信

エール大學より

同校 吉田 寛

拜啓

長らく御無沙汰致しましたが、其後先生には御變りはありませんか。御伺ひ申し上げます。人一倍に長かつた私の學生々活も、今度終了しました。エール大學では、笑止ながらマスター、オブ、アーツを貰ひました。此から愈々世に立つ事になりました。たぶん來月中旬までには何とか任命があるかと存じますが、目下の形勢ではワシントン大使館では非ひきとめる様計畫してゐるようでありませぬ。私一個の希望としてはもう歸りたくてたまらぬ程であります。今年はどうも歸朝が危ぶま

しただらうと思ひます、でもまたヤンキータイプの Sample までには行かぬと信じてゐます。

目下私はニューヨーク、ハドソン河畔に一室をかりて、亂讀に時をすごしてをります。來週よりは北上してウイリアムスタウンの有名な Institute of Politics の例會に出席する事にしてをります。來月中にはどにかく何とか任命がある筈であります。歸朝命令はほゞ望みなしとあきらめてをります。比較的 Colorful だつた學生々活を愈々終るのだと思ふと何となく不安を感じすら致します。御無音のた詫びを兼ねまして、近況を知らせ致します。時節柄とくに益々御健勝のうよお祈り致します。

七月十七日

岩田先生 玉案下

寛

敬具

海軍兵學校より

同校 藤田小太郎

澎湃寄する海原の
常盤の松の翠濃き

大波砕け散るまこゝろ
秀麗の國秋津州

ます。

支那問題、日本財界の變動及新内閣の成立等色々々の極東問題を米國新聞のみを通じて三年間も見てゐると、次第に興味が減じ様子もぼんやりしてまゐります。日本の政變も米國大統領改選程の面白味なく、日本の對支政策より、米國の對メキシコ、對ニカラガ政策の方が自然私の注意を強く引くようになりました。もう一まづ歸つて出なほす必要なるものがあるように感じます。

在米三年何一つまどまつた研究もせず語學も大して進んだと思ひませんが、今から回顧して見ると全然空費したとも考へません。甚だ漠然とした感じではありますが、何か新しい point of view をかち得た氣がいたします。殊に渡米以來、政治法律と云ふより歴史、文學、宗教等の通俗的方面に出来るだけ注意を拂ひましたので、日本を飛び出した時の私に比べて今は比較的に理窟ぬきな、常識的な人間になつたやうな氣がします。いゝ事にして悪い事にして、米國二年の生活、ことに自由な大學生活は必ずや私の性格上に大きな跡をのこ

これは或る日曜日の夕食後はの暗き運動場に於ける三百數十名の生徒が圓陣を作り天地も摧げよとばかりなる軍歌、勇ましい内にも團體生活の樂しさ我等獨特の趣味もあります。兵學校生活は實に忙しい烈しい苦しい全く厭だ、これも或る見方でせう。兵學校は天下の樂園であり此處に學ぶ者は眞の幸福者である、これも又本當に詐らざる告白であります。江田島は都會離れのした淋しいつまらぬ所だ、刺激もなければ誘惑もない、これも一面よりすれば正しい批判です。後には縁も深き古鷹山前は波靜かな瀬戸内海に臨み風光明媚な一孤島に巍然と聳ゆる大厦高樓こそ、將來日本海軍を背負ふて立たんと日夜孜孜として努力する同志三百が住家であり身を修むる靈場でもある。五時十五分に起きてから九時半の就寢迄或は講堂に書を繙いて天文航法や魚雷發射四十糧巨砲の操法を研究し或は重砲台の戰闘教練校庭の銃隊教練又は柔道劍道等すべて身心共に續く限り頑張るのが我等の誇りであり傳統的精神である。怒濤逆巻く大洋の眞唯中で縦横に軍艦を乗り廻し皇國の興廢

を一舉に決する變を思へば、一瞬時たりとも怠慢心は姿を表はさぬはずだ。軍人と云ふ者は或る任務遂行の爲めには斃れても尙止んではならぬ時があるから。

君に忠を盡し國を愛する道は多種多端だ。而し己れを捨て、何時でも海の藻屑となり甘んじて民族の犠牲とならう、海を我が一生の活動の舞臺としやうと思はれる方には僕は本校を奨める。だが何んでもよいから是非入學し給へとは決して云はぬ積りである。海上生活は勿論苦しい。殊に戦闘を目的とする軍艦生活は論外である。太平洋の闇の中を三十節の高速で突切る時は壯美の極ださうだが、而し男の意氣が何處迄續くか、其の體力が何處迄耐へ得らるゝかを試すのも又男子としての痛快事だと僕は信ずる。

入學試験があります。要は膽玉にあり、唯度胸が坐つて居れば恐るゝに足らずと思ひます。世の人の意見に逆はず自己の正しと信ずる道を一途に進み行くこれが僕の過去に取つた方法でした。己れに頼るだけの自信がなければ到底駄目だと申

して置きませう。今は僕一人です。來年の御奮闘を祈り擲筆します。

五高より

同校 松井利明

森の都——平穩と思案を人々に思はせる熊本市の一隅に、赤煉瓦造りの堂々たる建物がある。そこには偉大なる影をひそめた沈黙があり、眞理の探究があり、又悠々たる男性の雄叫びがある。それは僕達の五高なのだ。

五高には今二つの潮流が流れてゐる。それが時に衝突しながらも又並流し、現在の龍南生命を形成してゐるのである。その一つは十九世紀的情熱に憧憬れ、世の波の不可侵なる一別天地に籠城することを無上の光榮とする輩即ち剛毅朴訥組である。

根強き傳統に培はれたこの風潮は確に龍南の半面である。龍南の空氣を吸ふ者は寮生活からして等しくこの雰圍氣のものとなり、ストーム、武夫原ダグヌ、長髪、木劍、弊衣破帽と初めの内はか

ぶれるのだが地に入ればその行動が總て自然で無條件に痛快な奴と云はざるを得なくなる。然しながら時代は決して別天地に籠城することを許さない。加ふるに青年の反省期がある。こゝにも一つの潮流が流動し始める。これは即ち廿世紀的自由平等、開放を主張する輩である。五高に代議制を敷かんとするのが先づ彼等の生命だ。彼等は何事によらず眞面目に研究する。前者が腹で行かうとすれば、後者は頭で行く。一方が腹が出来ねばと云へば、他方は考へねばと云ふ。今の五高をかく内部的に見て來たのだが兎に角高等學校生活は文字通り人生の華だから、花ならば花で酒呑みの御機嫌取りの花にならない様に、這入る前から氣をつけておくことだ。

それからも一つ、這入る前から氣を付けておかねばならぬ事は、科、類の撰擇だ。何でもいゝ高等學校へと無暗みには入つた後で悔を残す事が屢々ある。文科、理科、甲類、乙類はその人の生涯の生活を規定するものだから自己の個性、又は周圍の事情をよくと考察して撰擇して欲しい。

僕達は諸君を期待してゐる。眞面目なる意氣と力に燃ゆる諸君を期待してゐる。來年の四月、阿蘇山頂に於て、「武夫原頭に草燃へて……」、又「四方に薫りは敷島の……」を聲高らかに大自然に向つて咆哮するの友を僕達は期待してゐる。大いにやつて呉れ給へ。

長崎高商より

同校 多田利雄

中秋の候運動に勉學に將行樂に最適のシーズンです。明春舉行の入學試験の準備に諸兄の夜の燈は必ずやノートを参考書に照らしてゐる事と御察しします。又或る人は受験年鑑と首つ引きで、可成受験者少く採用數の多き、即ち競争者のパーセントの少い學校を朱線で彩つて、その取捨撰擇に思惑ふ方もあらん。丁度小生等がそれでした様に。

私は長崎高商紹介旁々私の考への一班を述べて若し諸兄の勉學の一助になれば幸甚と思ひます。長崎は餘りに西陲の地なるが爲か吾が校の存在は

山口縣人に餘り知られて居ないのを憾む。屈指の貿易港たるのみならず、鎖國時代の唯一の開港場として幾多の貢獻をなし洋學醫學の發祥地たるは周知の事である。高商は市の北隅に位し西山と片淵町に跨つて居る。全校舗石を敷きつめ校舎の清楚なる樹木の美しき其他氣持の良きは其の靜寂なる點と相俟つて學校の特徴である。西山一帯は學校地で前面は小川一つ隔て、縣立市立兩高女並び教練の苦しさもピアノ鍵盤の響きとソプラノの交錯で充分忘れさせ新しい元氣を出させるに與つて力がある。長崎の町そのものが異國情緒の漂ふ町だけに、慣例にしる儀式にしる凡てが昔の儘である。是は十月の諏訪の大祭と七月の盆祭に現はれ全國無比の觀物である。人情醇和、平和な町、歴史的地理的資料に恵まれてゐる事等は吾等に勉學の機會を與へる事大なりと信ず。外國通の木村校長支那問題の大家田崎博士及び經濟學史に精通の武藤教授を有し其他各教授の熱心なる研究と講義は學生の努力と相俟つて常に良成績を擧げてゐる現在は厚東重雄君と私の二名のみ、萩中を背景と

し校歌を標語として小さいながら努力奮闘してゐる次第で、諸兄の御來校は双手を擧げて御迎へ致します。

諸兄中進學の意ある人の探るべき先決問題は、身體、金力、身分を考へて目的校を決める事である次にこの學校に入學するを以て一の成功なりとの信念のもとに理窟は抜きにして頑張つて貰ひ度い努力して貰ひ度い、そして入學の榮を勝ち得て貰ひ度い。その計畫、方法等は諸兄が或ひは雜誌に依り或ひは先輩より學んで居られる事と思ふので此處では贅言を省きます。

紙數に制限ある爲述へ度い事の十分の一も書かれないのを遺憾とする。長崎の事情、學校の試験問題の傾向等は學校内小生宛に御問合せ下さるれば出來得る限りの御便宜を圖り御答へ致します。畢りに當り諸先生の御健康と諸兄の奮闘を祈りつゝ、擧筆します。

京城高商

同校 田北 泰

清澄の秋愈深く、ランプの下親しむべき季節となりました。諸兄には益々御丈夫で御勉強のことと思ひます。いづこよりかする、すゝり泣くやうな、砧の哀響。拙筆を顧みるいとまもあらず、ペンは走つた次第です。

李朝五百有餘年の都城、京城は今や半島における政治經濟の中心地として、新興の意氣に燃ゆる極度の緊張振を見せてゐます。この東北の一端、崇二ヶ丘に屹立する赤煉瓦こそ我ら二百數十名の學園なのです。歴史と言ふ底のものはなく、創立後日尙淺く、校内の設備等不完の點あるは、止むを得ません。が、教授生徒の涙ぐましさまでの一致努力は、報いられつゝあるのです。何せよ、廣袤漠々の滿鮮をバックに控へ、これが商業開發を使命とし、この所唯一の高商を以て任じて居るだけそれ丈、東洋經濟その他の諸課目に於て、各獨特の能力を發揮してゐることは、世人の齊しく認められてゐる所です。で卒業後の發展振は、今更私の贅言を要せない所と信じます。

新舊兩極端の奇妙なコントラストを、にくい程

巧にはつきり描寫してゐる京城。それは、私を詩人にさへしたのです。その雰圍氣中で、しかもアカシヤに擁せらるゝ我崇陵の三ヶ年は、諸兄に許多のロマンスを提供せずには措かないでせう。

諸兄のご志望を待つてゐます。詳細は、個人として腹藏なく、御問合せ下さい、喜んで受けます。尚、現在萩中出身四名在學してゐます。又學校以外で活躍してゐられる方は、多數あることを附加して置きます。では、折角御自愛の程を遙に祈ります。

大正大學より

同校 中山 眞哲

燈下親む時懐しい諸君には遠大なる抱負を持つて御精進の事と拜察して居ます。

吾が大正大學は佛敎を研究して、信仰に、社會事業に、教育に、人格の陶冶に、國家思想の涵養に貢獻し、以て理想社會を建設すべく、昨春、在來の宗教大學、天台宗大學、豊山大學の合併に依つて創設せられたものでありまして、今や、宗教生

活、宗教々育の高唱せらるゝ時に當つて、最も當を得た學府だと思ひます。而し當校の内情や入學試験に就ては、諸君に餘り關係がないこと、思ひますから、此は略すことに致しまして、東京に参りまして、自分が特に痛切に感じた、二三を掲げまして責をのがれたいと思ひます。

現在中學校で課して居る學課は全部基礎的のものでありまして、將來如何なる方面に進んでも、必ず其の全體が必要缺くべからざるものであります。自分は將來法科に進むのだから、漢文や圖畫なんかは不用だ。入學試験にはないからごうでもよい。と云つた風の考を持つて居られる諸君が、或は多數居られはしないかと思ひますが、斯る考は一大誤りであります。諸君の課目の一つ一つが皆基礎知識でありますから、是非とも學んでおかなければならないものばかりであります。私は母校を去つて、過去五年の生活を省みた時に、「も少しやつておけばよかつた」と云ふ慚愧の念に堪へませんでした。どんな課目でも、合點の行く迄探究して初めて、知識は力になつて参ります。如何

に勉強しても、し過ぎる事はありません。入學試験なんか拘泥せず、實力を付けるのが第一です。實力なくして、入學試験にパスしても何の役にも立ちません。近頃新聞や雑誌に、入學試験の緩和云々の記事が出て居りますが、此は只試験の緩和であつて試験全廢ではありません、何處迄も試験はあるのです。斯る事に左右されることなく、只専心に、實際に生きた知識を蘊蓄して、實力の充實に努むれば入試なんかは、朝飯前の茶づけであります。

若し諸君にして、宗教を討究せんとする方、今日高唱されて居る宗教々育を研究せんとする者がございましたら、是非吾校に御入學あれ、お手紙を一本戴きましたら、及ばすながら、出来るだけ盡力致したうございます。最後に諸君の御健勝と御奮闘を祈る。

東亞同文書院より

同校 井上宗親

街側の菩提樹のトンネルが一葉一葉と疎になつ

て来て、江南にも秋が訪れて来ました。懐しい母校の諸君は、あの美しいお城山、水清い菊濱の畔で、勉強に運動に餘念ないことせう。此の際聊か我書院の性質について述べ、或は將來大陸に來ようごされる方々の御参考にまで資せんと思ひます。我東亞同文書院は其の創立の主旨からして、日支の人材を養成し、以て東亞の大局に貢献するにあり、と云ふのですから、日本の一般の學校とは異なる特種の學校です。三十餘國の人民が入混んで居て、東洋第一の國際貿易港、素晴らしいコスモポリタンの都上海に於て教育を受けると云ふことが大に意義あることであり、同時に、書院教育の骨子なのであります。従て教室で講義を聞くと云ふ丈でなく、國際氣分を養ひ、上海研究、支那研究をする事が書院に於ては非常に大切なのです。此等の研究には勿論、卒業後直に必要となつて來るものは語學なので、支那語、英語には大に努力して居ます。就中支那語には相當苦心して、初め四聲の區別發育のため、或る人は遂に咯血し、或る一年生は寢言に四聲を發音して居たと云ふ様な

ローマンスさへあります。此等の語學、特に支那語には學校で習つた丈では駄目で放課後上級生に付ての復習の都合上其の他の關係より、書院學生は皆四年間寮に入ることになつて居ます。又書院にては實地の支那研究の爲には、毎年四年生は、十數班に分れ、各人各異つた調査目的を以て、支那内地大旅行の途に上ります。三ヶ月に及ぶもので、北は國境より西は西藏、南は雲南、暹羅、南洋の端に及ぶものです。此の報告は、陸、外兩省の貴重な資料となり又書院卒業資格の一に絶対必要なものなのです。此の異國の學舎での四年間の苦しい語學の洗禮を受け、而して十旬の大陸彷徨の旅を終へた時、始て、支那を論じ、大陸の舞台へ上ることが許されるのであります。私は入學試験に關しては先年の校友會雜誌へ山口縣派遣生の選抜試験に付き書いておきました。今年も大体變りはなかつた様でした。就職具合は實は去年は書院も頗る悪かつたのですが、今年は今頃（九月二十日）から最早採用申込が大分來て居る様ですから、去年よりか遙に良かろうと思ひます。

從來書院卒業生の活動の方面は、楊子江流域及黄河の流域及滿蒙に大部分は南洋方面にはあまり出ませんでした。四五年前より旅行班も南洋方面に出し又卒業生も南支は勿論南洋方面にも活躍して居ます日本人の活動する所は勿論、支那人の居るところ直に書院學生の活躍舞台です。

私は最後に書院を志望せられる方は、四年間の異國の學舎の修練に堪へ、將來も此の風土異なる支那に於て活動する事の出来る健康を持ち、又あの山美しく水清い母國を棄て、初め誰もが憐む孤獨と郷愁とを堪へ忍んで此の呻きの大陸、灰色の國へ骨を埋る丈の決心を以て來られる様御願ひしてやみません。中華の青年と共に眞に書院目的に賛成して來られる方々の一人でも多いことを望んでやみません。萩中からは私一人です。精しいことは書院宛私へ御一報下さい。

台南高商より

同 校 三 島 文 平

謹啓、諒閣中ですから年頭の御挨拶失禮致しま

す。いつも御無沙汰許り致しまして誠に濟まないと思つてゐますけれど何卒御許し下さいませ。勉強も何も出來なくて第一學期は非道い目に遭つて了りました。それで最近、委員も文藝部委員も罷めさせて貰ひましたが又來年度になれば元の通りにされ相で参つてゐます。

一月といふのに一昨日は八三、五度といふ様な狂温度でした。今日あたりはずつと寒くなつてゐます。植民地經濟をと思つて、最近渡台して來た様な氣がしてゐるのに、もう二年も後三ヶ月となつて、高商三年の短かさ、勉強の出來ぬのに大いに焦つてゐます。台南に下らぬ高商が出來た關係より見ても、本校に研究科の一年位欲しいと思つて色々サヂエスチョンをして見ますが、流石に呑氣な連中ばかりで薩張り反響もありません。學校を出てからも二三年は何處かで今研究中のものを完成する暇のある地位を見付け度いと思つてゐます。最近岩田先生を東京で歓迎する事を得て、お話する時間こそありませんでしたが、實に嬉しくあり

ました。記念寫眞はもう先生の手から御覽になつたこと、存じます。本島の事も大いに紹介されたこと、痛快に堪へません。昭和の新しい年を迎へまして、本島も外觀は頗る平和で實に蓬萊島とか高砂島とかの名に背かず、阿房塔下の總督府官吏を始めとして皆楽しい日を送つてゐますが本島の方々は仲々この過渡期に對して穩和急進等の各方面の運動が起りつゝあります。植民地の今では最高學府と誇つてゐる本校内の生徒で台湾日々新聞の漢文欄に目さぬ通さぬ間に、本島人學生の方は、團體生活の反逆者と内地人生徒からは嫌がられ乍らも黙々として恐しい勉強をしてゐます。誰か内地人の生活を徳川時代の旗本に擬して、その轉覆の日の近きにあると警告してゐましたが、實に寒心に堪へない事です。旗本の榮華と放縱な生活からその悲惨な終末の歴史を考へると、成程今の状態を内地人が繼續したら續々悲運に遭つて内地引上となるでせう。

時と金さへあれば一度朝鮮を見たいと思つてゐますが、日鮮融和と内台融和は果して何の程度ま

で進むものかと種々考へてゐます。等しく本島人の内でも福建人と廣東人とは言語は勿論精神的に大いに融和を欠いてゐます。内台の融和はこの本島人間のみの融和の欠乏に對して何の方面より何の方面に何の程度まで進むものでせうか。薄べらな内台融和論にも飽き／＼して來ましたが、またこの本島人間のみの融和さねも知らぬ内地人が多いのは實に慨歎に堪へません。この年頭に台中で本島人のみで或る文化協會の總會がありまして、穩健急進兩派の暗闘はごんなにこの會に現はれるかと新聞を注意してゐますと、豫期した様な大混亂が起りました。新聞そのものが督府の御用新聞で何の程度まで實相を明かにしてゐるかは勿論分りませんが、急進派の方は總會前に急遽、己の派に屬する青年を多數入會せしめて、決議に先立ち穩健派の原案を破棄せしめ、急進派の原案を上程せしめて、それを壓倒的多數を以て可決して爲に穩健派に屬する人々の退場を見且その人々は辭表を提出し會長林献堂も辭職しやうとしたのをこの人々は、まだ會長として推してゐる様です。

蓬萊島にも、もう小作爭議さへ起つて來てゐるんです。我々學徒にとつては實に一面興味に驅られ乍ら研究してゐる譯ですが、本當に植民地といふものは研究材料の多いことです。萩中からもウンと立派な人が來て之等を研究して戴き度いものと考へます。基隆港經濟一個を掴んでも仲々五人十人で研究し切れまいと思ひます。

時々萩の新聞に本島の事について投稿して見やうか知らと思ふ時があります。河上肇博士は經濟といふものを宗教によつて解決しやうとして失敗された様ですが、この方法には私も一大暗示を得ました。先生はキリスト教について何ういふ御意見をもちでせうか。台灣では信仰のある人以外は恐ろしい様な氣がします。寒さにふるへてゐる本島人の下級の人も、自動車の中を見乍ら「あなたの倒す一本の潤徳利で私等は一家が二日暮らせますヨ。」と云つてゐるのも充分想像が出來ます。

内台航路に大阪商船は又巨船をまはしました。排水一萬四千噸で、これで同社就船全部大型船にした譯です。この様に、内台僅か三日の航海に遊

覽的氣分を横溢させてゐる反面、所謂南進の第一條件の南支南洋航路では、大戰時代に濫造し設計を誤つて技師長が首をつゝたといふ因縁つきのヘボ汽船が動いてゐます。日本の南進策も萬更方針を誤つたものでないかと皮肉が云ひ度くなります。

母校の五年四年の諸君は今大童の奮闘振りてせう。本校に受験なさる方があるか無いかは分りませんが、植民地の比較的自由的な生活を味ひそれでも墮落しない覺悟のある人はドンンドン來たらよいと思ひます。台南高商はチョット今當分駄目でせう。萩中卒業生丈集つて一つの植民地經濟論を合著する様になれば何んなに痛快でせう。

今日は之で擱筆致します。内地は悪い感冒が流行して來たさうで御座いますが折角御身御大切になさいます。〔右の文は伊藤先生への私信より抜萃せるもの、幸に寛恕を乞ふ〕

熊本藥專より

同校 長 瀬 誠

「藥專とは何をやる處ですか」とはよく耳にする事

ですが成程看護婦でさへ出來る事を三年間の年月と貴重な國費を使つて何を學ぶかとは誰しも不審を抱く事です。

其處で本校の内容を御知らせる必要が生じます。讀んで字の如く藥專は藥學を専門に研究する處ですが世人の思ふ如く看護の代用式な事を學ぶ處では有りません他校は存じませんが本校は二大根柢に基いて教授して居ます一つは藥品製造化學とか經劑製藥學と云ふ風の製造を元としたもので他の一つは有機化學を基礎とし分子間の結合、性状、特異性等を擴般に調べ生理學と相待つて病に利く藥の研究を爲すのです。最少し分り易く言ひますと、例へば胃の悪い原因は胃中に酸が過剰に有る時と、アルカリが過剰に有る時の二つが有りまして吾々は之を胃酸過多症アルカリ過多症と呼んで居ますが酸の多い時には重曹の様なアルカリで中和し、アルカリが多ければ鹽酸の様な酸で中和するのです、之等を考究する科目には、有機化學有機分析化學、藥理學、調劑學、藥効學等があります。少し専門に走りましたが以上の様な次第で最

も簡單に充分なる定義とでも言ふものを述べますと「藥專とは化學を専門に研究し其を實社會に應用する一方便として藥學に迄導くものである。」と思つて頂けば當らずとも遠からずです。御參考の爲本校卒業生の活動して居る處を書きますと、製藥會社、化粧品會社、食料品會社、染料會社、鑛山、製鐵所、諸官廳衛生課及藥局開設者です。取り止めない事を長く書きましたが少しでも諸兄の御參考に成れば望外の望みです。尙御受験の際は學校當御一報下されば喜んで御世話致します。

奈古屋高商より

同校 大谷 正 信

「學生は學生らしく」との不文律のもとに、年と共に益々その健實さを増進しつゝある我が中京の名高商に就ての評價は、暫く一般社會に譲り、茲には少し許り他の事柄を述べさせて戴きたい。我等は今や燦然たる昭和の曙光に浴してゐる。然るに財界不況の暗流は依然として涸るゝことなく、剩へ年を重ねるにつれ益々急激となるばかりだ。

就職難!!!就職難!!!嗚呼何と忌はしい言葉ではないか。數多の人間がこの渦中に捲き込まれ、浮きつ沈みつ沈んでゐる。現今の我實業界は實に渾沌たる危機に頻してゐる。

實業界には人がおらぬ。身を以て私利の爲に殉ずる者は幾人でも居るが、國家社會のために一命をも犠牲に供し得る人が居らぬ。故に、日本商品が有ゆる海外市場で排斥されるのも尤もだ。

再び繰返して言ふ。我實業界は徹頭徹尾行詰つてゐる。商業道德は全く地を拂ひ去つた。

實業界の「松陰。」これぞ現代社會の絶對的に求めてやまぬ人物である。然らばその松陰は何處から出るであらうか?

僕は信ずる。諸君の中からその松陰が數多出ること信ずる。そして、かの偉大なる松陰先生の如き至誠もて、世界經濟を貫き、我國威を宇内にいやが上にも輝かせてくれる人の出ることを信ずる。幸にして、諸君は萩中入學當初より、地下に眠れる偉人の激勵の聲を聞きつゝ、松陰先生の士規七則の精神を以て、常に薰陶されてゐる。實業

さい。詳細お知らせ致します)

熊本高工より

同校 藤下長俊

本誌上によりおなつかしい諸君に接するを無上の悦とします。諸君の内早く實業につき相當な地位に進まうと思はれる方があれば高工を御薦めします。我田引水の様ですが目下土木建築科はその賣れ行き最もよいのです。特に専門學校へ入學せんとする方は、その校の歴史の新古を考へらるべく、先輩の有無は卒業後社會に立つに大に關係を有します。本校などは高工中古い歴史を有し、土木科は最も古いと思ひます。卒業生中、萩中出もその中で重要な地位を占め、活躍して居ります。こゝは勉強するに最もよい所で、月に三十圓位で充分やつてゆけます。もく／＼と勝つては消え行く大阿蘇の煙を眺め、楽しく、愉快に學んで居ます。

尙本校御志望者は御通知下されば學校内容凡て御通知して上げます。

界に志あるものは此際奮然と立ち給へ。諸君の事業は實に前途遼遠である。

諸君の中には、自分の將來について随分思ひ悩んでゐる人もあらう。然し決して慌てゝはいけない、無理をしてはいけない、よく／＼自分の能力体力資力を考へて、自己の性能の適する方面に進み結へ。男子と生れた以上、政治家となつて、天晴れ天下の政堂に立つて獅子吼もしてみたらうが、又三間長屋の賤ヶ伏屋住ひも捨てたものではない。人にはそれ／＼天與の使命がある。

要するに「適材適職」といふ意味を充分納得して自己の尊き使命に唯一の目標を求め、勇往邁進して倦まざるものは幸福である。

天命は尊い。而して人は更に尊い故に、人は、人生に意義ありや否やを問ふものではない。如何にせば人生をして意義あらしめ得るやを問ふべきである。

萩中の諸君よ。所信にむかつて猛然と立ち給へ。僕は常に諸君の成功を祈つてゐる。
(名高商入學希望の方がありましたら、御一報下

春の朝 上田敏譯

時は春

日は朝

朝は七時

片岡に露みちて

揚雲雀のりいで

蝸牛枝に這ひ

神そらに知るしめす

すべて世は事も無し

「ブラウニング」ヒバの歌



藻 蘆 草

庭 園

寒 星

すべて、眺望は、廣い程がよい。この點からは平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみといふやうな、高原ほど美なるものはない。庭園に於ても、前景には、なるべく、高い樹木が少くて、奥行が長く、一面に苔か或は芝がはびこつて、大きな石が、深く埋つたのがうれしい。庭に、芝を植ゑるか、苔を敷くかに依つて、その趣は、自ら異なる。

芝草の園には、白い河石がふさわしく、背景には、青空と白雲がよろしく、従つて、この種の庭園は、小高い地面であることを要する。蘆苔の庭には古色蒼然たる岩がよろし。背景には、鬱蒼たる密林を要する。土地がしめりて、或は潺湲たる溪流を引きたるもよし。

日本古來の庭園は、すべて後者すなはち蘆苔の庭に屬して、夏は、綠陰の讀書によろしく、秋は落葉うち重りて、夜雨蕭々といふ趣が味はれる。釜の音をきき、茶をすすめるのはこの種の庭に限る。之に反して、芝草の庭園は、現代式とも言はれようか。うららかな春の日に、柔い芝の上に横れば、正に自然の兒である。猛夏、この園を眺れば芝草は綠に光る、石竹は紅に燃ゆる、河石は銀と光る。秋ともなれば、一面の芝草さびしくうら枯れて、秋の風が吹く。

縣下中等學校聯合 野外演習參加記

第五年生 赤 木 弘

第一日

縣下二十三校中等學校生徒二千四百餘名並に、山口聯隊將校下士以下及機關銃隊合せて參千名參加の第一回縣下中等學校生徒聯合野演は、秋色まさに關なる十一月一日山口を中心として實施された。演習實施に先ち我青軍は午後一時山口聯隊營

第一大隊

周中義勇隊 岩中義勇隊
宇中義勇隊 長中義勇隊

第二大隊

鴻中義勇隊 大中義勇隊
柳中義勇隊 下商義勇隊

第三大隊

下工義勇隊 安中義勇隊
機關銃隊 山口義勇砲兵隊

三、十一月一日正午山口衛戍司令官ハ敵兵本朝來三田尻及宇部港ニ上陸セルノ報ニ接シ補充隊ヲシテ宇部方面ノ敵ヲ又防長義勇兵團ヲシテ三田尻方面ノ敵ヲ擊攘セシムルニ決ス

- 此ノ時迄ニ兵團長ノ知り得タル情況左ノ如シ
- 1、三田尻及宇部港ニ上陸セル敵ハ我が住民ノ抵抗ヲ排除シツ、本一日正午頃三田尻及佐山村ヲ出發シテ北進セリ其ノ兵力兩方面各二千トモ五千トモ云ヒ又一萬トモイフ
- 2、補充隊ハ午後二時半已ニ小郡ニ向ヒ出發セリ
- 3、昨夜來上空ノ氣流險惡ニシテ飛行機ノ飛翔ヲ許サス

此の想定により青軍の出發準備完了した頃、防長義勇團長は、本日正午在宮市防府町長發山口衛戍司令官宛に、昨夜來三田尻に入港せる敵の運送船は三千噸級一隻にして、本早朝より上陸を開始

庭に集合の上、總指揮官中村少佐の演習上の注意を受け、次いで大森知事より本演習は平日受けたる訓練を實地に試みんとするものである。諸君は規律あり節制ある行動を以て、平素訓練の實を擧げよ。との訓示を受け、青軍は午後二時二十分より運動を開始した。青軍想定左の如し

甲國防長義勇兵團想定

- 一、山陽山陰兩道ヲ領土トスル甲國ハ十月十五日四國及九州ヲ領土トスル乙國ニ對シ宣戰ヲ布告セリ
- 甲國軍ハ宣戰布告ト同時ニ奇襲ヲ以テ門司要塞ヲ屠リ目下國軍ノ全兵力ヲ擧ゲテ小倉及福岡平地ニ集中中ニシテ近ク乾坤一擲ノ一大決戰ヲ企圖シツ、アリ爲ニ國內ノ警備薄弱トナリ在山口造兵廠ハ同地補充隊ノ兵力僅ニ五百名ニ依リテ警備セラル、ニ過ギズ
- 二、開戰以來敵兵山口ニ來襲シ火藥庫ヲ爆破スルノ風況頗ニシテ爲ニ人心胸々避難スルモノ日ニ多キヲ加フルヤ縣下各中等學校生徒ハ自ら進シテ義勇隊ヲ編成シ十一月一日正午迄ニ山口ニ集中セルモノ十四隊千數百名ノ多キニ達シ奉公ノ誠溢レテ意氣冲天ノ概アリ此等諸隊ハ合シテ防長義勇兵團トナリ山口衛戍司令官ノ隸下ニ屬ス其ノ編組左ノ如シ

萩中義勇隊 柳商義勇隊

せり。其の兵力は不明なるも正規兵ならざることは確實なり。本職は附近住民を糾合して極力敵の上陸を妨害せるも、終に撤退の止むなきに至り、敵は正午其上陸を完了し、山口に向ひ前進を開始せり。庶幾くは速に兵力を派し此の敵を撃攘せられんことを切望すとの電報を受領し直に行動を開始す。我隊は第一大隊第一中隊となり、大隊長前原少佐の命を受けて尖兵中隊となり、前衛本隊の前方約三百米の所を進軍し、第一小隊は尖兵となつて小春日和の暖い日の光りを満身に浴びて威風堂々邊りを拂つて、青軍の最先頭を進み我隊健兒の意氣を發揚するは此の秋にありと一同の志氣大いに振ふ。山口町、御堀を過ぎて高芝附近に至り、

斥候の報告に依り左の事を知る。

敵縦隊の先頭らしきもの午後二時半下鯖山及小鯖宮馬場を通過せり。

中隊は直に展開し前衛の展開を掩護するに決す。敵は千四五百米前方に在り。先遣斥候の衝突したらしい小銃の音は時々響き、戦雲は徐々に動く。

我も散開した儘、機を見て目標面貌山に向つて前進する。四時近くなつて敵影千米附近に現出す。

九百米―八百―七百―敵は漸次肉迫して来る。我中隊は中隊長よりの命に依り、敵が四百米以内に現はるゝを待つて満を持して動かない。

先づ赤軍に依つて火蓋は切られ、青軍又之に應じ愈戦闘は開始せられた。青軍の左翼は柘附近の本據を突くべくカナリ激戦を交へた。一刻前迄は平和な大内村は忽ちにして今は戦の庭と化し、銃聲は恰も「豆を炒る」が如く、砲聲は殷々こたまし戦は正に酣となる。今や天高うして馬肥ゆるの好時季、我等内に潑刺たる生氣を蓄へたる青年の元氣當るべからず、冲天の勢を以て彼等何者ぞばかりにどん／＼敵に肉迫する。

斯くて銃聲は益々凄しく、彼私の距離僅かに百米近くとなるや、突撃の喇叭は唳々と響き渡る。彼私の軍勢二千五百一齊に立つて突撃を開始し、其の大喊聲は百雷も一時に落つるばかり、痛快極る白兵戦は演せられ、四時三十分喇叭は演習中止を告げ、此に一先づ第一日の演習は終了し、兩軍

共最初の展開線に後退し、本夜現往の態勢を以て夜を徹するに決し、午前四時迄演習中止となる。

斯くて秋の宵月露繁く野邊に時雨降り、聽て霜と凍る野中に不馴れの飯盒炊爨に空腹を充し、背囊を枕に天幕内に結ぶ健兒の夢は幾度破られた事であらう。

第二日

十一月二日午前三時青軍の防長義勇兵團總指揮官中村少佐の下には左の通報が入つた。

補充隊通報(十一月二日午前三時於小郡)

- 一、補充隊ハ昨日午後四時大蔵村南方隘路口ニ於テ敵ト遭遇シ激戦ヲ交ヘ夜半ニ至リ敵ハ砲四門死傷者二百餘名ヲ遺棄シテ字部方面ニ退却ヲ開始セリ其ノ兵力略我ニ倍セルモノ、如シ
- 二、補充隊ハ敵ヲ追撃シテ二日午前三時小郡町南端ニ到着ス依然追撃シテ敵ヲ殲滅セントス
- 三、萩ヨリ來着シテ新ニ予ノ隸下ニ入レル長北義勇乘馬隊二百騎ニ步兵一小隊ヲ附シ佐波山洞道方向ニ差遣シ敵ノ退路ヲ遮斷セシメ且敵ノ背後ヲ攻撃セシムルコト、セリ週クモ午前九時頃マテニハ敵ノ退路上ニ到着スルナラン

補充隊長 某 中佐

依つて指揮官は直に全員に出動命令を下し、各隊

は昨夜の配備に就き、警戒搜索部署に着いた。月は既に没し、剩へ天候險惡にして咫尺を辨するさへ困難である、森羅萬象益々眠れるが如き中に、靜かに／＼行動し、前方五十米の線に歩哨を出し警戒線を構成する。斥候は敢然起つて偵察の任につき、幾度か危険を冒して敵情を搜索する。寒空に照明彈がカツと輝くと又もとの暗黒の世界にもぞる。冷々たる夜氣は身を刺す様である。時間は經過して五時近くなる、前面側面にあつて時々斥候哨歩の打つ銃聲は聞ゆ出し、戦機は漸くにして動き出した。戦の幕は切つて落された。

五時も過ぎると東天は微に白み、曉闇に透して見ると我中隊の兩翼は共に運動を開始したので、我中隊も機を見て行動し始める。此の時雨が降り出したが少時するに止んだ。

最早遠くでは火蓋は切られ、銃聲は漸次激しくなり、加ふるに輕機關銃、重機關銃の音は物凄く響いて、大内の天地も爲に震撼し、我中隊も敵前四百米頃より戦端を開き、昨日來の疲労も物ごもせず、猛烈に進撃又進撃を續ける。敵も激しく應

戦し頑強に抵抗する。折柄前面に當つて煙幕はモウ／＼と立ち昇る。我軍は之を利用して奮進するので敵は支へ切れず、遂に二百米ばかり退却した。天地に轟く銃聲、四方に立ち昇る擬砲煙々幕、喻へんに物なく、筆舌の盡す能はざる、壯絶な拂曉戦は今白熱化して真に實戦同様である。午前六時半全軍は總突撃に移り、突撃の聲は各所に起り、山野に反響して地も割るゝばかり。休戦喇叭と共に第二日の拂曉戦も終り此に二日に渡る聯合野外演習も終りを告げたのである。

斯くて各校選手の競點射撃會施行せられ、本校よりは左の諸子が選手の光榮を擔ひ參加した。

池上武夫 北野一郎 内田 巽
厚東 晃 村木權次郎 安田六郎

射撃の成績は我校は第五位を占め、個人では池上君は二等賞を得、賞品賞状を受領し、安田君は四等賞を得賞品を得るの光榮に浴した。

射撃終了と共に、櫻島練兵場に於て盛大壯烈なる觀兵式は施行せられ、縣下二千四百名の健兒は威風堂々として、緊張味を見せた真に防長精神の

統監部員周山中佐殿の講評左の如し、
中隊長及小隊長の動作は専門的に見ては研究の餘地があるが、習得の結果としては上々である。其の他一般は概して良好であつた。就中斥候の働に見るべきものがあつた。土氣頗る盛で自ら難きに當るの美風を認めた。下松工業周東中學の如き膝を没する水をも厭はず跋涉しつゝ射撃動作をどつた如き、實に快感を以て見た。専門的に見れば研究の要あるも素養による豊富なる常識の判斷活用に待つ處極めて多い。將來の戦争は人を養成するのみならず、産業經濟交通は申すまでもなく凡百の方面にわたつて完備せねばならぬ。將來國家の中堅となられる諸君が豊富なる軍事智識をもたれるは國家のため慶賀にたへぬ。

發揮であり、國民の中堅として末頼しく思はれた。

統監大森知事閣下の訓示左の如し、

秋季清爽たる昨日から本日の二日間縣下二十三校二千四百の生徒が參加して行はれた事は本縣としては第一回であるが茲に無事終了を告げた事は本縣の一慶事で深く喜ぶ次第である。諸君は平素訓練された技能と精神を以て秩序整然たる動作に服し、殊に今曉は雨さへ加つた中を最も勇敢に活動せられた事は欣快に堪へない。演習の間に於て體力を練り諸君の氣魂を盛ならしめた事を痛感し、規律と節制とを遺憾なく充分に體驗せられた事と思ふ。此の貴き體驗は今後實社會に立つて必要な事で、國家の運命を双肩に擔ふ諸君は此の體力によつて氣魄を盛にし、紳士たる資格を持たねばならぬ。願はくは二日間の經驗を實行の上に運用し、目的を達成せられたい。演習の講評については周山中佐に願する。更に軍部當局の指導と援助とによつて野外演習を無事に終了するを得た事を感謝す。

秋の句 芭蕉

道ばたの木槿は馬に喰はれけり

白露をこぼさぬ萩のうねり哉

三井寺の門たゝかばやけふの月

鬼灯は實も葉もからもみじ哉

名月や池をめぐりて夜もすがら

校報

第二十七回卒業式

昭和二年三月三日午前十時より第二十七回卒業式を講堂に於て舉行す。生徒父兄及保證人並に來賓多數の着席あり。岩田校長舉式の辭に次ぎ勳語誦讀あり、次に卒業證書及賞品賞狀授與ありて學校長の告辭、來賓を代表して松田少將の祝辭、生徒總代祝辭、卒業生總代の祝辭、父兄保證人を代表して瀨川氏の挨拶ありて午前十一時過終了す。當日卒業生にして受賞せし者左の如し

一、學力俊秀にして能く校則を守り平素勤勉にして精勤五箇年に及び且伍長となりて能く其の任務を盡したるもの

伊藤滿

一、學力俊秀にして能く校則を守り伍長となりて能く其の任務を盡したるもの

永富五郎、新山半治郎、久保一郎

一、五箇年間精勤したるもの

土屋秀雄

津田茂、瀨川洋、中村明、原一衛、本永

鴻人

一、本學年間伍長となりて能く任務を盡したるもの

脇本元、河武博一、森澤史郎、篠原正太郎、森屋龜藏、堀源助、三吉吉郎、清水豐吉、伊藤徳太郎、仙波武、宮崎三郎、横山剛熊、村木七郎

一、本學年間室長となりて能く任務を盡したるもの

吉村醇

一、本學年間精勤したるもの

末成寛、永松三衛、森屋龜藏、久保田繁三、安戸武夫、村尾俊介、田中哲夫、堀久雄、板倉光太郎

一、本學年間精勤したるもの

吉村醇

一、卒業の際五席以上にして、同窓會より奨學賞を受けしもの

永富五郎、伊藤滿、新山半治郎、久保一郎、森屋龜藏

縣立學校生徒獎勵規程による受賞者

四月八日、新學年の始業式後、前學年度

堀江庄藏、齋藤正文、倉田文次、竹内美文、品川正夫、佐々木元雄、守永清清水克彦、中村梅男、厚母元房、小方健雄、津田時成、松林進一、原一雄、中尾弘真、山本延行、木村慶至、長谷五郎、中村一、綿鍋一郎、西田俊道、柴田良一、板垣邦雄、田村忠彦、藤原繁、小田榮太郎、壺谷秀作、大野久太郎、福田繁人、日名内正雄、木村正彰

二年、山崎三實、三好桂太郎、山内清繁、大庭清宣、永田正二、今地忠雄、高垣正秋、岡本正、南家廣見、伊藤芳治、倉増賢二、松井茂、渡邊義雄、清水武夫、堀利久、吉賀幸一、時澤忠、白井光人、岡勇、大野元明、波多野毅然、桂木素夫、山田博、阿武忠之、森後江田中武、金子伸義、河野富男、白井素巳、桂明、野村琢磨、池内博、池上文夫、田中了範、三隅田浩治、山村源治、石田勇、綿貫義介、藤村壽夫、田中三郎

三年、香川保政、織哲夫、大野重一、來島市雄、金井逸郎、武居好次、岡村則正、天野昌平、中本節市、田村秀夫、

一、四等賞(本學年間精勤せるもの)

一年、横山義男、中野公次郎、有馬惠清、安戸元彦、佐伯正道、森田敬介、秋田秀穂、木村基晴、平井正臣、中村昇、細川晃、井上國雄、山本吉夫、阿武修介、磯野勵三、植村茂和、渡部龍夫、横山俊治

二年、岩井俊男、阿部惠三、岡田廣、藤田榮作、花村英一、原田幸雄、佐々木徳太、來島秀男、徳永左一、都野繁雄

一、四等賞(本學年間精勤せるもの)

一年、小谷勝一、白上友一、小林正、佐田鉄三郎、原田豊、石川巖、伊東孝、

一、三等賞(本學年間室長となりて能くその任務を盡したるもの)

辻永勝明、藤田梓、田上俊彦、岩本孝雄、安田六郎

一、二等賞(本學年間伍長となりて能く其の任務を盡したるもの)

一年、藤井清規、大谷齋、柴田政雄

二年、荒瀬國亮、長嶺正衛、澄川滋、八木哲夫、彦田徳市

三年、藤井潔、秋丸兵一、吉屋安雄

四年、板垣禮作、池上武夫、高橋博、三浦彦八、厚東晃、辻永勝明、田北享、峯岡良文、三井正治

瀨川治、世良忠雄、吉地昌信、中村稔馬來壯祐、岡田勝、兼田英一、品川透小田清作、服部武夫、來島邦義、田中敏亮、藤井逸次、乃美魁、藤本實、金子縁那、田村信義、長尾恒信、金子爲朝、林薫、鈴木正一、中原信登、奥部武義、中尾喜彦、宮原進、相島哲夫、弘永正、作間謙治、大田市良兵衛

四年、横山治雄、藤井秀夫、河村一雄、溝田春雄、桂良典、土井五郎、田中久一、小田武夫、神田武雄、田村英治、紙本忠雄、久志敬範

◆縣立學校生徒獎勵規程に依らざる受賞者

一、四等賞(本學年間精勤せるもの)

一年、横山義男、中野公次郎、有馬惠清、安戸元彦、佐伯正道、森田敬介、秋田秀穂、木村基晴、平井正臣、中村昇、細川晃、井上國雄、山本吉夫、阿武修介、磯野勵三、植村茂和、渡部龍夫、横山俊治

二年、岩井俊男、阿部惠三、岡田廣、藤田榮作、花村英一、原田幸雄、佐々木徳太、來島秀男、徳永左一、都野繁雄

二年、高松博、田中國盛、渡邊知正、津森正夫、宮本哲治、大藤義人、楊井誠之、田原義雄

三年、田邊世民、原田正人、清水俊雄、渡邊良介、村木八郎、三好謙介、村橋秋一、山本宗一、小田博

四年、河村忠雄、大村武一、永富博、宮崎典也、和田賢

今井知之

三年、三島將、金子廣見、岡良雄、神崎清作、若松芳雄、岩本誠、堀三男、大野一郎、竹原敏雄
四年、楊井勇、弘寛明、金田延佑、田坂守典

同日同窓會よりも、各學年成績優秀なるものに奨學賞の授與あり

一年、井町秀介、淺原精次、山田東行、福永虎雄、井上三郎

二年、村岡慶太郎、赤木正二、岡崎正夫、豊田正之、光井奉城

三年、岩武照彦、林吉郎、五島直人、松浦藤三郎、岩田忠夫

四年、柴田敏夫、赤木弘、兒玉玄太、水野一郎、吉津丈夫

●先生の更迭

大正十五年十一月以後(前号報告後)先生の更迭せられし者左の如し

△久永先生 大正十五年十一月新任せらるる國語漢文科擔任

△中津江先生 昭和二年四月病氣のため退職せらる

併せて理科、書道、書道、地歴科の展覽會を開く。

◆九月十二日 校庭に於て 内親王殿下御降誕奉祝式を舉行す。

◆九月廿九日 講堂に於て山口地方裁判所長矢崎憲明氏の陪審制度に關する講和あり。

◆十月十六日 山口縣教育會主催體育大會に本校選手出場す。

◆十月十七日 本校競技部は體育大會に優勝す。

◆十月十八日 第廿八回開校記念式舉行、引續き競技大會を開く。

◆十月廿二日 田中首相歸省につき職員生徒一同萩驛前に出迎へ、二十七日見送る

◆十月廿六日 防長武學養成所山口支部長松田少將の講演あり。

△新井先生 昭和二年四月新任せらる、國語漢文科擔任

●校誌 (節略)

(自大正十五年十一月至昭和二年十一月)

◆十一月十三日 樺東附近に於て施行の聯隊野外教練に第五、四學年生徒參加す。

◆十一月廿一日 松陰先生追慕式を講堂に於て舉行、安藤教師の講話あり、式後松陰神社に參拜す。

◆十二月二日 聖上陛下御不例にあらせらるゝに付御平癒祈願のため職員生徒一同春日神社に參拜す。

◆十二月廿五日 聖上陛下崩御につき講堂に於て奉悼遙拜式を行ふ。

◆昭和二年一月十日 武道寒稽古開始。

◆一月十七日 辯論部大會舉行。

◆一月十九日 武道寒稽古終了。

◆一月二十日 武道大會開催。

◆二月七日 運動場に於て御大喪儀遙拜式を行ふ。

◆二月九日 第五師團參謀長松井榮雄閣下歩兵第四十二聯隊付増野久猛中佐來校、第五學年全部並に四年以下各一組の教練

查閱あり。

◆三月三日 第二十七回卒業式舉行。

◆三月十日 陸軍紀念日につき講堂に於て山田少將の講演あり。

◆三月廿七、廿八日 入學試験舉行。

◆四月八日 入學式舉行。

◆四月廿七日 火災呼集演習を行ふ。

◆五月十日 武道競技小會開催。

◆五月十二日 中國一週海軍飛行機三台來萩。着陸地菊ヶ濱にて見學す。

◆五月十七日 第四學年生徒九州方面へ修學旅行に出發し、廿一日歸校す。

◆五月廿二日 山口高校山口高商主催競技大會に本校も出場し第二位の成績を示す千六百リレーにて優勝旗を獲得す。

◆五月廿七日 海軍紀念日につき講堂に於て馬來海軍大佐の講演あり。

◆五月三十日 講堂に於て 東宮殿下行啓記念式を行ひ、式後運動場に於て 東宮殿下御親閱記念碑除幕式を行ふ。

◆六月三十日 武道大會開催。

◆九月十一日 本校水泳部選手は山口縣教育會主催水泳競技大會に出場す、第五學年第二學年生徒保證人會開催され

折々にうたへる

特別會員 久永祐藏

みどり子のこぶしが程の目白の子鳥籠にゐて

居睡りをする

健かの身はたのしけれ庭掃除終へて汗拭く青

葉の庭に

立秋のすぎて日淺き茄子畑に朝々霧が立ちこ

むるなり

霖雨なみあめのあとの黒土種子まくと掘れば濕りのゆ

たかなりけり

光りつゝ空に舞ひ立つひとむれの傳書鳩の羽

の眞白さ

校友會報

●競技部記事

△山口高等専門學校競技聯盟主催

第二回關西中等學校陸上競技大會

五月廿一日我競選手は三浦先生に引率され山口へ向つた。明ければ二十二日、夜來の雨晴れ絶好のスポーツ日和であつた。午前八時半森殿な開會式が大会場たる山口高校グラウンドに於て舉行された。優勝旗返還、訓話及び審判長よりの注意ありて、愈我競選手は天下に覇權を握る、廣陵中學校と相對した。若者の血は逆流する百米第一豫選で戦の幕は切り落された。前年度の猛者松岡君軽く豫選をパスする。その記録十一秒五分三は既に昨年の記録十一秒五分四を破る。若武者吉村君最後まで奮闘したが併し初陣の悲しさ遂に落選。同じく初陣者荒瀬君スタート悪く途中よく力走したが遂

に三等にて落選。實に遺憾に思ふ。内では砲丸投が始まつた。巨人米廣君コンチツシヨン悪く僅かに十一米六十二の記録は實に残念である。併し昨年の記録十一米五十は破つて一等。若武者堀君よく頑張つたが旅行の疲れのため宮本君と同じく十米出で遂に落選。八百米豫選に於て新谷君旅行の疲労のためであらう。實力を有しながら落選。老練河村君非常にコンチツシヨン悪く日頃あれ程の記録を有しながら落選したのは實に残念。老練角屋君よいストライドで走る二等にて樂に入選。次に二百米豫選があつた。若武者荒瀬君よく頑張り入選。老練小林君軽く入選。又松岡君軽く入選。本校は走高跳の出場選手の無い事は残念に思ふ。十時五十分決勝があつた。我々からは老練大谷君只一人。君は旅行疲労のため、我等は非常に心配した。併し号砲と共に三十餘名のスタートは切られた。強者昨年のレコード、ホルダー廣陵中田君と相並んで軽く走る。又縣下の剛者萩商の植村君あり、何れも植村君が中田君かに最後の榮冠は握られるものと思つて居た。併し大谷君よく走りなが、ペースが善い。十回十一回と

周る内に僅か五人の選手が一組を作つて進んだ。併し次第に落ちて遂に中田君と大谷君二人の競走になつた。中田君と二米の差を持って大谷君軽く走る。後一回中田君スピードを増す。大谷君よく頑張る。後百米大谷君のラストへビー目醒しいものだ。中田君を抜く事約三米。併し大谷君のへビーの出し方が早かつた爲後二十米で又中田君トップとなり僅か一米半の差で大谷君遂に二等となる中田君のタイム一七分五秒十分一。二人の競走は本大會の白眉であつた。四盤投昨年レコードホルダー、米廣君軽く大物を飛ばす。三十一米十八にて昨年の記録を破る。宮本君實力を遺憾なく發揮する能はず三等になつたのは残念。走中跳は吉屋君コンチツシヨン悪くベスト六まで頑張つたが五等で落選したのは残念なり。これも旅行の疲労の影響であらう。次にローハードル豫選があり、我々からは中田君が出場した。君はトラックに於ては老練であるがハードルは未だ試合に出場した事は無かつた。折から西風が激しく吹きカーブでは逆風を受け大いに困難に見えた。併し善いフォームだ。見る／＼内に二米リードし

た。併し六番目のハードルで左で踏切つた爲めか遂に轉んだ。我等はハットした。併しはれ起きるや否やスピードを増し遂に入選併し中田君は確しかに實力はある。百米第二豫選松岡君軽くテーパーを切る。そのレコード又十一秒五分三素晴らしいものだ。次に二百米第二豫選若武者荒瀬君よく頑張つたが遂に四等で落選。小林君スタート善く五百米まではトップを切る。併しスピードをゆるめて二等にて軽く入選。千五百米第一豫選大谷君軽く走る。善いペースだが次第に足が重くなつた。遂に落選。君は旅行の疲労と五千のためである。君の最後まで奮闘を謝す。つゞいて來島君軽く二等にて入選。老練河村君なか／＼頑張る。併しスピードを減じ三等にて入選。次に棒高跳があつた。本校より米廣君三好君田原君併し三人共棒高跳に於ては無経験だ。三好君及田原君は三米跳ぶには何等の因却を感じなかつたが三好君二米七十田原君二米九十でかつたのは實に残念であつた。老練米廣君よく頑張り遂に三米十五でか／＼、第四等となる。二百米決勝は萩中か山師か廣陵か号聲諸共スタートは切られた。小林

君スタート悪く力走遂に三等となる。併し君は試合前の病氣のためである。更に身体を回復して来るべき大會には君の優勝を期待する。次の八百米決勝、この八百米には廣陵の猛者渡邊君倉西君中田君の三名あり我々からは僅か角屋君一人一回二回と周る廣陵中學トップを切る角屋君軽く五等を行く後一周云ふ時にお互に大いにスピードを増した。廣陵渡邊君遂に落選。角屋君よく頑張つたが廣陵の二名にホケツトされ思ふ存分實力を發揮するを得なかつたのを悲しむ。遂に第四等となる。次に百米決勝がコールされた。猛者松岡君、廣陵の猛者否關西の豪勇倉西君山師藤本君を相手に凄い力走は開始された。松岡君スタート悪く見る内に第三位となる。遂にラストの二十米を素晴らしいスピードで抜いて、遂にテーパーを切る。タイムは二秒十分の五であつた。つゞいて千五百米決勝には廣陵倉西君テーパーを切り來島君充分實力を出す能はず遂に第四等となる。河村君の落選かへす／＼も口惜しい。内にはホスシャンが始まつた吉屋君吉村君コンチツシヨン悪く遂に落ちた。巨人米廣君も屢々の出場のため疲労を

感じたが、遂に第四位となる。個人優勝は米廣君僅か一点の差で廣陵中田君に優勝盃を譲る。次はローハードル決勝。カーブ専門の中田君カーブにハードルを二つ倒す併し直線に入つて凄いへビーで遂に第一着となる。但しハードルを二つ倒した爲めに記録は無かつた。併し君のあの調子の力走なれば二十七秒五分三は確しかだ、最後に残るは千六百米リレー決勝だ。せめて一本なりとも優勝旗をと勇んで出た四名の選手凄い号砲と共にトップを切つた。中田君よいストライドだ。ラスト五十米になり山師が次第に接近した。併し僅か一米半の差でパトンは來島君に渡された。來島君見る見る内に遂に十米近く抜く。それを保持して角屋君軽く走る。併し角屋君次第にスピードをゆるめた。我等は心膽を寒くした。敵の接近に氣附いたが又スピードを出して五米位の差でパトンは小林君に。君は例のスピードで走り十米餘の差で遂にテーパーは切られた。タイム三分五〇秒五分三、我々勝てり／＼。夕陽西に沈む時、殘光をきざんで渡れる校歌は歡喜そのものの表現である。終りに優勝旗授與式あり我々は千六百

リレーの優勝旗を獲得したが全体としては三六点で二位となる。第一位四三点で廣陵中學、第三位は二八点で山師。私は茲に肯て一言したい。我校は廣陵中學選手の徹底した練習振りを發揮されたのを目撃した。選手諸君は茲に何等かのヒントを得られた事だらう。あのスポーツマンシップ、あの清い態度、彼等は眞のスポーツマンだ。諸子よ。諸子も大いに奮闘努力して廣陵中學選手の如き清き、雄々しき態度を示して下さい。終りに先輩諸兄の御懇切なる援助を謝す。

出場選手

- △ 百米 松岡巖、荒瀬國亮、吉村長藏
- △ 二百米 小林祥介、松岡巖、荒瀬國亮
- △ 八百米 河村一男、角屋與三、新谷要二
- △ 千五百米 河村一男、大谷仁三郎、來島秀男
- △ 五千米 大谷仁三郎
- △ ハードル 田中茂一
- △ 千六百米リレー 小林祥介、角屋與三、來島秀男、田中茂一
- △ 四盤投 米廣松王、宮本哲治
- △ 砲丸投 米廣松王、堀三男、宮本哲治

- △ ホース、ジャンプ 米廣松王、吉屋安雄、吉村長藏
- △ 走り跳 吉屋安雄、堀三男
- △ 棒高跳 米廣松王、三好賢、田原義雄

山口縣教育會主催陸上競技大會

過去數年間連年優勝の榮譽を有する我校は時あたかも十月十五日諸先生を始め生徒諸兄等の熱勢なる後援を得て熱意氣に燃れて相島、三浦先生に引卒せられて山口に向つた。

十六日午前八時より開會式後直ちに百米豫選を以て意氣と体力の競走が始つた。新進のスプリンターの吉屋君は凄いらすと、へビーを出して入選前年の勇者松岡君も樂に走りテープをきつた。こゝに於て我軍の意氣大に揚る。フィールドでは砲丸の決勝の最中だ。巨人米廣君は初めは君として余り出ない様子だったが最後の一擲に於て見事本會のレコードを破つた。堀君もよく健闘された。これで我校は七点を得た。次いでトラックの方では八百米及び二百米の豫選があつたが我軍の選手は豫定の如く全部樂

に入選した。間もなくするに走高跳の決勝が始つた。若きジャンパーたる來島(邦)君及び田中(斌)君は初陣とはいへ美事な活躍振だつた。見よ彼等二人は我々の豫選に反して一米五十七を跳び越へ一米六〇を跳ばんとし一時は他校の選手等の心膽を寒らしめた。しかし点には入らなかつたが彼等二人は未來のハイジャンパーとして大に活動する時期の到來したることを考へれば實に喜ばしい。

次に千五百米の豫選があつた。大谷君はコンティションの悪いため中途にて止む。次は千六百米リレーの豫選だ、しかし思つたより樂にリードすることが出来た。時間の進行につれて四百米、百米、ローハードルと豫選が次から次へと行はれた。ローハードルに於て新谷君第二ハードルに於てハードルと共に倒れ直に前のものを追つたが残念ながら三着となつて落選した、眞に残念だつたが同君の來年の奮闘を望む。續いて一万米の決勝となつたが大谷君コンティションの悪いため相當の實力を有しながら中途にて止む。其時の感じは實に何とも形容し難かつた。君に切に來年の奮闘を望む次

第だ。次は第一日の最後を飾る八百米リレー豫選があつた。八百米リレーは充分自信があつた、軽く走つたが昨年のレコードと對レコードを以て一着となつた。かくて前日は全く終を告げた。一日目の成績は萩商二十点山師十八点山中八点萩中七点、点数に於ては劣れりし雖も豫選に殆んど全部がパスし全軍の意氣天を衝く。

靜かな山口の夜は明けて見るもの聞くもの皆我々を應援する様に思はれた。當日我々の頭の中には山師と雌雄を決する他何の考もない、選手諸兄の心中察するに余あり劈頭二百米第二豫選があつた。松岡君は一着だつた。荒瀬君は三着となつて落選、残念だつた。續いて八百米決勝、我軍からは前日軽くリードして一着となつた河村君と來島君顧みるに山師は豫選で全部落ちてゐるので点を縮めるには最もよいチャンスだ我々はベストを兩選手に望んだ、はたせる哉來島君は一等河村君は四着となつて一躍九點を得た。我軍の士氣大に揚る。續いて百米決勝松岡君獨特の凄いスタートをきつたが遂に二着となつた。しかし彼にはまだ後に二百米八百米リレーが控えてゐた。い

よいよ千六百米リレーの決勝となつた。ピストルの音が響いた、あつと思ふ間もなく田中君が完全に第一コーナーを取つてゐた彼は力走して約五米の差で米廣君にバトンを渡す米廣君悠々として追らすロンケをひいて走り敵は米廣君を弱つたものミ考へ猛烈に肉薄して來た。しかし米廣君のラストへビーの凄いと瞬間に十米の差を作り新銳の來島君へ渡した。君獨特のフォームを以てケンケン敵を離し終に二十米程リードして次は小林君四百米に於ては懸下誰しもひげをさらめだけあつて距離は大きくなるばかり遂に我選手によつてテープは切られた。二等との差約三十米しかし大勢は未だ決せず、續いて千五百米の決勝河村君よく奮闘され三等だつた。次は四百米決勝、老練な小林君と新銳の來島君、小林君のスタートはよく來島君はスタート悪く第一コーナーの所では最後についてゐた。しかし第二コーナーを越ゆるや君の實力はケンケン表はれ第三コーナーでは完全に小林君の後をついて行つた。遂に一、二等を占めた。この時この際我々の歡喜形容し得ず。

フィールドの方ではホース、ジャンプの決勝が

あま。吉屋君來島君の奮闘も甲斐なく入賞せず、棒高跳も始まつた、三好君田原君健闘の未四五等を占められたるは實に痛快だつた。

次に八百米リレー第二豫選があつたがトツプはおさへるしバトン、タッチは氣持がよい程立派に行くし實に愉快、太陽は中天に照り青空の中に綿をちぎつた様な雲が彼處此處に浮んでゐる。間もなくするに二百米決勝があつた。猛者連揃ひ奮闘したが遂に三等となつた。此の時山師の藤本君タイム二十三秒五分三を出したのは偉、次にトラックではローハードル、フィールドでは四盤投が始つた。田中君は美事なフォームで一等タイムは去年秋山君のレコードと同じ此處に於て大勢將に決せり。四盤の方では米廣君も宮本君も豫選ラインに至らず一時大に心配してゐた。トラックでは本大會最後を飾る八百米リレー決勝我校と山師山中鴻城だ、何れも黒白判別し難し。見よ松岡君のスタートの凄さを、彼は抜群で第一コーナーも取り約五米も離して吉屋君にバトンを渡す。吉屋君さきに百米の恥辱を雪がんと必死の健闘約七米の

差を以て田中君に渡す。君よく力走して距離十米も引き離した。遂にバトンば小林君に渡された。我等は雀躍りした。円盤の方では米廣君此の状勢を見て大に力づき是又最後の一擲に於て又もレコードを破り一等となる。宮本君もよく奮闘されたのでやつと安心した。ラストの小林君よく走り遂に榮ある響を負ふことが出来た。タイム一分三十八秒五分の二前年のレコードを破る。こゝ一秒五分の一なり。

思はず叫ぶ校歌の聲鴻城の地も揺がさんばかりなり。榮あるカップは我軍の手に期せり。我々の努力は報いられぬ。これ我々の一年の努力の賜にあらずして何ぞ!! 後輩諸兄よ之の榮譽を維持するは大なる責任といふべし此の熱意氣を以て運動方面にも勉強方面にも進まれんことを望む。最後に先輩諸兄等の熱誠なる援助を感謝し我々が衆人環視の中に我々の内容の充實味を充分表はし萩中精神を發揮し得たるをよろこぶ (斃止生記)

なほ次に出場選手姓名及び得点を記さん

稱目	姓名	得点	タイム
百 米	吉屋安雄	5	
二百 米	松岡 巖	3	
四百 米	小林祥介	5	五十六秒五分四
八百 米	河村一雄	7	二分十七秒
千五百 米	河村一雄	3	
一万 米	大谷仁三郎	7	二十七秒五分三
八百 米	吉屋安雄	10	一分三十八秒五分二
千六百 米	田中茂一	10	三分四十九秒五分三
走 高 跳	荒瀬國亮	7	
走 幅 跳	三男	7	十二米三四
砲 丸 投	米廣松王	7	

円盤投 米廣松王 7 三十米五四
宮本哲二
棒 高 跳 三好實 3
田原義雄
總點數七十五點

△山口縣教育會主催
体育大會

バスケットボール部

十月十五日午前九時希望に満てる、我が籠球部選手は諸先生及び全校生徒の盛大なる送別式に送られ一途鴻城の地に向つた。着山後先づ氣にかゝつたのはプログラムであつた。間もなく三浦先生から受けとつて見れば、これ真に青天の霹靂、實に偶然と言はんか、最初に強敵山口師範組んでゐた一度は愕然としたが、一同氣をとり直して十五日十六日とひたすら英氣を養つてゐた。

明れば十月十七日あだかも神嘗祭に當り天晴れ風や、強く我が選手は元氣に満ちて入場した。午前八時過ぎ先づ山中對長中戦を以て試合開始。これによつて大いに參考とする所が多かつた。特にそのルールの嚴し

いには一驚を喫した。いよ／＼午前九時は来た。我れは和田(センター)長瀬山田(フオーワード)坂村松浦(ガード)のメンバーで出場、果然戦端は開かれた。彼は老巧なチームワークをこつて頼はさんとし、我は敏捷に出で、譲らず兩軍接戦せしも彼にフリースロー多く、漸次壓迫せられたが長瀬君のフリースローで二點を得、士氣大いに上り奮闘に奮闘した然し遂にそのまゝ十八對二でハーフタイムとなる。こゝで亦メンバーを變へ、原田(センター)長瀬村木(フオーワード)坂村岩本(ガード)で出場し、恢復に努めたが、ならず五十對二で敗退した。

然しまた午後に残りの四チームで三四等を争ふことになつてゐるから、これを頼みにしてゐたが、事故の爲二チームを抽籤にて選定することとなり、不運にして、これに落ち亦挽回の機を失つた。最後に我等が山口師範にあれほどのスコアで大敗した理由は、勿論彼の實力の大には相違ないが(一)私の試合になれないの、(二)ルールの豫期に反して嚴しかつた爲平素の實力の意の加く發揮せられなかつたことに依るこ

さが大である。而してその直接原因と言へば、チームワークに於て劣つた爲であらうシユートに於ては決してひけを取らなかつたと思ふ。後輩諸君がこの點によく留意して我が籠球部の隆盛を期せられんことを祈つて閉筆致します。

左にプログラム優勝校及び我が出場選手氏名を掲ぐ。

山口中學校	優勝校	山口師範
長府中學校	二等	山口中學
安下庄中學校	三等	徳山中學
萩中學校		
山口師範		
徳山中學校		
萩中メンバー		
センター	和田(五)原田(四)	
フオーワード	長瀬(五)山田(四)	
ガード	村木(四)	
	坂村(五)岩本(五)	
	松浦(四)	

△山口縣水上競技大會記

山口縣教育會主催の水上競技大會の幕は九月十一日午前八時山口高女プールに於て

壯嚴な開會式を以て切つて落された。小波立つプールの表面には、潑刺たる若人の意氣が右往左往してゐる。真に息づまる様だ。

午前九時美事にスタートした百米第一線選によつて、遂にその意氣と意氣とは一度にかち合つた。

二着まで入選だ。切角の重鎮三島君は、本日コンディション悪く、ベストを盡したが残念ながら落選した。しかし君はまだ四年である。それに實力も十分ある。益々自愛練習せられて、来るべき年の此の日には、美人事スコアホルドを飾られること、信する。元氣だつた奥部君はターンで失敗した。中村君は二人の失敗を償ふべく、一大決心を持つてスタートした。果然大接戦は始まつた。第一ターンまでは皆殆んど同着。第二ターン。先登と殿との差一米。物凄く接戦だ。恐しいスピードだ。ラストターンの中村は三番だ。死物狂ひで泳ぐ。ラストへビー。中村の奮戦。力泳。グン／＼縮めて行く距離。後十米……差一米。後五米……差半米。吾等はたゞ夢中になつて手を振り足を叩いて叫ぶばかりだ。遂にゴールに

入った。悲しい哉。最後の一振が後れた爲に僅か二、三寸の差で三着。然しあれ程までに肉迫した中村君の功は稱すべく、前の失敗を踏ふには十分であつた。

四百米第一豫選。自信のある岩田君初めからトップで押し通し、ラストで柳中の勇松本にわづかゆづつて二着入選。三着との差二十米。あんな小さい體をして美事なフォームでスピードを出し頑張りの利く岩田君に觀衆も選手も驚歎の目を注いだ。何時の間にか大會の人氣者はなつてゐた。

若き二年の小選手長曾君は二百米には落選したけれ共未だ生れたばかりの萩中水泳部の將來は君等の如き眞面目な努力家によつて發育し活動するだらう。

次ぎが二百米リレー豫選。三着まで入選した百も二百も豫期した程振はなかつた。このリレーだけはごうしても頑張らなければ熱烈な後援をして下さつた諸先生や六百の兄弟に對して面目ない。強剛末武を失つたのはチームとして大打撃ではあつたが元氣な岩田君がすぐ後に四百米第二豫選及び決勝を控へながら悲壯な決心を以て立つた。スターターの四回の失策でさすがの奥

部君も少し疲れたが四着だ。岩田君後を續ぎ力泳に力泳を重ねてケン／＼迫る。彼は善く戦つた。三着だ。三島君はまだ體の具合が回復せず無我無中で泳いだか残念ながら四着だ。ラストは中村君がスタートした。三着との差二米。敵もラストを務める剛の者だ。中村は泳いだ。もう外の者は何も見ない。たゞ彼の足と我的手ばかり見ゆる。二十五米のターンまでは瞬く間だ。我的手は彼の足に迫つた。我的手は彼の肩に迫つた。もう一息だ。嗚呼然し万事は休した。

半米の差で落選した。たゞ選手は無言だつた。選手は皆ベストを盡したのだ。残る岩田君の四百米を、中村君のバックを勝つてくれと頼む。決つて勝つて岩田君は第二豫選のコールに應じた。軽く入選。スター

トの号砲は鳴つた。バックだ。中村君は二番目を美しいフォームで泳いでゐる。美事にターンした。驚くべし彼のスピード。ケン／＼と他を壓してリードした。中村アーツ、頑張れつゝ思はず叫んだ。だが練習の不足のためか(バックは去年からの猛者末武君かやるはづだつたのに不幸にも十日ばかり前より脚氣になつた爲、それより中

村君バックも兼ねる事になつたのだ)第三ターンより疲れたのは何と言つても残念。ラストも出た。しかし一米の差で三着になつた。

残るは四百米決勝のみ。二百米まで岩田君は四着と並行だ。三百米では四着との差五米。一番との差十米。後五十米岩田君は例の如くケン／＼と頑張る。始め頭を井べたがもうゴールだ。腕一つの差で五着。一着との差十米。得點二。

本日の岩田君の奮闘善戦は君の日常不屈の錬磨と絶えざる熱心とによつて得た努力の賜である。感謝すると共に、以後益々努力せられ萩中水泳部否山口縣水泳會に光りを與へられんことを希ふ。又中村君の奮闘も特大筆すべきである。

全大會を通じて選手一同は各々ベストを盡して萩中精神を發揮し得たことは愉快だ。終りに昨年の惨敗(昨年の出場選手は百米に……藤田、末武、池上。二百米に……横山、藤田。四百米に……横山、藤本、バックに……藤本。プレストに……末武、池上。リレーに……末武、藤本、横山、藤田)と今年の惜敗とについて思ふに、選

手一同の水に不慣れた爲又設備の不完全の爲に選手の練習が十分に出来なかつた爲でもあらう。又我が校の傳統的習慣でも言はれる引込思案的の練習でなく進んで自發的にやること云ふ事も亦大いに必要なことである。この期を逸せず後進の諸君は益々水泳部を盛んにせられ近き將來には萩中にもプールを持つ様に努力しやうではありませんか、諸君よ。

當日の本校出場選手

- 百 米……中村(五年) 三島(四年) 奥部(四年)
- 二百米……奥部(四年) 長曾(二年)
- 四百米……岩田(四年)……………得點二
- バック……中村(五年)
- リレー……奥部(四年) 岩田(四年) 三島(四年) 中村(五年)

當日参加校十一校中

- 一等……柳中……三十九點 二等……山師……三十五點 三等……商船……三十一點 七等……萩四……二點

本大會新記録

- 百米……一分十一秒四……山師(井上)
- 二百米……二分三十八秒……商船(大野)

- 四百米……六分〇秒八……柳中(松本)
- 二百米平泳……三分十五秒四……柳中(松本)
- 百米背泳……一分二十八秒六……安中(山本)
- 二百米リレー……二分八秒二……師範チーム(池上記)

武道部記事

寒稽古

一月十日より同十九日まで十日間、劍柔兩部、寒稽古を行ふ。
 一月二十日 寒稽古後武道大會舉行、寒稽古苦勤者及精勤者に賞状を授與す。
 五月十日 武道小會舉行。
 六月三十日 武道大會舉行。
 九月廿三日 武道小會舉行。

柔道部

京都青年演武大會

七月廿三日、汗ばんだ稽古着を手にして炎天の下に、燃ゆる思ひを包んで我々は遠く征途についた。
 七月廿五日、京都着後第一回の練習を武專道場に於て行ふ。萩中七百の健兒を代表して遠く京洛の地に來た我等の面は、希望

溢れ、心中に有るものは唯萩中のみ、唯實實義勇の貴き精神のみ。

七月廿八日、遂に覇を争ふ日は來た。我々は神を拜した。然し頼らなかつた。我々は信じた。自己の力を。そして尊き練習の自信に頼つた。朝まだき武徳殿内には若き血に燃ゆる幾百の壯士を見る、こが出來た。恰も武士道の權化そのもの、様。

以下試合の模様を述ぶると共に各人の成績を示さん。

個人試合之部

- 瀧口(本校) △小山(佐世保商業)
- ×伊藤(全) ×谷(鎮西中學)
- ×中村(全) ×田中(天王寺中學)
- 森福(全) ×福田(福岡隻流道場)
- 板垣(全) △泉(宮崎中學)
- ×田中(全) ×柏原(香川師範)

團體試合之部

- 第一回戦
- 本校 三重松坂商業
- 瀧口 △吉田
- △伊藤 △龍瀬
- ×中村 ×三阪

×森福 ×鎌田
 ×板垣 ×山本
 (附)第一回戦に於ける瀧口の奮闘
 振り眞に賞するに餘りありと
 認む。

第二回戦

本校 廣島一中

○瀧口 △田村

×伊藤 ×古田

○中村 △大石

×森神 ×五藤

○板垣 △谷田

第三回戦

本校 宮崎中學

×瀧口 ×中島

△伊藤 ○郡司

○中村 △大野

×森福 ×須本

○板垣 △山下

(附)宮崎中學は南九州に於ける勇。

先年我々之引分。

第四回戦

本校 富岡中學

△瀧口 ○田井

○田中 △後藤
 ○中村 △清野
 ×森福 ×澤田
 ×板垣 ×住友
 □五回戦
 本校 都島工業

此の度の参加校二百有餘。我が校此の間

に在つて意氣揚々、而もその中には謙讓懇懇の徳を守り精神的方面に於ても毫も他校に通色なく、最も眞誠に武士道の精華を發揮し得たに庶幾かつた。(NT生)

山口縣體育大會

秋冷の氣漲る十月十五日、我々選手一同は翌十日

×瀧口 ×川村
 △田中 ○時實
 ×中村 ×佐々木
 ×森福 ×山田
 ×板垣 ×松島
 (附)我々は此に於て遂に破れた。

六日、十七日の兩日に亘つて開催される縣體育大會に出場すべく山口に向つて出發した。當日は山本教頭より我々に對する懇切なる御訓辭あり、我々の胸中には一大抱負の念起らざるを得なかつた。嚴肅といふよりは寧ろ殺氣満ちた空氣に支配されてゐた。

劍道部

京都青年演武大會

第二十八回青年演武大會は例年の如く嚴肅に舉行された。七月廿五日には三級以上一級までの個人試合である。血に燃る一同は

我々には、日頃吟む校歌も特別に、云はば意氣なるものを鼓吹するかの感があつた。満堂湧くが様な拍手に包まれて征途に就いた時の心持、異様な程緊張してゐた。我々は唯涙ぐましい程嬉しかつたさのみ言ひ得るのである。斯くして我々は熱誠なる應援に依つて、遺憾なく自己の最善を盡して堂々との地に我が萩中の精神を吐露して、十七日夜なつかしい萩の英氣に迎へられて歸校することを得たのである。我々彼此に諸先生を始め、親愛なる諸子の御援助に報ゆるため、各人試合成績の概畧を示して御参者に供す。

年度	柔道部		劍道部		部員數	皆勤者數	百分比	精勤者數	百分比
	大正十四年	大正十五年	大正十四年	大正十五年					
増減	増	減	増	減	三二七	一八四	五六	二九	九
部員數	三二七	三二七	三二七	三二七	三二七	一八四	五六	二九	九
皆勤者數	一七	一七	二一〇	二一〇	一七	二一〇	六一	三〇	八、七
百分比	五	五	六一	六一	五	六一	六一	三〇	八、七
精勤者數	三	三	一	一	三	一	三	一	三
百分比	一、九	一、九	三	三	一、九	三	三	一、九	三

(R1生)
 防中 一〇點
 中中 七點
 中中 二五點
 中中 三點
 中中 三點
 中中 一三點
 中中 六點

鴻中 一〇點
 岩中 七點
 徳中 二五點
 長中 三點
 字工 一三點
 下中 六點

次に護部君五角の勝負す。楊井君よくのびて面にて榮を得、以上初陣の選手よく振ひたり。殆ど最後に内田君と我出場す、内田君よく闘ひしも相方技同じく引分なる。我運よく闘つて勝つ。二十五日宿に歸りて一同の意氣將に昇らんとする時内田君兄を

亡ひて故郷に歸る。選手一同一時力を落した。京都驛で代表として見送つた僕は淋しかった。明けて二十六日、こゝに萩中の意氣を見せん各々心に覺悟した。二十六日午

- 萩中(第一回) 香川商業
大村(小手) 沼野
石川 X 河原
乃美(面) 山下
山根(面) 鎌田
楊井 (面) 谷孝
本校(第二回) 三重中學
大村(朋) 内山
石川 (面) 山口
乃美 (面) 福山
山根(面) 東

楊井(面) 岡本
本校(第三回) 愛知一中
大村(小手) 藤井
石川 (小手) 村上
乃美 (小手) 河谷
山根(小手) 山東
楊井 (面) 岩田
自分は諸君に次の事を切望して止まない。

山口縣體育大會

天高く馬肥ゆる秋十月十六日十七日と山
中講堂に於て例年の山口縣下中等學校の劍
道大會開催さる。我が校からは選手五名に、
一名の補缺は他の選手と共に十五日午前九
時頃、拍手を受けつゝ山口に向へり。流石
に縣下の健兒我先にさ乗り込めり。その夜
は明日の試合を夢見つゝ。

ビネーション法にして、参加校二十校を東
西に分つ。我が校は西の部に入れり。激戦の
後、午後三時頃終りぬ。この日、鴻中、徳
中の強敵に當り敗れたり。明れば十七日午
前九時より演武開始さる。この日良成績に
して當る所敵なしの有様なり。此の五名の
中、鴻中、齊藤の二選手は四年以下なるを以て
將來有望なり。

- 鴻 高安宇 下 徳 萩 下 防 個人
中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中
大將内田 X X X X X X X X X X X X
副將大村 X X X X X X X X X X X X
溝部 Δ O O X X X X X X X X X
内藤 X O X X X X X X X X X
齊藤 X O O X X X X X X X X X

實に勝負は時の運なり。しかし或る程度迄
は平素の練習の工夫、試合数の必要は勿論
最後迄やり通す意氣の必要を感じり。
諸君來るべき秋には、より以上の努力を以
て我が校の爲め武道の精神を守つて奮闘せら
れん事を切望す。

辯論部記事

先帝崩御の哀悼、尙胸裏を去らざるに、
早くも、幸多き、光榮に輝く昭和の御代は
生れた。

この秋に當り寒風凛々、猶去らず飄々とし
て窓を敲く、一月十七日(月曜日)吾人が日
常最も必要とする辯論を、向上發展せしむ
べき辯論大會は開かれた。

辯論大會

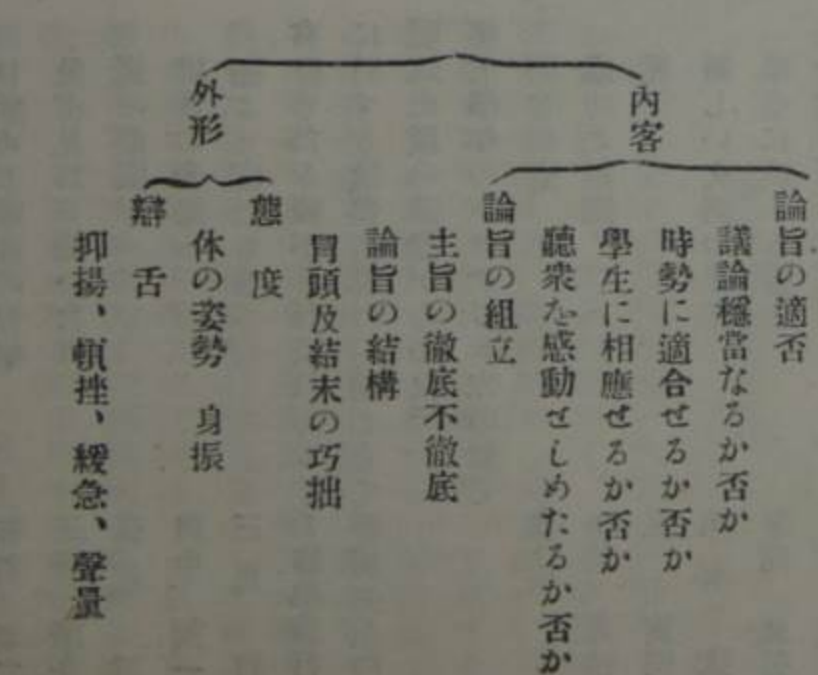
- 一、開會の辭
昭和新篇と青年の覺悟 赤木 弘
金錢の禍 野村 博
海を懷ふ 松井 茂
偉人的人格 三井 正治
健康と價値 末山 文彦
帝國の宗教戰 藤田 梓
我が國の發展は 四年生一同
大洋が大陸か(討論)
生存競争 井上 三郎
心の「ふるさと」 山村 治良

偉大なる信念 徳永 左一
努力と奮闘は青年の生命なり
小林 祥介
團圓に就いて 田原 省吾
英雄時を作るか 五年 生

皆に拍せられて 佐々木徳太
少き學生論 天野 俊雄
人種闘争は 森福 悟一
果して避くべからざるか
「スタート」に立ちて 黒磯 治夫
大和民族の平和的發展 荒口 直亮

星はさ、やく 岩武 照彦
黎明の鐘は響き 柳井 敬三
感激の燈は點す 藤田 修郎
黄禍再起に直面して 藤田 修郎
我國民族の覺悟 永松 三衛
パタの奥ひ 委員
閉會の辭 委員
(附記)
四年生討論は板垣君の議長のもこに開
かれ雙方劣らごも熱辯、又熱辯し材料
豊富にして滔々述べられたが大陸論
優勢となり遂に採配は後者に上つた。

五年生討論も勝敗いづれとも見かなかつた
が論士僅少なりにもかゝはらず、其く敵
を挫き沈黙せしめ遂に時英雄を作るとい
ふ論者が勝を占めた。
右辯論大會に對して生徒委員及職員の採點
の結果左の通り授賞する事にした。



昭和二年度辯論小會

昭和二年五月二日(月曜)各學年別に開く。
第三學年プログラム左の如し

- 現代青年の前途とその覺悟 高松 博
- 精神的鍛鍊 光井 泰城
- ネグリチツクの風俗 中村不二夫
- 故郷を愛せよ 松岡 巖
- 首なし英雄 田中 了範
- 世相雜感 長嶺 正衛
- 油谷灣に就て 村岡慶太郎
- 希望 赤木 正二
- 勤儉貯蓄の眞に觸れよ 徳永 左一
- 運命とは何か 末岡 英介
- 眞の勝利 田原 義雄
- 品性に就て 佐々木徳太
- 時間 岡崎 正夫
- 男らしいとは何か 宮本 哲治
- 辯舌の偉力 松井 茂
- 第二學年プログラム左の如し
- 開會の辭 末山 文彦
- 一寸の機寸 森澤 陽亮
- 大義名分を明かにす 高尾 豊彦
- 足るを知る 中野 伴作

競争と科學

- 消 化 平川 五致
- 釋迦と武夫婦 淺原 精次
- 學生と剛毅 山田 東行
- 友人鑿定の標準 田村 忠彦
- 心中の賊 香月 斌
- A君とB君 河武 治雄
- 我等の希望 藤井 清規
- 太陽 福永 虎雄
- ヒラミット 秋田 秀穂
- 人生の幸福 藤田 完
- グロウジ、スチイブンソンの生立 鈴木 義郎
- 萩 町 井町 秀介
- 閉會の辭 吉原 重恭
- 第一學年演題 野村 博
- 努力 山田 東行
- 乃木大将 河野 希一
- 或る王様の話 中村 松次
- 人眞似をするな 山崎 正義
- 改心するまで 山中 正一
- 五月三日、第四、五學年の小會を開く。 松尾 亨
- 第四學年のプログラムは左の如し

目醒めよ昭和の青年

- 目醒めよ昭和の青年 新谷 要二
- 吳市見たり聞いたり 三好 謙介
- 鴈の洗濯 弘永 正
- 排日の光榮 田中 茂一
- 棚よりぼたもち 三島 將
- 右終りたる後不日行はれんことを修學旅行に對する豫備指導の一端として香川先生の肥筑史蹟の講話があつた。
- 第五學年のプログラム左の如し
- 開會の辭 藤田 英治
- 成功と奮闘 田村 英治
- 死 弘 實明
- 新しい文明の憧憬 赤木 弘
- 學生に與ふる警告 峯岡 良文
- 受験に際して 三井 正治
- 國體の精華 水野 一郎
- 自治の民は須く衆生の思を銘記すべし 坂村 光義
- 日本帝國の理想は昭和にあり 三浦 彦八
- 紫雲たなびく時 藤田 梓
- (三島將記)

書道部記事

九月十一日、例年の如く二年生及び五年生の保證人會を機として、生徒成績品展覽會は舉行された。我が書道部は、第四學年二三組兩教室を以て陳列場に充て、午前八時より午後四時まで一般の觀覽に供した。數日間降續いた雨も、朝來からりみ晴れ互つて氣持よく、且、日曜日ではあるし、大人も子供も次第に集り來り、感心したり、批評したりして居た。午后に至り、一層觀覽者は増加し、下駄、靴の音で、他の何の音は聞けない位に至つた。抑、今回の陳列品は、昨年十一月以降今日に至るまでの間に教師監督の下に書いたものの中より、往其の者を選抜したもので、これを二等三等三等等外の四階級に分つて居る。今一等賞を得た者を左に掲げる。

- 田中了範君(現在三年生) 中野公次郎君
 - (二年生) 岡本正雄君(二年生) 中村善一君(一年生)
- 又其の他に、参考品としての池上君、瀧口君、山根君、桂君の書には、何人も感歎せざるを得んであつたらう。尙特別大書すべ

書道部記事

九月十一日我部生徒成績品展覽會を開催した。この日連日の降雨漸く晴れ且日曜日なりしを以て例年になき觀覽人であつた。我が書道部は第五學年二三組の二教室を陳列場に充て一室を我部生徒の學校に於ける作品、一室を夏期休業に於ける自由作品なほこれに萩附近小學校生徒の作品を加へて陳列した。我部諸君の努力の跡はよく畫上に表はれ年を追ふて盛になり行く。これを見て我等は非常に喜びをもつものである。しかし尙努力の餘地はある様に思はれる。

(鈴木義郎記す)

地歴部記事

例年の如く我部展覽會は九月十一日を卜し催されたり。出品點數多く、入賞者僅に百八十九名も算し遙に例年を凌駕せり。三伏の夏休中を有効に過し得た事を立證する物にして誠に慶賀すべき事なり。優秀品も多く春蘭秋蘭何れも決し難し。就中四年生田中君の越ヶ濱殊に明神池に關する精巧微細なる模型、鳥瞰圖は觀覽者をして何れも感歎の辭を發し稱讃せしめたり。其他教練部共同製作の模型も我部陳列品中異彩を放てり。又三年生諸君の東洋史に關する詳細なる研究論文は例年に異なる出品なるべ

きは、昨年より小學校の成績品を募集することに於て居たが、昨年以上に多數出來榮の見るべきものを得た。殊に、明倫校三年生の瀧口君の書には天才的な美があり、大に觀覽者の眼を引き、豫期以上の効果を收めることが出來た。今左に出品校の名を掲げて感謝の意を表はす。

- 明倫 椿東 越ヶ濱 椿西 白水
- 最後に、益此の部の進歩する様、一層諸君の努力せられんことを望んで筆を擱く。

小學校生徒の純眞な作品は我等の興味をひく所大であつた。出品學校及び生徒諸君に誌上乍ら感謝の意を表す。

部長田總先生の最近の快作五點及び参考品を出品せられたるは我部に錦上添花をそへたる形にて先生の勞に對して部員一同の感謝するところである。かくて午後四時盛會裡に閉會した。今後益々諸君の努力によつて我部書道部の隆盛に赴かんことを希望して此稿を終る。(河村忠雄)

し。尙本年も外國に關する作多からざりしは遺憾なり。將來此方面の製作に注視せられん事を希望す。又小學校の出品も僅に明倫校の數點越ヶ濱の一點のみなりし事は豫期に反せり。

入賞者百八十九點中、一等賞五點、二等賞九十一點、三等賞九十三點なり。終りに將來我が部の益々發展せんことを望みて止まざるなり。(三浦生記)

理科記事

昭和二年度展覽會は九月十一日を以て開催されたり。此の日底の抜けたる如き青空はよく多數の觀覽者を誘ひて其の數昨年を凌駕せるの盛況を収め得たり。會場の内譯は生徒製作品陳列、談話高聲器の放送、キノオラマ、土壤検査、博物標本陳列の五口たり、以下その内容の特筆すべきものを記述せん。

生徒製作品陳列會場は例年の如く理化學實驗室なりき。今年は例年と其の趣多少異なり、平素理化學の授業を受けざる二年生諸君の製作品をも陳列されたり。就中野村君の自動點滅器は賞讃に値せりシュニャー

連の斯の如く理化學に興味を有し斯の如き精巧なるものを製作し得るものなるかを眼のあたり見たる時理化學界の前途たるや光明ありの感あらじめたりき。なほ新谷君外三名の大飛行船模型もよく衆目を集め得たりと見ゆ。外に嶄新なる試として特筆すべきは村岡先生の植物標本色保存法の實驗なりき。

次に談話高聲器の放送なるが三好山根諸君の放送せるハーモニカの微妙なるジャズバンドのリズムが聴衆をして暫時樂の音の恍惚境に彷徨せしめたるあたり確かに談話高聲器の文明の利器たるを失はざりき。

キノオラマも昨年の如き風景のみにて衆目を魅惑せんとする單調さを打破し、よく光の反射さ、銀紙を利用し物理學實驗上の濫をして現實の瀧の美觀を後へに嚙若たらしめたる、四年級諸君の苦心の水泡に歸せざるものありき。

土壤検査は四年級の擔當にして萩町各地の土壤を持來りその良否を検したる確かに有意義の企なりき。博物標本陳列は主として一二年級の植物昆虫の標本にして例年のものと大差なく特

筆すべきものなかりき。末筆ながら展覽會の趣向なり。製作品の配置等に就き諸君の満足を得る能はざりしに對し我等委員その不敏を詫びて闢筆するものなり。

大正十五年 度校 友會費 收支決算報告

經常部

一金參千拾貳圓五拾錢也 總收入高

內 譯

金貳百拾圓拾九錢也 前年度繰越金

金四百四拾八圓貳拾七錢也 雜收入

(基金利子繰入及寄附金等)

金貳百拾七圓拾四錢也 職員會費

金貳千百參拾六圓九拾錢也 生徒會費

一金參千拾貳圓五拾錢也 總支出高

內 譯

金貳百四拾六圓六拾錢也 劍道部

金貳百參拾八圓參拾錢也 柔道部

金參圓參拾五錢也 庭球部

金拾六圓九拾錢也 野球部

金參拾六圓六拾六錢也 游泳部

金貳百貳拾貳圓六拾四錢也 雜誌部

金四拾錢也

金壹圓七拾錢也

金壹圓也

金九百拾圓拾八錢也

金貳百貳拾九圓四拾五錢也

金五拾圓拾五錢也

金七百六拾圓五拾七錢也

金參百圓也

金百九拾四圓六拾錢也

以上

基金之部

一金壹萬八百拾參圓貳拾六錢也 總收入高

內 譯

金九千九百八拾參圓貳拾參錢也

金五百六拾圓參錢也 前年度繰越金

金百七拾圓也 證券及預金利子

金壹百圓也 寄附金

一金壹萬八百拾參圓貳拾六錢也 支出總高

內 譯

金參百四圓六拾六錢也 經常費へ繰入

金壹百圓也 數學科備品購入費へ流用

金壹萬四百八圓六拾錢也 翌年度へ繰越

以上

冬の句 蕪村

初しぐれ眉に烏帽子の雫哉
木枯や鐘に小石を吹きあてる
宿貸せど刀投げ出す吹雪哉
氷る燈の油うかがふ鼠かな
寒月や門なき寺の天高し
うぐひすの啼くや師走の羅生門

附録第一
同窓會誌

各種レコード表

種 目	世界レコード	日本レコード	全國中等學校レコード	本縣中等學校本年レコード	本校レコード
100米	10秒 $\frac{2}{5}$ バドツク(米)	10秒7 (相澤)	11秒 (高木)	11秒 $\frac{1}{5}$ (山師藤本)	11秒 $\frac{1}{5}$ (松岡)
200米	21秒 $\frac{1}{5}$ バドツク(米)	22秒 (竹内)	22秒 $\frac{9}{10}$ (上田)	23秒 $\frac{3}{5}$ (山師藤本)	25秒 (益田)
400米	47秒 $\frac{2}{5}$ メレテイス(米)	50秒 $\frac{3}{5}$ 納戸	54秒 (松居)	56秒 $\frac{4}{5}$ (萩中小林)	57秒 $\frac{1}{5}$ (能美)
800米	1分51秒 $\frac{3}{5}$ メレテイス(米)	1分58秒 $\frac{2}{5}$ (柔田)	2分8秒 (堀)	2分17秒 (萩中來島)	2分20秒 (來島)
1500米	3分52秒 $\frac{3}{5}$ ヌルミ(芬)	4分7秒 $\frac{4}{5}$ 繩田	4分27秒 $\frac{4}{5}$ (三輪)	4分45秒 (萩商植村)	4分44秒 $\frac{3}{5}$ (中村四)
5000米	14分28秒 $\frac{1}{5}$ ヌルミ(芬)	15分34秒 $\frac{4}{5}$ (永田)	17分24秒 $\frac{2}{5}$ (兵頭)	—	17分18秒 $\frac{7}{10}$ (大谷)
10000米	30分6秒 $\frac{1}{5}$ ヌルミ(芬)	32分11秒 $\frac{4}{5}$ (永田)	35分51秒 (宮本)	37分47秒 $\frac{3}{5}$ (萩商植村)	39分50秒 (大谷)
ローハードル	23秒 ブルツキンス(米)	24秒3 福井	26秒 $\frac{3}{10}$ (武田)	27秒 $\frac{2}{5}$ (萩中田中)	28秒 (金森)
800米 リレー	1分27秒 (米國チーム)	1分30秒 (日本チーム)	1分38秒 (同志社 チーム)	1分38秒 $\frac{2}{5}$ (萩中チーム)	1分39秒 $\frac{3}{5}$ (ベストチーム)
1600米 リレー	—	—	—	3分49秒 $\frac{4}{5}$ (萩中チーム)	—
走巾跳	7m.89 ハツパート(米)	7m24 (織田)	6m597 (翠)	6m15 (山中岩城)	6m25 (山村)
走高跳	2m3 オスポーン(米)	1m90 (織田)	1m85 (木村)	1m68 (山中西村)	1m67 (山田哲)
ホスジャンプ	15m525 ウインータ(濠)	15m353 (織田)	13m56 (翠)	12m46 (山中小野)	12m70 (山村)
棒高跳	4m252 ホツフ(諾)	3m80 (森岡)	3m56 (洲脇)	3m50 (萩商西村)	3m30 (米廣)
圓盤投	47m89 ハーランフト(米)	40m94 (沖田)	32m66 (曹谷)	30m54 (萩中米廣)	30m40 (米廣)
砲丸投	16ポンド 15 ロース(米)	—	12ポンド 12m94 (安田)	12m35 (萩中米廣)	12m30 (米廣)



附録 (第一)

同窓會誌 (自大正十五年十一月至昭和二年十月)

◆三月三日、第二十七回卒業式の際、五席以上の左の卒業生に、書籍券を贈る。

永富五郎、伊藤滿、新山半次郎、久保一郎、森屋龜藏。
式後、寄宿舎談話室に於て、新入會員の歓迎會を開く。出席者左の如し。

新入會員百四名

來賓として、岩田會長、山本光、金子、村岡、諸教諭。

引受側、和田、長井、田坂、河村、吉岡、伊藤、竹内、前原、山本百、河野、下間等の舊會員。

◆三月六日、新幹事、事務引續のため、評議員會開催。出席者、和田滂、長井寛治、齋藤壽福、石原忠亮、河村義雄、竹内八郎、厚東健次郎、山本百合熊、河野通毅、下間教修。

◆四月八日、始業式に際し、昨年度の優等進級者に、奨學賞(雜記帳三冊宛)を贈る。受賞者左の如し。

第四學年、柴田敏夫、赤木弘、兒玉玄太、水野一郎、吉津丈夫
第三學年、岩武照彦、林吉郎、五島直人、松浦藤三郎、岩田忠夫

第二學年、村岡慶太郎、赤木正二、岡崎正夫、豐田正之、光井泰城。

第一學年、井町秀介、淺原精次、山田東行、福永虎雄、井上三郎。

◆七月二十三日、評議員會を開き、本年度定期大會開催の方法を議す。出席者、河村、石原、齋藤、和田、竹内、下間、諸氏。
本年は、有志の寄附を募り、會費をなるべく安くして、出來得る限り多くの出席者を得る爲め、評議員は、會員に、直接面談して出席をすゝめることに決す。

◆七月二十五日、和田、河村、下間、竹内、四氏寄附募集のため會員有志を訪問。

◆八月三日、和田、河村、竹内三氏、玉木病院に集會、大會につき打合。

◆八月六日、和田、竹内、河村、下間四氏玉木病院に集り、大會準備。

◆八月八日、午後八時より、定期大會を、唐樋町、高大亭に開く出席者、八十五名。會費金壹圓、次第左の如し。

- 一、和田幹事の開會の辭
- 一、下間幹事の會計、庶務報告
- 一、岩田會長の挨拶
- 一、配膳、食事
- 一、會長より補欠役員指名
- 一、會員の卓上演説
- 一、餘興(手踊)

一、和田幹事の閉會の辭、時に十時五十分。當日の寄附左の如し。

一金拾圓 岩田會長。金拾五圓 菊屋孫輔氏。金拾圓 厚東太郎氏。金拾圓 野村正一氏。金拾圓 末岡周介氏。金拾圓 増野純亮氏。金五圓 増山三期氏。金四圓 篠田直武氏。金五圓 河野通毅氏。

當日 評議員中津江氏は病氣、吉武氏は平素、萩に在住なきため、兩氏に代りて、補任されたるは、行本益三氏、山縣正一氏。

◆八月九日午後下間幹事の宅に、和田、河村、竹内、伊藤、下間五氏集合。大會の始末打合。

◆九月十二日夜、下間幹事の宅に、同窓會員有志集合、母校の不祥事件に對する態度につき談合。

◆九月十三日夜、下間幹事の宅に、評議員會を開き、岩田校長辭表提出其の他に對する態度等につき協議す。出席者 厚東前幹事、和田、伊藤、行本、齋藤、長井、下間諸氏。

◆九月十六日、菊屋、末岡、和田、三氏會を代表し、瀧口、小林二氏介添役となり、縣廳に出頭、岩田校長辭職の件につき陳情。

訃報 (自大正十五年十一月至昭和二年十月)

◆十一月八日、福江繁人君(二十一回卒)病死。吊辭を送る。

◆十一月二十八日、信國久堅君(十一回卒)病死。下間幹事會葬。

◆十二月十三日、増野純亮君(五回卒)令息死去。河野前幹事吊辭。

◆十二月二十日、津森象一君(十七回卒)死去。河野前幹事吊辭。

◆十二月二十五日、林安幸君(二十回卒)病死。

◆一月五日、兼重政輔君(十四回卒)病死。

◆二月四日、福田信彦君(四回卒)病死。

◆六月十九日、岡村喜興君(一回卒)死去。吊辭を送る。

◆七月十一日、松永隆亮君(十二回卒)病死。吊辭を送る。

◆七月十九日、山本馨君(二十五回卒)病死。河野前幹事吊辭。

◆十二月二十九日、厚東重雄君(二十六回卒)病死。河野前幹事會葬。

◆十月三十日、中津江延彦君(十七回卒)にして特別會員)病死。其の旨、新聞に廣告し、告別式に際し、玉串料を贈る。

附錄第二

吉田松陰

特別會員 安藤紀一



附 録 (第二)

吉 田 松 陰

特別會員 安 藤 紀 一

松 陰 の 自 信

吉田松陰は、通稱を寅次郎といひ、天保元年寅の歳八月の四日に、長門國萩の松本の杉百合之助と云ふ藩士の次男として生れた。其誕生地は、東光寺山の麓で、團子岩といふ所である。松陰は、六歳の時、親戚の吉田家の養子となり、其家が、先祖代々、山鹿流の兵學師であるから、松陰は、家業を繼いだ。さて、松陰の一生は、實に、自信で貫いてゐる一生である。十一歳の時、始めて藩主毛利敬親公に召されたが、是時は、藩の文武者師家を皆召出された際で、松陰も幼少であるが、師家の本人であるから、一人前の兵學師として召出されたのである。講義をした場處は、城中對面之間

で、上席に、君公が居られ、一門の人家老の面々を始めとし、色々の役人が、次々に控へて居る。召出された文武者師は、代る代る進んで、其道々の書に就いて講釋をする。御上様が聽かれるのであるから、之を上聽と云ふ。松陰は、其日は、叔父玉木文之進の決めて置いた講案を携へて、吉田家先代の高弟である石津平七といふ人が附添となつて罷り出る。講章は、山鹿素行の著した武教全書の中の戦法篇の三戰の條であつた。先づ味方の備を遺漏なくよくして動かす、敵の起り立つを見て、圖をはづさす之を討つ、是が先をさる戰、敵の備が強固であれば、わが先手の一備にて勝たねば、敵の勝て疲れたる所を、わが二番備で勝ち、或は第三の備で勝つ。是が後の勝の戰。正兵で、敵と眞向に合戦して、奇兵で、右の戰の最中に、敵の思ひがけざる所へ、俄に横合より討て勝を取る。是が横を用ゐる戰。この三戰の事を、孫子の言に、證を取つて、言語滞りなく、君前で講説をしたから、幼少にも似合はず老熟した所作に藩主は大に感賞せられて、彼の平生の訓育は、誰

の手でするかなどと、近侍の臣に尋ねられ、玉木文之進でありますと、近侍の臣は答へたのである。その答の通り、松陰の幼時に、養父の大助は早く死んだので、大助の弟にあたり、また吉田家の門人でもある玉木文之進が、松陰を教授し訓練して居る。考へて見るに、貴人の前で、別けて多数の列席者ある處で、講義をする事は、氣後れを爲し易い、幼少未熟の人は猶更である。それを、何の臆面もなく、言に淀みなく、其席の役儀を立派に仕遂げることの出来るのは、つまり、其心に講章の意味道理がよく分つて居て、誰が何といつても、是の道理でいかねばならぬといふ自信があるからである、講章の意味道理が分つて居らぬときは、如何に、講章が、くくめる様に書いてあつても、徹底した講義、人を感せしめる説明は出来ない。この徹底した講義が出来るだけの自信があれば、その自信より出る勇氣といふものが、誠に強くて固くて、王公も貴しとするに足らず、千萬人と雖も吾往かむの境界に立つことが出来るのである。松陰の、君前に立派な講義をしたのは、全

く、この自信から、出た勇氣の所爲である。さて、この自信の本となる、講章の意味道理の明瞭といふ事は、一朝一夕の讀下しでは出来るものではない。此兵法書ばかりでなく、何の書でも、また何事でも、讀み取り聞き取つただけでは、決して、吾が物にならぬ。必ず、一章一篇を幾度も繰返して考へて見、疑つて見、どうしても分らねば人にも問ひ、その答に就いて再三推問論難までもして、更に、吾が身が、實地に、其事に觸接試験して、始めて、その篇章に言うてある事が間違なき道理であると信することになる。研究も、是まにならば、他人の書いた書物でも、他人の書いたとは思はれないで、さながら自分が、自信の條項を描出したものの様に思ふ、師匠の説明を聞いても、再三之を精思研究して、それに信服する境界になつた時は、其學理學説は吾が物である。吾が物となつて、何人も之を否定することは出来ぬと、思ふに至つて、即ち自信となる。かう考へると、當時、長州藩の士が、威嚴並びなきものとして恐れて居る大守の前で、臆面なく講義をした吉

田松陰の平生の學問勉強の様子が推量せられる。松陰が、外國の事情を知つたのは、十五歳の時、吉田家先代の門人で、松陰の師事する山田宇右衛門といふ藩士が、江戸から歸つて、萬國の形勢を説き聞かせ、其翌年、松陰が、長沼流兵學者山田亦介といふ藩士に始めて遇つた時、亦介が松陰の人柄を一見して、外國に對する日本人の心得を言聞かせた、それを聞いたのが、外事知識を得た始であるやうに、年譜に見えて居る。前の山田の話の内容は、今わからないが、——後の山田の話は、かうである。近時歐羅巴諸國の勢が、日に盛で、追々東方の國を蠶食するが、印度が先づ害を受け、次に支那に及び、さうして琉球を希望し、遂に我が長崎に突來した。そこで天下の人士は、心を痛めて防禦を急務としてゐるが、彼等も遙々やつて來る位の雄略を以てゐるから、來る人の内には、偉い人が居るに違ひない。それらの人の大英略の前には、此方に何の備をする暇もない。かも知れぬ。それ故、區々たる防禦の計は、万全の事ではない。元來、日本は、萬國の上位に立つ國

柄でありながら、武威を外に輝かした人は古來、僅々である。彼の歐羅巴人がするやうに、日本人これからは、國威の實を外に示すことが一層必要である。御身も、年は若く、才は足つてゐるから防禦の事に局促せず、進んで、功を海外に立てるでなければ、大丈夫ではないぞ。これが、山田亦介の話の大意である。此話が、松陰の爲に、警戒の鞭となつて、頭に深い印象を受け、外國に對抗するには、内は、國人の心を一點に統べ、外は、萬國の實況を知るに在る。人心を統一するは、尊王愛國によるべく、萬國の實況を知るは、自ら海外に旅行するにあるといふ考が、爾後年々歳々學問を積み、交際を重ねるにつれて、強固なる自信となり、この尊王愛國と海外旅行との二つの自信が、種々の場合に、或る形となつて、松陰の一生を作るのである。

松陰の一生の間に、その強き自信の著しく現れたのは、下田にて米艦に赴いた事、松下村塾を開いた事であつて、前者は、海外旅行の自信、後者は、尊王愛國を主眼とした自信の發露である。

前に、自信といふものが勇氣を出すことを述べたが、松陰の自信は、毎事強固である故、その勇氣は、勿論何物をも恐れぬ。海外事情視察が、時の急務であると信じた以上、海外旅行を禁せられて居ることを知つても、事露はれたら法網に觸れるといふことを知つても、更に頓着なく、實行せんとする。危ぶんで止める人があれば、大丈夫意を決して之を爲さむとすれば、富士山崩るども、刀根川涸るども、この志は、誰か動し得むやと言うて、動かぬ。さて、前に述べた、君前の講釋をする時の松陰の自信は、その所爲の結果に就いて何等の不安を豫想せず、安心して自信のまゝを行つたが、此下田の一件は、運がよければ、米艦に乗て外國に行かれるが、事が漏れると罪せられるといふ不安を合點しながら、その自信を遂行する、是は何故であるか。唯、外事日に急なる今日國家の爲に、海外の事情を知ることには、一刻も早く着手せねばならぬといふ義理があるので、萬一幸に、望が達せられるなら、此機逸すべからず、不幸にして行はれず、一跌して、罪囚となるなら

それでよしといふ諦めから、かゝる冒險を企て、夜密に下田の近傍より船を出し、彼の艦に、乗り着いたのである。然る處松陰は、不幸にも、艦將の拒絶に遇うて還つて自首して縛に就き、江戸に引かれて行く途中、高輪泉岳寺の前を過ぎて、赤穂義士の事を、吾身に引き比べて「かくすればかくなるもの」と知りながら已むに已まれぬ大和魂」と咏じて、さて幕廷の處分により實父杉百合之助へ引渡され蟄居の身となり、其上にて實父より藩の獄舎を借り之に入れるといふ名義で、萩に護送せられ、家に歸らず、直に野山獄へ入る事になつた。覺悟とは云つても容易ならぬ大災難。併し、こんな災難を甘んずる心でなければ、かゝる冒險は出来ない。更に述べると、止むに止まれぬ義理合の爲には、不利益の結果になつても構はぬといふ主義。是が所謂鞠躬盡瘁して死して後に已む成敗利鈍に至つては豫め見る所にあらずといふにも當る。此二語は、松陰が信條として守る所で、其著の講孟割記の開巻にも書いて居る。さて、松陰は、右の蹉跌の後も、その自信は、少しも變らず

獄中にて、回顧録を著して、下田一件を詳録し、幽囚録をも著して、海外出航の已むべからざる所以を明記し置くなど、罪囚の身でも、將來の年月を頼みにして、獄中での讀書、作文、習字、外人との手紙の往復などで、自己の修養に怠りがなかつた。近ごろ、萩の前原一誠の遺族の家にて、珍しく發現された、松陰自筆の讀書日記といふ帳を見ると、安政元年十月二十四日より、同二年十二月十五日まで、在獄四百〇三日間に讀んだ書が六百十八冊で、二年の正月から五月までの間には、特に、殆ど毎日習字を、少きは二十字宛多きは七十字宛も習つて居る。猶、文章に於ても、その自信の強く見ゆる文があつて、二十一回猛士説の如きは、吉田の二字の畫を分けて組みかへると、二十一回の語となり、寅の歳の生れで、虎の徳の猛氣を師として、今までと同様に、將來も、猛氣を二十一回までも用ゐねばならぬといふ意を夢に託して書いて居る。かくて自信を健全に持ち續けて安政三年より新になつた境遇が、即ち、松下村塾の教育事業である。これに就ては、別に稿を改め

て、「松下村塾と松陰」の題號の下に、詳細説明して置いたから、重ねてここには述べない。これから、松陰の自信に就いて、更に一步を進めて説明しよう。

前にいつた、一跌罪囚になつたら、それでよしといふ松陰の諦め、是が、猶、討究を要する點である。罪囚となつて入獄ぐらゐは、まだ生命があるから、前途が待たれるが、役人の吟味一つで殺されるかも知れぬ。それでもよしと諦めることは、その事が成就しないので、世は何とも仕様がなくなると諦めるのか。即ち萬事休すと諦めるのか。松陰の諦めはそれとは違ふ。松陰は其自信を死ぬるまで行ふが、事の成らぬ先に生命が盡きたら、未了の業は同志の後繼者が必成就させてくれると固く信ずるからである。そこで、心力の限りを盡して、英材を教育し、後繼者たる様に作つて置くといふ事が、有意義となる。「松本は片田舎であつても、此塾から、必ず、御國の柱となる人が出る」といふ語は、弟子達を奨勵する語であるばかりでなく、それが既に松陰の自信である。元來、松陰

は、かう信じて居る。天地の間にある正理は一つで、世界の人の同じく受取つて、各自の心として居るもの。この理は、代々人が受継いで、いつまでも存し、決して、肉體と同様に腐滅するものではない。故に、甲の人が、正理を守つて斃れたら、乙が、その正理を受継いで、甲の仕事を行ふ、乙が仕上げねば、丙が受継ぐ、甲乙丙三人は變つても、正理に變りはない。それで甲が三遍も生れ出るやうなもの、楠氏が七たび生れ出るやうなものも、其意である。云ふ説である。七生説といふ文がそれである。故子爵品川彌二郎氏は、「先生の七生説は、先生の哲學である」と云はれた。松陰には、かゝる簡明なる哲學の信があるから、尊王愛國も海外航行も、生命のあらん限り、自信を行ひ、一生の間に實現する事が出来ないにしても生きて居る間に一歩でも半歩でも、目的に近寄る仕事を置いて、後継者を待つ。この諦めで、決して死を恐れぬ。死を恐れぬとても、後継者を思ふから、それに繼がせる爲には、生命のあらん限り、心を盡すから死を急ぐこともない。そこで、安政五

吾魂を留めたいと云ふは、即ち忠魂義魄を充たせしめたいとの希望。悉く是れ七生説から出た自信である。

松陰の自信を、その事蹟に證して、長々と述べて来たから、爰にその要領を言うて是篇を收結する。即ち、松陰の自信は、明かなる道理の前には何人も服するといふ自信、國家の爲にする仕業は、必ず同情者があるといふ自信、正しき道理は何時までも滅びぬといふ自信であつて、その自信は、普通人の何の根柢もない一時發作の執拗性のものでなくして、素養の厚い根柢の深い、公明正大の自信である。

松下村塾と松陰

山口縣萩町椿東の縣社松陰神社境内の一舎、八疊の間と十疊半の間とに分れて、土間一坪ある處、これが、安政三年より五年まで、吉田松陰の子弟を訓育した松下村塾の屋舎で、當時の教育事實を物語る好資料である。室内に残る當時の物としては、幾何もないが、室其物の使用の次第、増築の事が、

年五月に幕府へ引かれて江戸に赴く時、門人の入江九一が、決死の御覺悟で、御出でなさいと云うたら、松陰は、いやまだ死ぬる時でない。至誠で以て、論すべきことを論じて見よう。至誠でならば、幕府にも必ず感ずるであらうというて、孟子の至誠而不動者未之有也。の語を、手巾に縫ひ附け携へて往つたといふことである。處が、松陰の運命遂に窮つて、死地に置かるべきことが分つて、始て最後の諦めを以て、國の父兄に訣れる書狀を書認めて、其中に「夷狄は縦横自在に御府内を致跋扈候へども神國未だ地に墜不申上に聖天子あり。下に忠魂義魄充々致候へば天下之事も餘り御力落無之候様奉願候」と書いてある。さうして己の所見は前々から、獄中で書いて、在江戸の門人ごもに言ひ遺して、更に、思附きたる事を、獄中で書集め、死刑の前日の黄昏まで書き續けて、さてその初頭に書いた歌が即ち「身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」といふのである。此歌此書狀の詞を讀むと、忠魂義魄の充ち居るのは、即ち吾の魂の永く留まるべし豫告、

己に史實を有する上に、それより説き出すべき事が多いので、何から述べようかと思ひ惑ふ程であるが、今は、繁を避けて要を摘み、松陰の教育の一斑と認められる所を述べて見よう。

松陰の叔父に、玉木文之進正韜は松陰の實父杉百合之介常徳の末弟である。松陰は、父百合之助の次弟大介賢良が吉田家を繼いで、子なきゆゑ、其養子となつて、吉田氏を繼ぎ、幼名虎之助を大次郎と改め、さて實名を矩方、字を義卿といひ、居處が松本といふので、松陰と號したのである。さて松下村塾の名は、右の玉木文之進が子弟を集めて教授する時に、其家塾に附けた名で、當時は松陰も、其塾に學んだ譯である。其後、玉木が官途に就いてからは、其塾は久しく廢せられてゐたが、松陰の養母が表向き實家として居る久保氏が手習場を創めて、之に彼の塾名を用ゐた。こゝには、彼の伊藤博文なども、その弟子であつたといふ事である。さて、松陰は、幼時より、家業の兵學は勿論、皇學漢學にも涉り、更に他流の兵學をも究め、唯實用を主として研究を弘め、先輩の人

々より、西洋諸國の事情を聴いて、尊王愛國の志を起し、航海遠畧の必要を感じて、二十歳までの在國修學時代より、旅行時代に移り、九州を始め、京江戸其他の諸國を遊歴して、名士に接し、民情政化を察し、遂に、伊豆の下田に於て米船に乗らうとして事敗れ、幕府の譴に遭つて、國に歸り、萩の野山獄に在ること四百三日、安政二年十二月に、獄を免せられて、杉氏に禁錮となつた。それで、世人に接することは許されなかつた。時代の習俗に似合はぬ程、見聞を廣め、逆境をも踏んだ松陰であるから、内々尋ねて來て教を求めめる者が、次第に多くなつた。幸に、久保氏の松下村塾が、近處であるから、そこで、力を合せて教授することにし、杉氏の隣の瀬能氏の舊宅の残りの八疊の間を用ひて、やはり久保氏の一部として、松下村塾といふことになり、そこで、松陰の松下村塾事業が始まり、即ち、松陰の教育が、緒を聞いたのである。

松陰の教育を語るには、松陰の思想を知らねばならぬ。依て、先づ爰に松陰の思想の要領を述べよう。

第一 實用を主として學を講ず

第二 抱負を大にして心を盡す

第三 運命に安んじて物に接す

第一實用の學は、道義上にては、我が國體を知りて、忠孝を盡すこと、技藝上にては、一流に拘せずして諸家を折衷し、内外の術を究めて、其長所を採る。

第二の大抱負は、尊王、攘夷、愛民の三つで、尊王は人材を教育し幕府を討滅して其實功が擧り、攘夷は、海外を視察し遠畧を行ひ國威を輝して、其實功が立ち、愛民は、尊攘の事成りて後、民力を養ふ事。

第三運命に安んずることは、肉體は死しても、正義は滅せざるを知るによつて成り立つ。運命に安んずれば、其義を正しうして其利を謀らず、其道を明にして其功を謀らざる境界に到達する。

松陰の右の思想は、其遺著を見れば、一一證左が得られるが、特に、左に擧げる諸文書で、早く知

ることが出来る。

土規七則。

文武稽古萬世不朽之御仕法氣附書。

幽囚錄。癸丑中秋兄に寄せたる書。

(右第一の證左)

松下村塾記。議大義。幽囚錄。對策。松下村塾聯。

與和作思父書。(幽室文稿六ノ十七)

(右第二の證左)

講孟割記盡心篇首章。七生說。

(右第三の證左)

右の土規七則は、もと松陰が、野山在獄中に、從弟玉木彦助の元服祝に作つて贈つたものであるが、士道に就いて、金科玉條ともいふべく、村塾教育には、密接の關係がある故、その漢文の意を取つて、左に掲げることにする。

一 忠孝は人道の本なり人の禽獸と異なる所こゝにあることを知るべし

一 萬世一系の皇統を戴くは世界の中に我日本國のみ國民は先祖より護り來れるこの國を無窮に守るべし

一 正しき道理に因りて勇氣を振ふべし

一 詐り飾らず天地に對して愧ぢざる覺悟あるべし

一 書を讀みて昔の事をも知り善き人の言行を身の鑑となすべし

一 善き友と交りて有用の人物となるべし

一 萬難に屈せず人力を盡して天運に任すべし

松下村塾記は、久保氏の爲に作つたものであるが、それは、自身が公然教授を許されて居ないから、久保氏に託して書いたと見て宜いと思はれて、文中に言へる主旨は、明に、松陰自己の教育上の抱負を示してある。今その要領を左に擧げよう。

塾、係くるに村名を以てするは、誠に、一邑の人をして、入ては孝悌、出ては忠信ならしめば、村名之に係りて辱しめられず。然らずんば、一邑の辱ならざらむや。抑人の重すべきは君臣の義、國の最大切にすべきは、華夷の辨なり。今や君臣の義、講せられざること六百年餘、華夷の辨まで、併せて失ふ、神州に生れ、皇恩を蒙りて、内は君臣の義を失ひ、外は華夷の辨をも

忘れる。人の人たる所いづくにあるか。誠に能く、一邑の子弟を教誨し、上は君臣の義、華夷の辨を明にし、下は、孝悌忠信を失はず、邦家休美の感なるを馴致せば、萩城の眞に顯るゝこと是在あるべく。天下を奮發させ、四夷を震動させることあらむも量るべからず。

松陰は、右の思想で子弟に臨み、始て讀ませる書は、四書五經蒙求、十八史略國史畧の類で、時々戶外にて西洋兵式操練を演じ、又、擊劍相撲などもやらせた。つまり、世の儒家と違つて、主義は尊攘、所作は活々して居るから、門人益々多くなり、八疊の間が狭くなる。そこで安政四年に十疊半土間一坪の増築を行つたのである。その工事は、士弟の間にて勞働に服し、鋸を執るもの、鋸を手にするもの、土石を運ぶもの、それらに従事した。後年松陰の示諸生の文に、

村塾にて禮法を寛畧にするは、禽獸夷狄を學ばむことには非ず。ただ今の世、禮法が末に流れて虚飾と爲るにより、朴實もて之を矯めんと欲するのみ。新塾の初設に、諸生皆この道に率ひて

相交り、疾病艱難に相扶け、力役事故に相勞役し、手足の如く、骨肉の如し。増塾の役に、工匠を多く煩さざりしは、職として是に由る。

嘗て王陽明年譜を讀みしに、その門人を警發せしは、多く、山水泉石の間に在り。吾は陽明に非ざれども、朋友の切磋も、是の如くなるべし。是を以て、會講に連業に、未嘗て繩墨を設けず。交ふるに滑稽諧諷を以てす。近ごろ春米鋤圃の舉の如きも、亦此意を寓するのみ。擊劍踏水二事に至つては、武技の最切要なるもの、時方に盛夏、邊警また般なり。一日も弛ぶべからず、然れども、視て遊戯となし、實用を尙はずして、光陰を消し、學事を荒す、亦慮るべきなり。

學者自得する所なくして呶々多言するは、是聖賢の戒むる所なり。しかも偶々一得あり沈黙自護るは、余甚之を取つ。吾志は、已に語るべき無くば已む、苟も語るべきことあれば、牛夫馬卒と雖も、與に語らむとす。況や同友をや。

是等の文にて、村塾の教學の風が窺ひ知られる。私は、こゝで、萩城下當時の學舎の模様の大略を

述べよう。當時藩の學校明倫館は、近年より、規模廣大となり、學頭は、山縣太華已に退きて、小倉遜齋之に當り、其下に、教授、助教、講師、武藝師、小學教諭、講師があり、其他の事務員を合せて凡三十名、生徒は、寄宿生四拾五名、通學生を合せて數百名、教員の中に、各自宅にて、教授をするもの、館に關係なき人の家塾まで數へれば、城下の學舎は、一々數へ切れぬ程に多い。その内で、家塾の盛なのは、岡本權九郎の塾と、この松下村塾であつたと言ふ。さうして、明倫館にて、毎年定期に試験が行はれ、各塾師は、其門生を率ゐて受験に出たが、岡本の門人が最多かつたこの事、彼の木戸孝允、杉孫七郎、勝田四方藏、兒玉愛二郎、勝間田稔、山田春三などは、其門下であつた。松下村塾からも、若干の受験者が出たが、松陰は、謹慎整居の身で出頭は出来ない。元來、吉田の家は前にも少し申し通り、兵學の家で、其起源は松陰より九代前の友之允重矩が、始めて毛利家に仕へ、江戸で、山鹿素行の孫高基から、兵學の極秘三重の傳を受け、代々其流を繼い

で、士籍に列し、祿四十石を給せられ、明倫館に出勤して、他の文武師家同様に、教授處を與へられ、教授をなし、松陰の代になつても、幼少より、屢々藩主毛利敬親公の前にて、兵書や經書を講じ、賞賜を受け、十九歳で後見教授代勤人を解いた後は、兵學業家としての藩役益々多忙で、其間に、九州平戸の山鹿家、在江戸の山鹿家にも就いて、家學の蘊奥を叩き、遂に、藩主敬親公に、兵學皆傳をしたが、二十三歳の時、前年東國遊歴の藩許を得ても、過書の下付を待たず出發した咎により、缺落同罪とせられ、國に歸され、士籍を削られ、浪人の身となり、其後、寅次郎と改名し、君より、遊學を許されたが、彼の下田の一件で、罪餘の身となり、かくなる上は、祖先以來の主恩に報じ、日本國士の道を行ふは、唯この事業にあるのみといふ心持にて、村塾の教育で、隱然と、明倫館の教育の羽翼となつた。然るに、事實をよく知らぬものは、松陰の村塾の盛なるを言はん爲に、明倫館當時の教育を、つまらぬものゝ様に書く傾きがある。誰かの書いた吉田松陰傳には、村塾子弟の

續々入門することを記して、「藩學爲に空し」と書き添へて居る。一小村塾の門人が増せばとて、藩の大學校の生徒の数が減るのが見ゆるものか。特に、明倫館は、士分以上の入學する所、松下村塾には、士分でない、所謂陪臣輕卒の輩までも入門する。松陰は、明倫館には、貴賤に拘らず入學させるがよいとの意見であるが、藩の制度が、さうなつて居らぬから、陪臣輕卒の氣概ある人をは、別けて喜んで、收容したので、村塾諸生には、其格の人が多く、それが、明倫館生徒数の増減に係する筈がない。其上に、當時城下の士族の或部分は、この浪人者の私塾へ行くことを、甚嫌つたのである。子が往きたいと思つても、親が中々許さぬ、親は禁じないでも、親戚が不同意なのである。それを顧みずに往くやうならば、親類の交を絶つとまで警戒せられる。その不同意の徒は、往々誹謗の言を放ち、奥平謙輔の如きも其徒で、「牢に入りさへすれば偉い者の様に思ふのは間違つて居る」と、暗に松陰を誹り、湯淺右門といふ士は、きがいは、ちの字のぬけた御さちがい」の狂句

で、氣概ありと言はれる村塾師弟を誘つたといふ事。そこで、村塾に往學することを父兄が許しても、必ず一應は子弟に申聞せて、「讀書の稽古ならば善いが、御政事向きの事を議する様な事になつては濟まぬぞと戒め置く程であつた。さて其頃、明倫館内に、事務會とて、諸生一冊の書をも携へず集會し、先生の發問に對して討論を爲る事があつた。或時今の諸侯は、幕府の臣であるか、天朝の臣かと云ふ問の出た時は、議論容易に決せず、館中の久しき未定の争點となつたと云ふ。此論は、己に安政三年の十月に、松陰と、明倫館學頭山縣太華との間に起て居つて、太華は今の諸侯は幕府の臣にて天朝の臣ではないと言ひ、松陰は全く反對に天朝の臣であるとの論で、それが、松陰の著講孟割記に、太華が評駁してから、雙方の論戰となつたのである。明倫館にての討論は、其後に始つて居るやうであるから、察する所、松陰と太華との論から、城下の學者間の問題となつて、遂に、館の事務會に上つたのであらう。さて此議論の影響が藩士間の思想の二潮流となつて、幕臣論が、

後年の佐幕論となり、天朝臣論が、勤王論となつたことを見ても、松陰の松下村塾は、實際、勤王思想育成の處となつて居ることが推量せられるから、此點から考へると、松下村塾は、明倫館内其他一部の幕臣論者の爲には、隱然たる一敵國であつたであらうと思はれる。

こゝで少し申し述べて置くが、松陰は、あのやうに、尊王論ではあつたが、さりとて、幕府を討伐するとの意見は、早くは發表して居らない。安政二年三月九日には、僧月性に書を與へて、其討幕意見に反對し、同三年十月、前に述べた山縣太華評語の後に書する文には、吾生來未曾て幕府を輕蔑せずとまでは言つてあるが、同五年、幕府が、朝廷の勅許を受けずに通商本條約を結んだと聞いて、始めて、其の議大義の文に、征夷の罪、天地ゆるさず、神人みな憤らんこれを大義にてらすに討滅誅戮して然る後に可なり。と明言した。今一つは、松陰の外國に對する考は、尋常人の如く、彼より攻めて來るを防禦する打掃ふのみでなく、此方より進んで出て、彼等と周旋して國威を輝す

と言ふので、即ち前に言つた航海遠略である。此考は、十六歳の時、山田亦介といふ先輩に勵されて起り、更に、國典の講究にて、上古朝廷の外蕃に對する使節往來討伐の壯舉を知り、上古の文學、例へば祈年祭の祝詞などによつて、國民の抱負の大なりしを知り、それで、攘夷の意義に、大なる自信を持つこととなつたのである。是等は、松陰の思想を見る上に參考となることである。

始めて塾に來て教を乞ふ人があると、松陰は、何の爲に學問するかと問ふ。書物が讀める様にする爲といへば、書物が讀めても、實行を第一にせねばならぬ。實務に服する間に、自然と書が讀まれるものであると訓へた。

松陰は、何人に對しても、言語が丁寧で、門人でも、年長者には「あなた」、年少者には「おまへ」の語を用ひた。

松陰は、教授の外、自己の讀書作文より、飲食起居まで大抵塾中でした。日日の行事に、時を定めず、讀書を教へるにも時を定めず、其間に、運動にとて、一同戸外に出で、草を取り、又米を搗

くこともあつた。辨當を持たぬ諸生が、食時になつて自宅に歸らうとしても、業の仕が、りを中止せしめず、飯はこゝで食はせるといつて、杉家より飯を持ち來らせ、其席にて、師弟共に食ひ、菜は澤庵漬位のものであつた。

塾中の諸生、身分に高下はあつても、交は至つて平等的であつた。

松陰、前年來の己の罪を、人に明言して、訓誨の材料とした。

松陰、稽古に來る小供に、書を教へる前に、おれの首を締めて見よと云つて、力を極めて、首を扼せしめたり、袋じないで、自身に打ち込ませたりして、少時武藝の遊びをさせて、それから、儼然と、讀書を始めることがあつた。

左は、松陰の常の言である。

書を讀むものは、筆記に精力を費すが肝要である。博く學んで偏せぬこそ、學者の本領である。學校に入つて道を學ぶ自身が自己の反省をせず、騒しく教師に逼りて議論するは、悖禮である。經史子集は、皆、武教全書の注脚である。地を

離れては人なし。人を離れては事なし。人事を究めようと思へば先づ地理を見よ。

凡學問は、一に專にして精進するが肝要。杜預の左傳、司馬光が通鑑、本居宣長の古事記は、皆一生の心力を一つに盡し、何の書を見ても、一の目的の爲にしたのである。余深く弘法日蓮が、其法を弘める爲に、如何なる艱難をも厭はぬ勇氣を感心する。

獨立獨行、世の毀譽を顧みぬ氣象がなければならぬ。

左は、松陰の常の行である。

書を解するに、専ら文法から説き入る。

會讀の時は、往々徹夜をして、夜明に及ぶ。

文を作らねば、己の意を表すことが出來ぬとして、諸生に作文を勸める。作詩は勤めぬ。婦人の教育の大切なることを稱道する。

節句であつても、教授は休まぬ。他の塾師と違ふ。

杉氏の畑地に時々出て草を取り、諸生にも取らせつつ訓誨をする。

杉氏の家事の手助のため、米を搗き、門人と共に米搗臺に上つて、書を讀む。

忠孝の事蹟を講する時は、涙を呑み聲を顫はす。聽く者も感動する。

交際極めて廣く、一技に秀で、又奇節あるものは、貴賤の別なく、塾を訪ふ。

天下の同志の士、遠遊の門人より、世上の出來事を傳聞し、これを飛耳長目と題する冊子に入する。

酒を嗜まず、煙草を喫せず、又深く講生を戒めて、圍碁將碁を禁制する。

嚴冬といへども、襦袢、袴、羽織の外、他物を着用したことがない。

書畫骨董の娛が無い。江向の岡本塾生が書畫帳を携ふるを評して、國の幸でないといふ。

前にもいつた通り、松下村塾は、久保氏の稽古場で、松陰は、久保氏に附屬したる一教師、否、教師といふよりも、そこへ飛び入りたる親類客の格であるが、實際は、其御客さんが、主人同様の主要なる役を働いて勤王思想を養成する。自然に、

内々習ひ來るものが、之を先生として仰ぎ事へる。

併し松陰が、それらの人を吾門人など言つた事は、文章の上にては殆ど見ぬやうで、大抵、諸友、諸生ぐらゐの語を用ひてゐる。つまり友達の積りで、待遇して居たらしい。處が、其塾の教育は、直接には、松陰の感化を受けるが、間接にも感化を受けさせる者がある。それは、松陰に就いて讀書を學ぶ人でなく、松陰の年來親しくする知友である。

例へば、山縣半藏、松島瑞益、小田伊之助、中村道太郎、赤川直次郎、土屋矢之助、來原良藏、釋月性、小國融藏、秋良敦之助、釋默霖、岸御園、世良孫槌などがそれで、此人々等は、其主義とする所、性質が、必ずしも松陰と同一ではないが、皆各才藝氣象があつて、時々村塾を訪ねる人もあり、訪ねぬ人でも、書面にて、松陰と意見の交換をなし、學問上の疑を相質す、塾にての主客の談は、諸生が聞いて激發の資となり、師の書狀を持つて使に行く諸生は、先方の人に面接して、其直話を聞く等、種々の機會に益を得た。その次には塾に、富永有鄰といふ眇眼の人が、教師として置

いてあつたが、此人は、周防の生れで、久しく野山獄囚となり、松陰は、獄中で親しくなつたのである。松陰免獄後に、富永も、松陰の周旋で免獄となり、塾の教授を助ける事になつた。忠實に松陰の教育を助成し、其力の諸生に影響を及す所が尠少ではなかつたといふことである。

村塾の諸生訓育の事は、大體述べた。各生に就いての挿話も段々有るが、此度は略す。是から村塾が、當時の實事問題を、何處まで扱つたかを少し述べよう。

安政三年に、松陰と太華の間に、王臣論幕臣論の起つた事は、既に言つた。是が村塾教育の始つた年で、翌四年には、徳川幕府と外國との關係が益々進轉するにつれて、松陰の時事に對する感想は勿論痛切を加へる。これに連れて、土風の儉安が、塾中師弟の氣に障る。藩の當職即ち宰相の役をする益田彈正といふ人は、もと吉田の兵學門弟であるが、其領所が、長門國東北隅の須佐といふ邑で、そこには、育英館といふ稽古場があつて、小國融藏といふ人が師匠であつたが、そこには、

の機會となつた。村塾が狭きを告げて、増築したのは、四年十一月であつたが、右の通りに他處から、續々宿泊者が來るから、再び、舍を廣くする必要が起つて、眞の荒増の物を作り添へた。六月に、藩主毛利敬親公が、江戸から歸られたとき、松陰の狂夫之言を、當職の益田が、公に視せた處が、公は大に感稱して、彼は幽囚でも、意見があるならば、用捨なく言はせよと言はれて、松陰の隨時の意見が、容易に、藩主に上達する様になり始めて、その上に、其七月には、家學教授の爲に門人を引見することが許され、當職益田は、やはり舊來の門人で、其臣なる須佐人士と關係が親しくなつて、益田の命で其臣が村塾へ、内々諮詢に來ることもあり、且つ藩政府に、前田孫右衛門、周布政之助が居るので、松陰の意見はよく用ゐられ、塾に出入する者、暗に仕官の便宜を得る程になつたといふことで、是が、松下村塾全盛時代である。然る處、世上は、幕府と外人との關係が、益々急切になつて、六月二十一日、勅許を待たず、米國と通商條約締結をしたので、其報が傳は

小國始め、學力氣概ある人が多いので、松陰は、常に之に注目し、松下と嵩佐とが左右の手とならば、四海兄弟の親睦は、これより始まるであらうといつてゐる位で、此頃から、小國と聯絡を結び始めたのである。處が、安政五年の始に、松下江南の調停といふ事があつた。江南とは江向といふ地の事で、前述した岡本氏の盛な塾がある。その先生は、風流文事が好で、書樓を起して、文人騷客を會し、詩酒を樂みとする。藩政府の周布政之助以下は、大抵文酒の徒で、其會合者である。そこは、村塾の方からは、政府の者は、此多事の時に宴安に耽つて居ると誹り、政府の人は、村塾の者を指して徒黨を組で、不穩の事を起すかなどと疑ひ、互に反目して、衝突すれば大議論となる。松陰は、之を憂へて、同志の月性に報じたから、月性が、周防の遠崎から、やつて來て、骨折つて調停したのである。一方では、松陰は、狂夫之言といふ題號の下に、藩の弊風矯正意見を書いたが彼の須佐の諸生と、松本の諸生が、相互に往來して、數日滞在相切惚する事が始つて、兩團體研鑽

るや、松陰の憤激一方ならず。前述した議大義は、この時の作で、之は藩主へ出したのである。是より、世事に注視を怠らず、門生中、京、江戸に遊學するもの、親友中、役目で、東行する者、門生中の足輕格で公役で往くものがあると、其先方に居る人に與へる書を作つて、其人々に托し、或は、其人々に事情を探索させ、飛耳長目となつて貰ふのが常であつた。又、塾内では、時事に關して、策問を出して諸生の答案を求め、藩主の號令に對して、不慮に備へる申合條項を決し、氣が付き次第に書きつく事にして置いた。かくする内に、七月頃には、彦根藩が、主上を擁し奉る企ありと聞いて、松陰一層之に懸念し、兵車の戍兵を増すと稱して、兵を上國に出すべしと政府に忠告した。又、京都の大原重徳卿が諸侯を頼んで勤王を行ひたいとの志あるを聞いて、度々、書を以て、その西下を勧めた。その内に、間部下總守が、京にて志士を捕へると聞いて、之を要撃せむと、同盟を作つて、日を期し出發する覺悟であつたが、政府の方では、勤王の事は、君公出で、適當の手段を

取られるから、今は差控へて居れと言ふ。政府がさう言へば、君公が自ら出でられるのは危計である。松陰が議論だけでなく、塾生の言論と反対する。松陰が議論だけでなく、塾生の言論が、激しいから、此頃は、政府も、大分、松下村塾が邪魔物のやうに思つて居たらしく、遂に、玉木文之進へ、政府の意を傳へて、松陰を、杉家の一室に謹慎させることになつた。そして間もなく、十二月五日に、野山獄を借用せよとの命があつて、二十九日、入獄することとなり、そこで、松下村塾には、松陰の俤を見ぬことになつた。

以上の行掛りで考へると、松陰の松下村塾の教育事業は、讀書訓練より始まつて、時務の討究に進み、其の實行方面に傾向して、遂に、その中心人物たる吉田松陰が、家に嚴囚せられ、野山獄に投せられねばならぬ程に、教育が藩政に接近したといつてよいと思ふ。

松陰は、出發前に詩を作つて村塾に書き留めた。其詩をよめば、左の通りになる。

寶祚天壤と隆に、
千秋その貫きを同じうす。

いかにせむ今世の運、

大道燦爛に屬するを。

今我岸獄に投せられ、

諸友半は難に及ぶ。

世事言ふべからず、

この擧かへつて觀るべし。

東材季明を振はし、

大學衰漢を持す。

松下は陋村なり、雖も神國の幹となりむことを誓ふ。

松陰を載せて行く輿のあとを見送る親戚門人十四名、松陰は、復、左の詩を作つた。

吾を送る十四名、

離別なんぞ多情なる。

松下まさに隆起すべし、

村君義盟を主らん。

村塾は、松陰が去つても、諸生讀書は衰へず、小田村伊之助が、松陰の妹婿で、塾生の取締をして、益々勉勵したといふ、其上、獄中より、松陰が、書を以て激勵するから、教育の方針にも變り

はなかつた。

後、松陰、安政六年五月二十四日まで在獄し、其間に藩主の江戸参觀の引止運動を企て、出來なかつた事があるが、村塾にはあまり關係の密ならざる事であるから略す。五月二十五日には、江戸護送の途に上り、幕府に於て、間部要撃企畫の白狀により、罪の裁斷斬首となり、其年十月二十七日、小塚原刑場の露と消れた。是に至つて、松下村塾の遺弟は義憤益強く、勤王討幕の念益固く、萬延、文久、元治、慶應と、移り變る時勢の浪に幾度か打たれて、萬苦の中に、長州藩士の主力となつた。今其著名なる人々の姓名を左に掲げて、此編の收結とする。

- 桂 小五郎(木戸孝允) 伊藤 利輔(博文)
- 山縣 小輔(有朋) 山田市之允(顯義)
- 品川 彌二郎 野村 和作(靖)
- 益田 彈正(右衛門介) 入江 杉殿(九一)
- 釋 提山(松本鼎) 高杉 晋作
- 久坂 玄瑞(義助) 飯田吉次(俊徳)
- 作間忠三郎(寺島氏) 時山 直八

河北義次郎(俊弼)

吉田榮次郎(稔丸)

杉山 松介

松浦龜太郎

中谷 正亮

佐世八十郎(前原一誠)

有吉熊次郎

馬島 甫仙(誠一郎)

(終)

感懷 吉田松陰

四夷交侮我
 國恥不可挽
 堂堂大八洲
 皇威日益損
 三餘是我身
 一死既太晚

編輯餘録

- ◆本號は意外に原稿が輻輳した爲に、發行日が例年より少し遅れた。此の點御待兼の會員諸君の御寛容を乞ふ次第である。
- ◆岩田先生からは御多忙中の處を無理に御願して玉稿を戴いた。一同に代りまして厚く御禮を申し上げます。
- ◆菊の花の匂ふ晩秋に退職の後長い間病床に居られた中津江先生が逝かれた。中津江先生は丈夫振の勇ましい歌を作る人だった。僕は三度お會ひしたゞけで、其後學校も辭められたから、よく先生の事は知らないけれどお年も若かつた丈に惜しい事であつたと思ふ。御遺族の御悲歎を考へるゝ斷腸の思がする。謹んで哀悼の意を表する次第である。
- ◆我が校の雜誌は一面郷土愛の描繪も見られる。これは我が校の雜誌の特色であり誇りでもある。そこをよく考へてこの雜誌も熟讀して欲しい。それと同時に、今からこの雜誌にも、時勢に則して、俗悪輕佻に流れない限り明るい近代風な新鮮味も加へて行きたい。號を重ねるに従つて、この雜誌が益々円満に生長するやうに會員諸君も努力して貰ひたい。
- ◆今日校正のペンを擱く。やれ／＼と思ふ。外では寒い雨が蕭々とし色づいた夏蜜柑の密林に降つてゐる。静寂な年の暮である。

(編輯子)

昭和二年十二月二十五日印刷納本
 昭和二年十二月三十日發行
 發行兼 山口縣阿武郡萩町 三輪 勲
 編輯者 山口縣阿武郡萩町大宇西田町 荒瀬 徳治
 印刷者 山口縣阿武郡萩町大宇西田町 信清 舍印刷所
 印刷所 信清 舍印刷所

